

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 231

田益田中遺跡 2

独立行政法人国立病院機構岡山医療センター
病棟等新築整備工事に伴う発掘調査

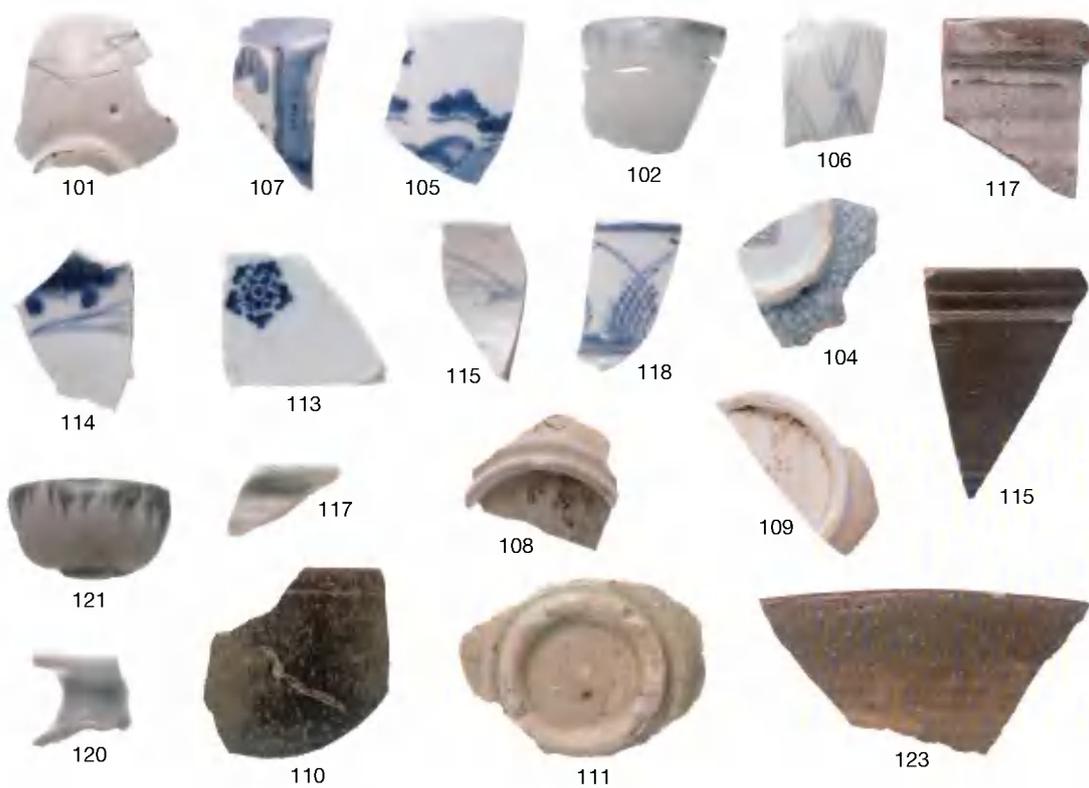
2011

独立行政法人国立病院機構岡山医療センター
岡山県教育委員会

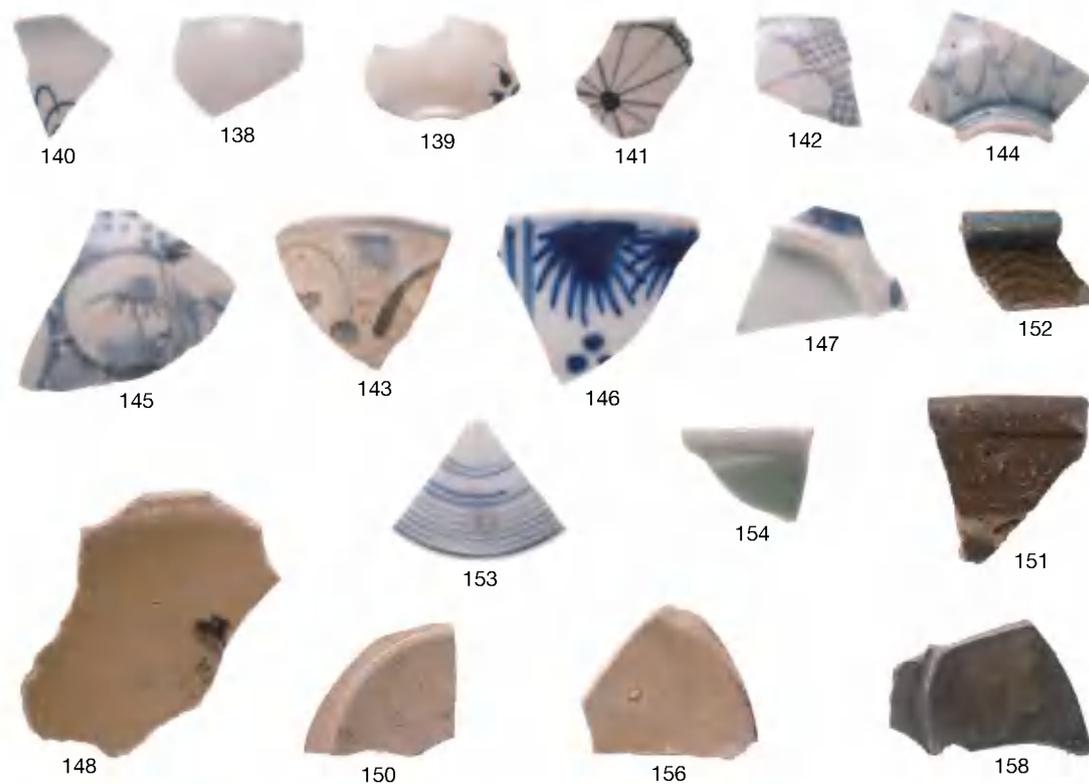


2区全景（北西から）

卷頭図版 2



1 近世陶磁器 1



2 近世陶磁器 2

序

岡山医療センターは、岡山市の中心から北へ約10km、桃太郎伝説で名高い笹ヶ瀬川と山野に囲まれた閑静な環境にあります。中国地区の基幹病院として、永らく地域医療の中核的役割を担ってきましたが、平成11年3月の国立病院療養所再編計画見直しにより、高度の医療を提供する総合医療施設として位置づけられ、平成16年4月に独立行政法人となったあとも、国の政策医療を担う施設として重要な役割を果たしています。

平成7年から平成9年、この岡山医療センターの建設に先立って田益田中遺跡の発掘調査が実施され、弥生時代の人面付き土器や銅剣の鋳型といった注目すべき遺物を伴う弥生時代から江戸時代の集落跡が確認されました。

このたびの病棟等新築整備工事に伴う発掘調査においても、縄文時代の河川や弥生時代の水路、室町時代の建物跡など、この地域の人々の暮らしぶりを物語る貴重な成果が得られました。

本書が、地域史研究の資料として、また文化財保護の一助として、広く活用されることを期待いたします。

最後に、発掘調査及び報告書作成に当たられた岡山県教育委員会をはじめ、その実施に際して御理解・御協力を賜った関係機関や地元住民のみな様に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

独立行政法人

国立病院機構岡山医療センター

院長 三河内 弘

序

本書は、独立行政法人国立病院機構岡山医療センターの病棟新築に伴い発掘調査を実施した田益田中遺跡の発掘調査報告書です。

笹ヶ瀬川の上流に開けた津高地区は、奈良時代の津高郡津高郷にあたり、古代山陽道が東西に走る交通の要地でした。また周辺の丘陵部には、西山古墳群・奥池古墳群などの群集墳や、白壁奥遺跡・奥池遺跡などの製鉄遺跡があり、御野平野に暮らす人々の奥津城として、あるいは鉄の供給地として、重要な役割を果たしていたものと考えられています。

笹ヶ瀬川の西岸に位置するこの遺跡は、山陽自動車道の建設に伴う確認調査においてその存在が確認され、平成7年から平成9年には岡山医療センター及び笹ヶ瀬川調節池の建設に伴い発掘調査を実施しました。この調査によって、弥生時代から江戸時代にかけて営まれた集落や水田の跡が確認されましたが、中でも弥生時代の人面付き土器や銅剣の鋳型は、中・四国地方でも類例のない遺物として大いに注目されました。

このたびの調査でも、やはり弥生時代前期から室町時代にわたる集落跡や、江戸時代の水田跡が検出され、当時の生活の一端が明らかとなりました。

本書が地域史研究の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを期待いたします。

発掘調査および報告書作成にあたりましては、独立行政法人国立病院機構岡山医療センターをはじめとする関係機関や地元住民のみなさんに御理解・御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 児 仁 井 克 一

例 言

- 1 本書は、独立行政法人国立病院機構岡山医療センターの病棟等新築整備工事に伴い、岡山県教育委員会が実施した田益田中遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 田益田中遺跡は、岡山県岡山市北区田益1711- 1に所在する。
- 3 発掘調査は、1,481 m²を対象として岡山県古代吉備文化財センターが実施し、平成21年4月1日～7月31日、平成22年1月4日～2月26日にかけて、亀山行雄・杉山一雄（～7月31日）・和田剛（～6月30日）・川島正嗣（7月1日～31日）が担当した。
- 4 本書の作成は、亀山（平成21年8月1日～9月30日、平成22年3月1日～31日）、杉山・川島（平成21年8月1日～9月30日）が担当して実施した。
- 5 本書の執筆は亀山・杉山・和田・川島が分担して行い、全体の編集は亀山が担当した。
- 6 本書の作成にあたり、遺物の時期・材質などに関する鑑定・同定を下記の諸氏に依頼して有益な御教示を受けた。記して厚くお礼申し上げる。

・陶磁器の鑑定	藤澤良祐（愛知学院大学）
	乗岡 実（岡山市教育委員会）
・鉄滓の鑑定	大澤正己（たたら研究会）
・石材の同定	鈴木茂之（岡山大学）
- 7 自然遺物に関する同定・分析は下記の機関に委託した。

・鉄滓の分析	(株)九州テクノリサーチ
・木材の樹種同定	(株)パレオ・ラボ
・土壌の植物化石同定	(株)パレオ・ラボ
- 8 本書の遺構写真は調査員が撮影した。また、遺物写真の撮影にあたっては江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 9 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山県岡山市北区西花尻1325- 3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度は海拔高である。
- 2 本書に用いたグリッドは、国土座標（世界測地系）に準拠しており、方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。
- 3 本書に収載した遺構・遺物図の縮尺は、掘立柱建物を1/60、土塋を1/30・1/40・1/60、土器・陶磁器を1/4、石製品を1/2・1/3・1/4、土製品を1/3、金属製品を1/3に統一している。
- 4 本書に収載した遺物図には、石製品に**S**、土製品に**C**、金属製品に**M**の記号を番号の前に付した。
- 5 土層や遺物の色調は、「新版標準土色帖」による。
- 6 本書に収載した周辺遺跡分布図は、国土地理院発行1/25,000「岡山北部」・「岡山南部」を複製して使用した。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 序説	1
第1節 遺跡を取り巻く環境	1
第2節 調査の経緯と経過	4
1 既往の調査	4
2 調査の経緯	4
3 調査の経過	6
第2章 調査の概要	7
第1節 概要	7
第2節 古代以前の遺構・遺物	11
1 縄文時代	11
2 弥生時代	14
3 遺構に伴わない遺物	18
第3節 中世以後の遺構・遺物	20
1 中世	20
2 近世以後	25
3 遺構に伴わない遺物	32
第3章 総括	33
第1節 田益田中遺跡の変遷	33
1 縄文時代以前	33
2 弥生時代	34
3 古墳時代	37
4 古代	38
5 中世以後	39
第2節 田益田中遺跡の環境考古学分析	42
第3節 田益田中遺跡出土製鉄関連遺物の分析	46
遺構一覧表・遺物観察表	48
図版	
報告書抄録	

目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第20図 近世以後遺構配置図1 (1/300)	23
第2図 周辺の遺跡 (1/30,000)	2	第21図 近世以後遺構配置図2 (1/300)	24
第3図 調査位置図 (1/6,000)	5	第22図 土壌4 (1/40)・出土遺物 (1/4)	25
第4図 調査区配置図 (1/800)	7	第23図 土壌5 (1/30)	25
第5図 検出遺構全体図 (1/300)	8	第24図 土壌6 (1/40)	26
第6図 調査区土層断面図1 (1/80)	9	第25図 土壌7・8 (1/60)・出土遺物 (1/4)	26
第7図 調査区土層断面図2 (1/80)	10	第26図 土壌9～11 (1/30・1/40)・出土遺物 (1/3・1/4)	27
第8図 河道1 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)	11	第27図 溝5 (1/40)・出土遺物 (1/4)	28
第9図 縄文時代遺構配置図 (1/300)	12	第28図 水田1 出土遺物 (1/3・1/4)	29
第10図 河道2 (1/60)・出土遺物 (1/4)	13	第29図 水田2 出土遺物 (1/3・1/4)	30
第11図 土壌1・2 (1/30・1/40)・出土遺物 (1/4)	14	第30図 水田3 出土遺物 (1/3・1/4)	31
第12図 弥生時代遺構配置図 (1/300)	15	第31図 水田4 出土遺物 (1/3・1/4)	32
第13図 たわみ1 (1/40)、溝1～3 (1/30)・ 出土遺物 (1/3)	16	第32図 遺構に伴わない遺物 (1/3)	32
第14図 溝4 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	17	第33図 縄文時代遺構全体図 (1/5,000)	34
第15図 遺構に伴わない遺物1 (1/2)	18	第34図 弥生時代前期遺構全体図 (1/5,000)	35
第16図 遺構に伴わない遺物2 (1/3・1/4)	19	第35図 弥生時代中期遺構全体図 (1/5,000)	36
第17図 掘立柱建物1 (1/60)	20	第36図 弥生時代後期遺構全体図 (1/5,000)	37
第18図 中世遺構配置図 (1/300)	21	第37図 古墳時代前期遺構全体図 (1/5,000)	38
第19図 掘立柱建物2 (1/60)、土壌3 (1/30)、 たわみ2 (1/40)・出土遺物 (1/4)	22	第38図 試料採取層位 (1/60)	43
		第39図 鍛冶滓、鉍石製錬滓、炉壁の顕微鏡組織	47

図版目次

巻頭図版1	2区全景 (北西から)	3 土壌2 (北東から)
巻頭図版2	1 近世陶磁器1	4 土壌3 (南東から)
	2 近世陶磁器2	図版6
図版1	1 河道1 (北西から)	1 土壌5 (西から)
	2 河道1土層断面 (南東から)	2 土壌6 (東から)
図版2	1 河道2 (北西から)	3 土壌7 (南西から)
	2 河道2土層断面 (北から)	4 土壌10 (南から)
図版3	1 溝2・4 (北から)	5 水田1 (北西から)
	2 溝4土層断面 (北西から)	図版7
図版4	1 中世以前の遺構検出状況1 (北から)	1 水田3 (北西から)
	2 中世以前の遺構検出状況2 (北西から)	2 水田3 (北西から)
図版5	1 掘立柱建物2 (南東から)	図版8
	2 溝1 (北から)	1 縄文土器
		2 中世の土器・陶磁器
		図版9
		1 近世・近代陶磁器
		2 石製品
		図版10
		1 土製品
		2 金属製品

第1章 序 説

第1節 遺跡を取り巻く環境

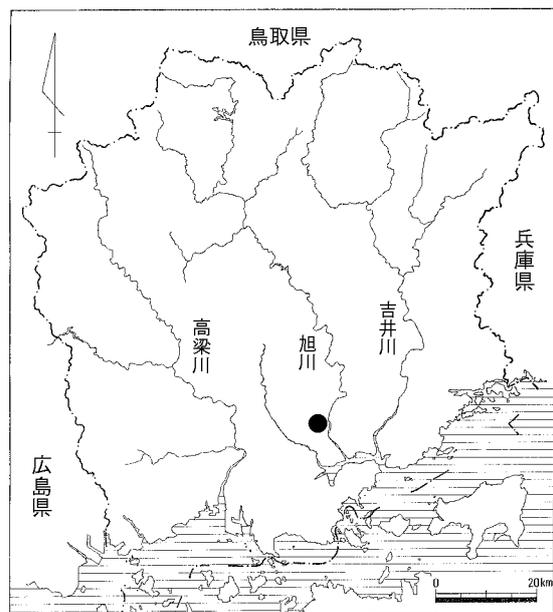
田益田中遺跡は岡山市街地北に位置する津高地区のほぼ中央、現在の行政区分では岡山市北区田益に所在する。津高地区は岡山平野中央を南流する笹ヶ瀬川上流域に形成された、東西約1 km、南北約5 kmの平野を中心とする地域である。田益田中遺跡はこの平野のほぼ中央に位置し、笹ヶ瀬川とその支流から運ばれた土砂により形成された微高地上に位置している。また、遺跡の位置する平野の四方には丘陵が広がっている。平野の北東から東側にかけては、金山(499 m)や笠井山(340 m)などの山塊が連なる。一方、平野西側には吉備高原の南端にあたる低丘陵が、平野南側にはダイミ山(160 m)、半田山(152 m)などからなる半田山丘陵が広がっている。このように、津高地区は笹ヶ瀬川流域に形成された平野と山塊、丘陵群からなる単的小盆地であると言える。

この津高地区では1990年代以降、大規模な公共事業に伴う発掘調査が相次ぎ、それらの成果から、この地区に生きた人々の具体的な足跡が知られることとなった。今回調査した田益田中遺跡でも平成2年～9年にかけて実施された発掘調査により、縄文時代後期～近世にかけての集落跡が確認された。

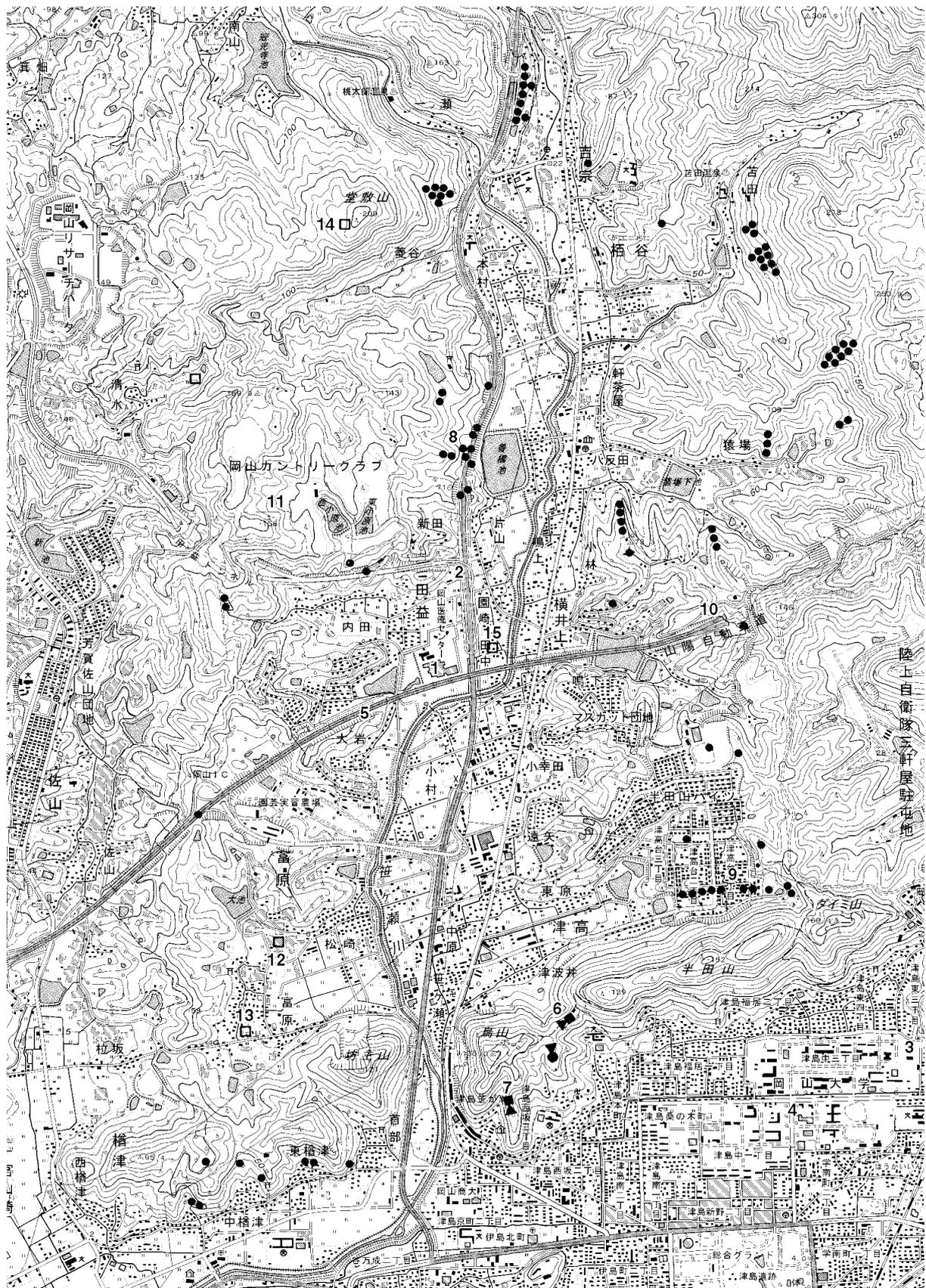
さて、この津高地区で最も古い人類の足跡は後期旧石器時代に遡る。田益田中遺跡では縄文時代の河道内よりサヌカイト製ナイフ形石器の出土が報告されており、近辺に同時代の遺跡の存在が指摘できる。続く縄文時代には田益田中遺跡や田益新田遺跡で縄文時代後期～晩期にかけての河道や土壇、溝などが検出されており、この時期、人々の生活領域が沖積平野へと広がったと推察できる。

弥生時代になると、本格的な稲作導入を契機とした人口増を背景にして、平野部のみならず、丘陵上も含めて、津高地区全域での遺跡の展開が見られる。田益田中遺跡では弥生時代前期～後期にかけての竪穴住居や溝、土壇などが確認されている。また、田益新田遺跡では弥生時代後期末～古墳時代初頭の建物や土壇などの遺構が検出されている。これら平野部だけでなく、丘陵上の遺跡としては、弥生時代後期後半の集落跡である大岩遺跡のほか、弥生時代中期末～後期中頃にかけての竪穴住居や貯蔵穴などが検出された津高住宅団地造成地内遺跡などがある。これらの遺跡群はそれぞれ中心となる時期が異なり、弥生時代中期以降に平野部と丘陵部で集落移動のあったことがうかがえる。

古墳時代では、津高地区全体で130基余りの古墳の存在が知られている。古墳時代前半期の



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- | | | | | |
|-----------|----------|-----------|-------------|------------|
| 1 田益田中遺跡 | 2 田益新田遺跡 | 3 朝寝鼻貝塚 | 4 津島岡大遺跡 | 5 大岩遺跡 |
| 6 都月坂1号墳 | 7 七つ坑1号墳 | 8 西山古墳群 | 9 津高住宅団地遺跡群 | 10 白壁奥製鉄遺跡 |
| 11 小原製鉄遺跡 | 12 荒神廃寺 | 13 津高駅推定地 | 14 堂敷山廃寺 | 15 田中城跡 |

第2図 周辺の遺跡 (1/30,000)

首長墳はいずれも津高地区南の半田山丘陵上に位置しており、ここには古墳時代初頭の前方後方墳である都月坂1号墳、七つ坩1号墳や古墳時代中期の一本松古墳が存在がする。こうした状況は古墳時代後期になると一変し、半田山丘陵上での古墳築造が停止する一方、平野北側の丘陵上を中心に100基を超える横穴式石室を内部主体とする古墳が築かれる。津高地区中央付近に位置する西山古墳群や青谷5号墳では銀象嵌装飾付大刀や馬具が出土しており、この地域の有力首長墓であると考えられる。また、7世紀代に築造された富原西奥古墳は、備前地域で数少ない終末期方墳の一つである。これらから、6世紀後半～7世紀にかけて、この地域の有力者層の急速な台頭を読み取ることができる。

こうした台頭の要因の一つとして、鉄生産の隆盛が挙げられる。津高住宅団地造成内遺跡の一つである猪ノ坂南遺跡や新田上西遺跡、あるいは白壁奥遺跡などでは7世紀代の製鉄炉や炭窯が見つかり、この津高地区に大規模な製鉄地帯のあったことが明らかとなっている。

律令制下における津高地区は備前国津高郡津高郷に含まれていた。そして津高地区南部を横断するように山陽道が通っていたとされ、津高地区南西部にある富原地区には津高駅跡と推定されている富原遺跡が所在している。また白鳳時代の創建と考えられる荒神廃寺（富原北廃寺）もあり、津高地区は古代交通の要衝として重要な役割を担っていたようである。なお、現在もこの地域に残る津高条里の敷設時期に関する確証はこれまでのところなく、検討課題である。

鎌倉時代における津高地区の動向は明確ではない。続く南北朝の争乱を経て、室町時代には備前・播磨・美作の守護を務めた赤松氏の支配下に入った。なお、この時期の集落は田益田中遺跡で検出されている。東寺文書の嘉吉2年（1442）の項に、この地域にあったと考えられる津高荘に関する記述があり、関連が注目される。戦国時代には文明15年（1483）第二次福岡合戦を経て台頭した備前国守護代、松田氏の支配領域となった。津高地区の平野中央にある田中城跡（田益城）は、この松田氏旗下の有力国人である横井氏の居館跡とされる。戦国期の横井氏は、天文9年（1540）宇垣氏と連署して松田元堅の奉行人を務めた横井氏明（土佐入道）や横井氏家（土佐守）の存在が知られている。現在、田中城近辺は宅地化され、その遺構は明確ではないものの、地割りとして堀の跡や井戸跡などが残っており、平地式城館としての面影を残している。

津高地区は江戸時代には備前一国を治めた池田氏の統治下となり、藩財政を支える穀倉地帯としての役割を担っていた。今回の田益田中遺跡の調査でも17世紀～19世紀にかけて、条里地割りにほぼ沿う形状の水田の営まれていたことが明らかとなっている。また、山陽自動車道建設に際して調査が行われた大岩墓所は、岡山藩の番頭をつとめた池田家の墓地である。

津高地区は明治22年（1889）の町村制施行を経て、昭和46年（1971）に岡山市に編入された。現在、この津高地区は山陽自動車道岡山ICの所在地となっている。これに接続し、津高地区を南北に縦断する国道53号と併せ、岡山県の交通の結節点として発展を遂げつつある。（和田）

主要参考文献

『岡山県史』第2巻・第3巻・第18巻 岡山県史編纂委員会 1986・1989・1992

『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109・128・140・141 岡山県教育委員会 1996・1998・1999

『横井村誌』津高郷土研究会編 1940

永山卯三郎『岡山縣農地史』1978

岡山市教育委員会「津高住宅団地造成地内遺跡発掘現地説明会資料」1991

第2節 調査の経緯と経過

1 既往の調査

平成3年2月、山陽自動車道の路線内に広がる津高条里を対象として確認調査を実施したところ、弥生時代の遺構が検出されたことから、田益田中遺跡と呼称して4月から全面調査を行った。この調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居や掘立柱建物・井戸・土壙が、南へ流れる弥生時代前期～後期の溝や河道と重複して検出された。

平成6年11月には、山陽自動車道の北側に国立岡山病院の移転が計画されたことから確認調査を実施したが、ほぼ全域にわたって遺構の存在が予想されたため、平成7年～9年にかけて全面調査を実施した。調査は、病院本体部分と調整池部分に分けて実施し、その総面積は86,000㎡にもものぼる。これにより、弥生時代～江戸時代の集落跡や縄文時代に遡る河道などが検出されたが、特に弥生時代前期の河道から出土した人面付き土器や弥生時代後期の溝から出土した銅剣鑄型は中・四国地方でも類例のない遺物として注目された。

このほか、北に300m離れた丘陵裾部では、平成4年度に国道53号（岡山北バイパス）建設に伴う発掘調査が、平成5年度には県道岡山・賀陽線（吉備新線）建設に伴う発掘調査が実施され、弥生時代～中世の集落跡とともに、田益田中遺跡に繋がる縄文時代～古墳時代の河道が検出されている。

2 調査の経緯

平成18年10月、独立行政法人国立病院機構岡山医療センターから病棟新築の計画が岡山県教育庁文化財課に示された。当該地には周知の埋蔵文化財包蔵地「田益田中遺跡」が所在しており、同センターの建設にあたって全面調査を実施していることから、この部分についても平成21年度に発掘調査を実施することとなった。

平成21年4月、重機により厚さ2mほどの造成土を除去したうえで、発掘調査に着手した。調査は、

文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第93条）

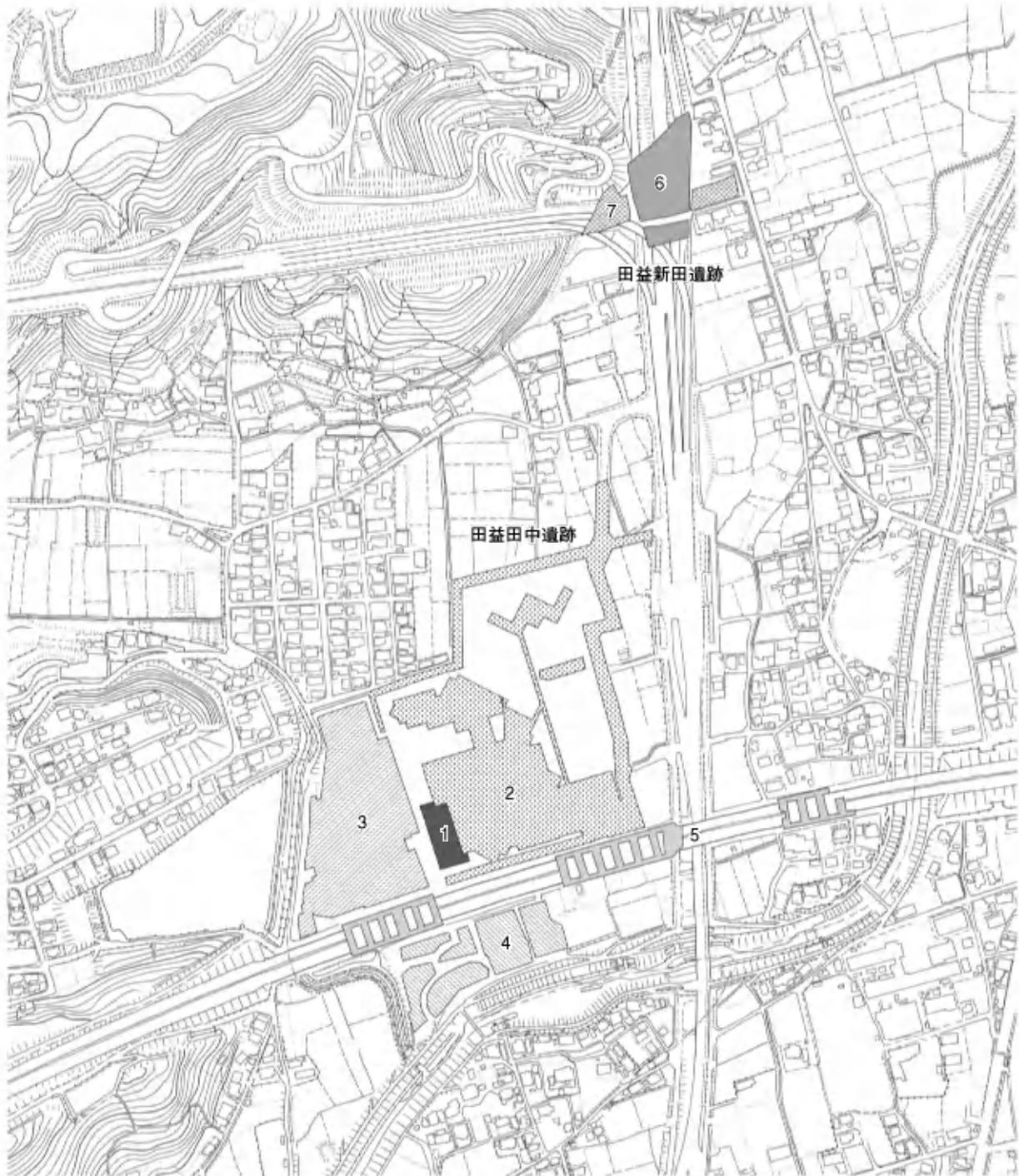
番号	文書番号 日付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	目的	通知者	指示事項
1	教文理 第1473号 H21.3.23	集落跡 田益田中遺跡	岡山市北区田益 1711-1	1,500	病棟新築	(独) 国立病院機構岡山医療センター院長	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第12号 H21.4.7	集落跡 田益田中遺跡	岡山市北区田益 1711-1	1,650	病棟新築	岡山県古代吉備文化財センター 所長 児仁井克一	亀山行雄・杉山一雄・ 和田剛	H21.4.1～ H22.3.31

埋蔵文化財発見の通知（法第100条）

番号	文書番号 日付	種類および名称	所在地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文理 第1231号 H22.2.24	土器・陶磁器・石製品・土製品・ 金属製品 計10箱	岡山市北区田益 1711-1	H21.4.1～H22.3.31	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	(独) 国立病院機構	岡山県古代吉備文化財センター



- | | | | |
|----------------|-----------------|---------------|---------------|
| 1 国立岡山病院 (H21) | 2 国立岡山病院 (H7～9) | 3 調節池 (上池調査区) | 4 調節池 (下池調査区) |
| 5 山陽自動車道 | 6 国道53号バイパス | 7 県道岡山賀陽線 | |

第3図 調査位置図 (1/6,000)

排土処理の都合上、北側の1区と南側の2区に区分して、1区から調査に取り掛かった。過去の調査では津高条里にかかわる手がかりが乏しかったことから、このたびの調査では近世水田から層位を追って掘り下げを行い、条里地割が中世以前にさかのぼり得ることを確認した。このほか、前回の調査で確認されている縄文時代の河道や弥生時代の土壌・溝、中世の掘立柱建物・土壌などを検出した。

なお調査地の南東部分については、既存施設の撤去が遅れたため、年度末に改めて調査を実施している (3区)。(亀山)

3 調査の経過

調査と整理の体制

平成21年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 増本 好孝

文化財課

課長 三村 修

参事 田村 啓介

総括副参事 (埋蔵文化財班長)

光永 真一

主任 米田 克彦・平井 利尚

岡山県古代吉備文化財センター

所長 児仁井克一

次長 (総務課長事務取扱)

小林 勝

参事 中野 雅美

〈総務課〉

総括副参事 (総務班長)

上田 利弘

主任 中島 忍

〈調査第二課〉

課長 島崎 東

総括副参事 (第二班長)

岡本 寛久

主幹 亀山 行雄 (調査・整理担当)

主任 杉山 一雄 (調査・整理担当)

主任 和田 剛 (調査担当)

主事 川島 正嗣 (調査・整理担当)

日誌抄

平成21年

- 4月7日 (火) 発掘資材搬入、第一次調査開始
- 4月9日 (木) 1区表土掘削 (~10日)、調査着手
- 4月23日 (木) 近世遺構写真撮影、実測
- 5月13日 (水) 中世以前遺構写真撮影、実測
- 5月18日 (月) 1区南表土掘削、調査着手
- 5月22日 (金) 1区南調査終了
- 5月25日 (月) 河道1検出、掘り下げ
- 6月2日 (火) 河道1写真撮影、実測
- 6月3日 (水) 1区調査終了
- 6月4日 (木) 2区表土掘削 (~5日)、調査開始
- 6月19日 (金) 近世遺構1写真撮影、実測
- 7月6日 (月) 近世遺構2写真撮影、実測
- 7月23日 (木) 中世以前遺構写真撮影、実測
- 7月24日 (金) 河道2検出、掘り下げ
- 7月28日 (火) 河道2写真撮影、実測
- 7月29日 (水) 2区調査終了
- 7月30日 (木) 発掘資材撤収、第一次調査完了
- 7月31日 (金) 図面・写真の整理
- 8月3日 (月) 遺物復元・実測に着手、整理作業開始
- 8月31日 (月) 遺物復元終了
- 9月7日 (月) 遺構・遺物図トレースに着手

- 9月11日 (金) 乗岡氏による出土陶磁器鑑定
- 9月24日 (木) 自然遺物分析を(株)パレオ・ラボに委託
- 9月30日 (水) 遺物実測終了、整理作業中断

平成22年

- 1月4日 (月) 発掘調査準備
- 1月15日 (金) 鉄滓分析を(株)九州テクノロジーリサーチに委託
- 1月18日 (月) 発掘資材搬入、第二次調査開始
- 1月19日 (火) 3区表土掘削、調査着手
- 1月26日 (火) 近世遺構写真撮影、実測
- 2月5日 (金) 中世以前遺構写真撮影、実測
- 2月19日 (金) 河道2写真撮影、実測
- 2月23日 (火) 3区調査終了
- 2月24日 (水) 発掘資材撤収、第二次調査完了
- 3月1日 (月) 整理作業再開
- 3月12日 (金) 遺構・遺物図トレース終了
- 3月15日 (月) 割り付け着手
- 3月31日 (水) 割り付け終了、整理作業完了

第2章 調査の概要

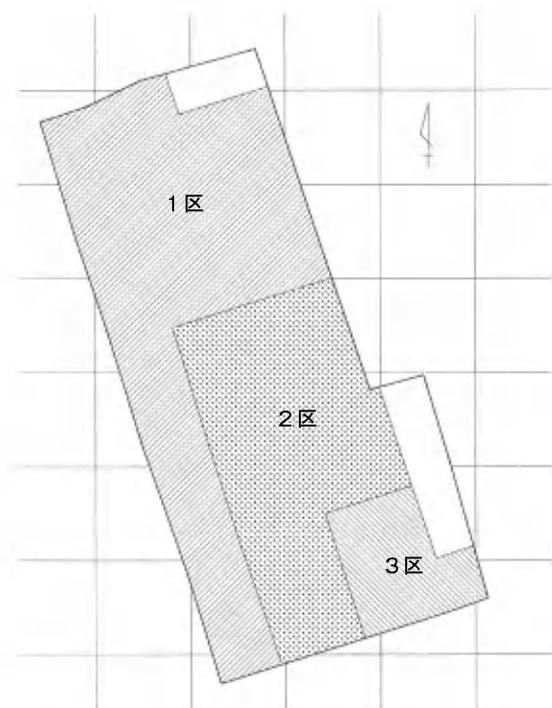
第1節 概要

このたびの調査地点は、岡山医療センターの南西隅にあたり、平成7～9年に発掘調査が実施された国立病院本館調査区と笹ヶ瀬川調節池（上池）調査区の間に位置している。調査は、病棟建設予定地のうち屋外リハビリ庭園として使用されていた箇所を北半の1区と南半の2区、さらに液酸タンクが設置されていた箇所を3区と呼称して実施した（第4図）。

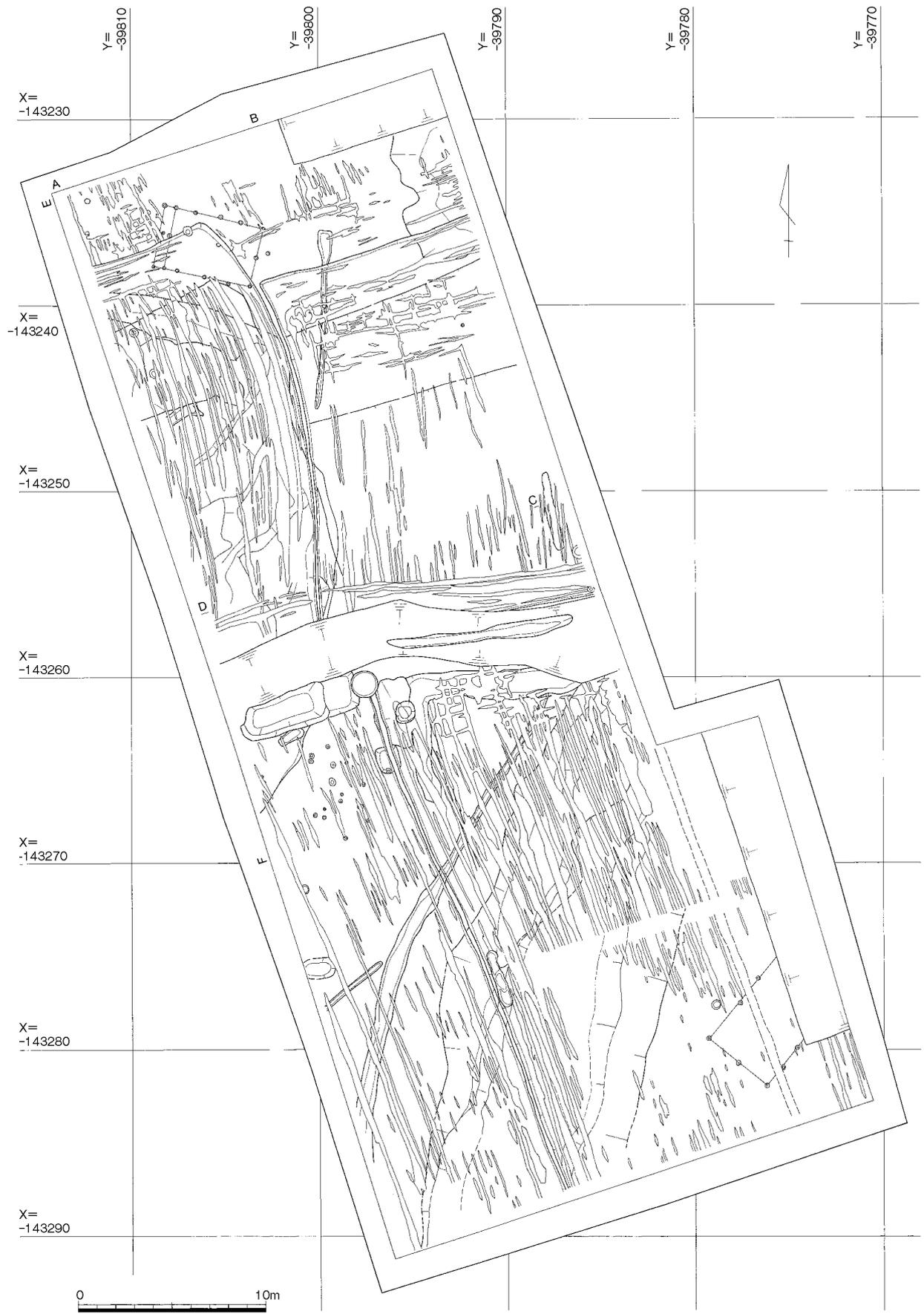
標高9.8mを測るこの地点は、医療センターの敷地として造成されるまで、東西に走る水路を境に、北側の小字馬正免で7.8m、南側の小字流田で7.7mを測る水田であった。この現代水田の耕作土の下には、近代から中世にわたる水田が層をなして検出された。このうち、暗灰色土層（第6図A－B断面4層、C－D断面2層、第7図1層）の上面で検出した水田4の畦畔は造成前の水田区画とほぼ合致する位置にあり、出土遺物から近世後期～近代の水田と思われる。水田区画が最も良好に遺存するのは灰色土層（第6図A－B断面5層、C－D断面4層、第7図4層）の上面で検出した水田3（第21図）で、現代水路と重複して東西に走る溝5を挟んで幅10mほどの短冊形をした区画が東西に並んでおり、出土した陶磁器から江戸時代中期と推定される。最下層の水田1（第20図）も水田3に似た区画をとり、これを覆う灰白色土層（第6図A－B断面8層、C－D断面8層、第7図8層）の出土遺物からすると、15世紀末～16世紀前半まで遡る可能性がある。

黄褐色土層（第6図A－B断面9層、C－D断面9・10・20層、第7図10～12・39層）は中世以前の基盤となる層で、標高7.4mを測る北西から南西に向かって40cmほどの比高をもって傾斜しており、弥生時代の土壌1・2、溝1～4、たわみ1のほか、中世の掘立柱建物1・2、土壌3、たわみ2を検出した。このうち中世の遺構は1区と2区の北西、3区に集中しており、14世紀を中心とした年代が想定される。また弥生時代前期の溝4は、国立岡山病院本館調査区の溝9・10が重複したもので、前回の調査地点に比べると出土遺物は少なかった。

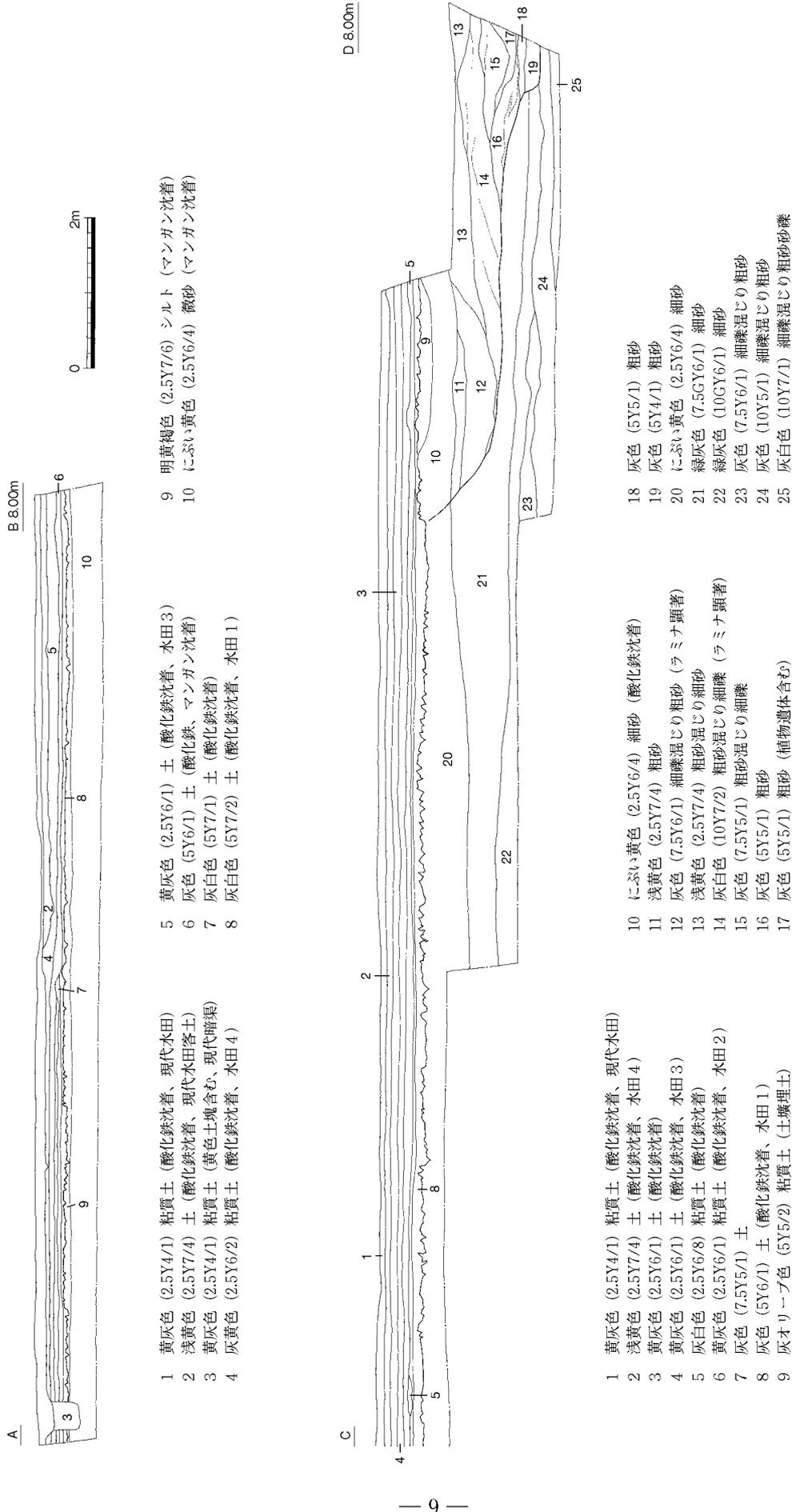
黄褐色土を除去して検出した縄文時代の河道は、1区西側の河道1が笹ヶ瀬川調節池の河道14に、2区南東の河道2が国立岡山病院本館調査区の河道5に繋がる。いずれも、縄文時代後期の遺物を出土しているが、河道2では堆積層中にイネの機動細胞珪酸体を多量に含んでおり注目される。（亀山）



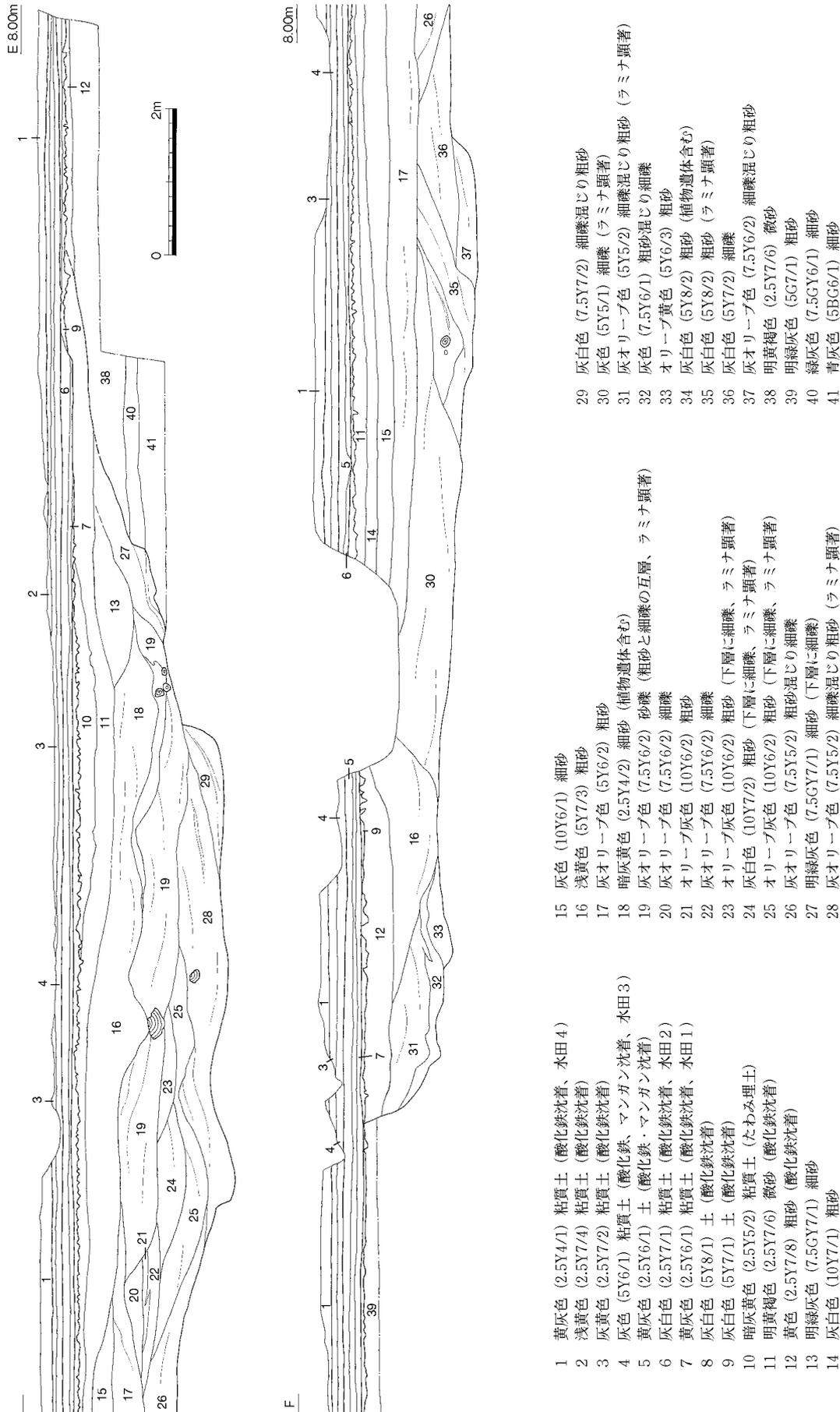
第4図 調査区配置図 (1/800)



第5図 検出遺構全体図 (1/300)



第6図 調査区土層断面図1 (1/80)



第7図 調査区土層断面図2 (1/80)

第2節 古代以前の遺構・遺物

1 縄文時代

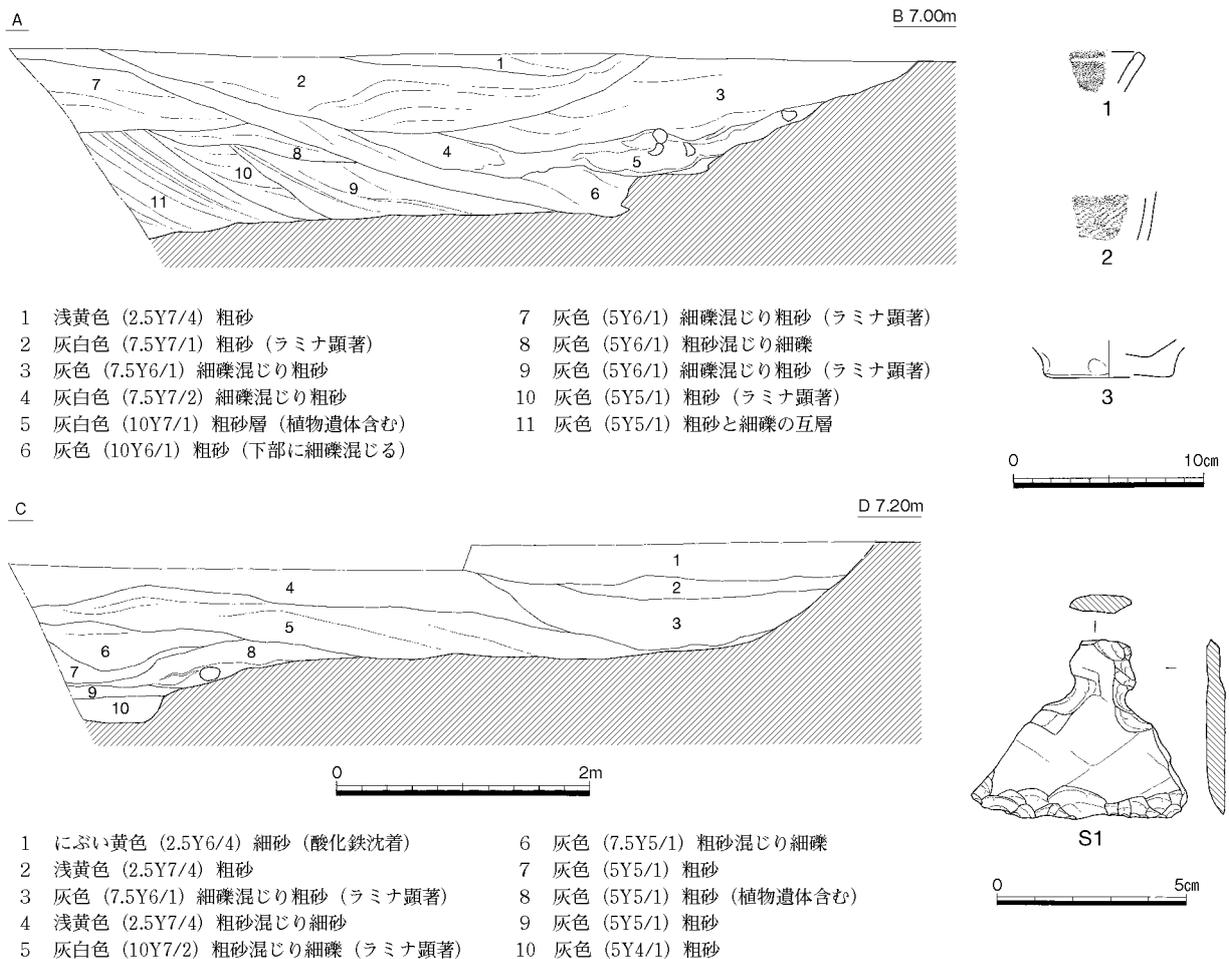
河道1 (第6～9図、図版1・8・9)

1区の北西側において南北28.6m、幅7.27mにわたり検出した河道で、笹ヶ瀬川調整池(上池)調査区の河道14に繋がる。北西から流れる河道が南西へと大きく向きを変える箇所にあたり、標高6.7mの検出面から深さ1.48mにある底面は洗掘され階段状をなす。砂礫からなる埋土はラミナが顕著に認められ、上幅4～5mほどの流路が繰り返し走流した様子が観察される。

埋土にはイヌガヤ・ケヤキ・ニワトコなどの植物遺体を多量に含んでいるが(第3章第3節参照)、出土遺物は少なく、口縁内側に沈線を施す1、体部外面にRLの縄文を施文する2、平底の底部3といった縄文時代後期中葉の土器片や石匙S1があるにすぎない。(和田)

河道2 (第9・10図、図版2・8)

2・3区を北東から南西に向かって走る河道で、平成8年度に調査した本館8区の河道5に対応する。土層断面を観察すると、その肩口は標高6.8mまで立ち上がることが確認できるが、弥生時代前期

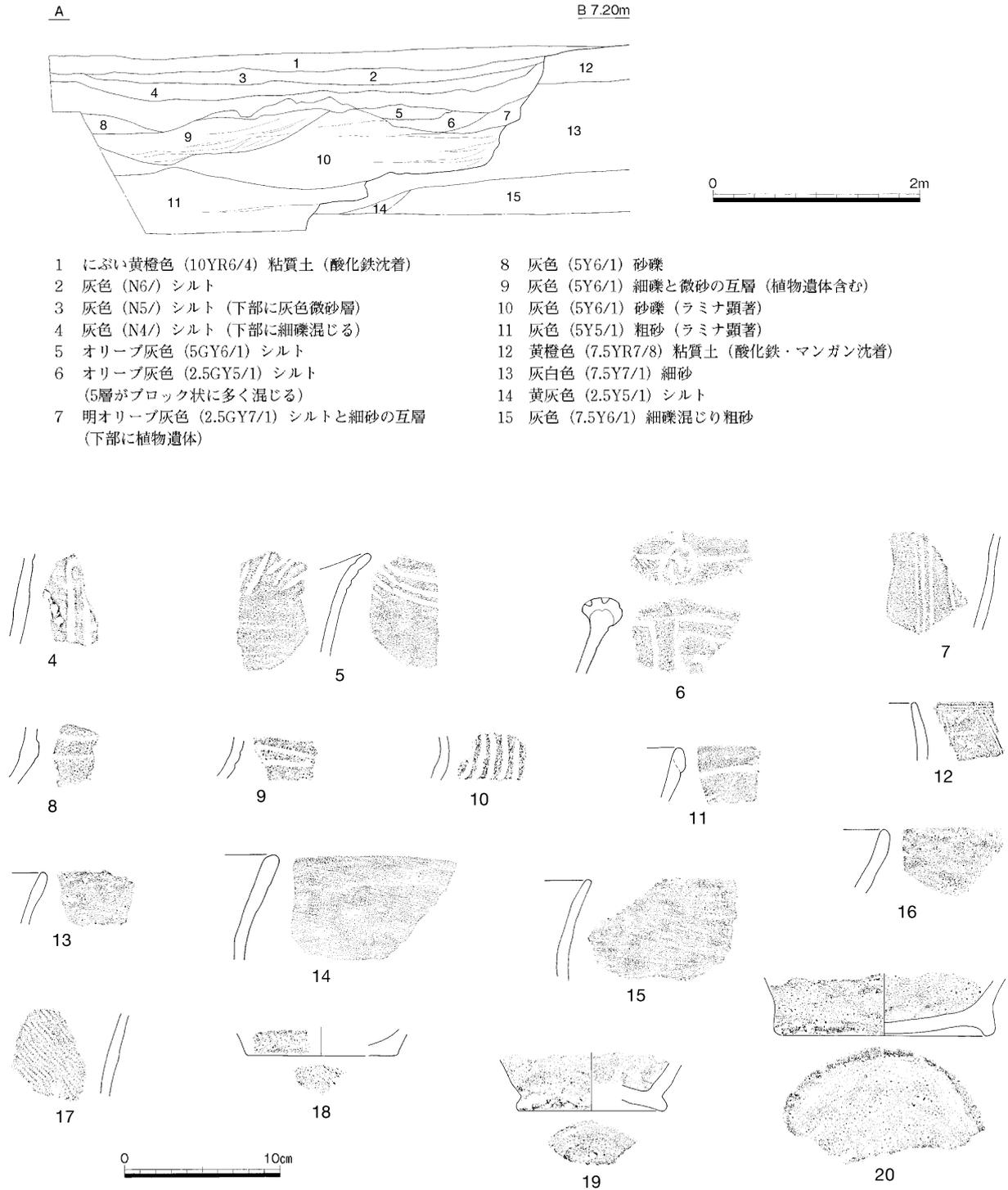


第8図 河道1 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)

第2章 調査の概要



第9図 縄文時代遺構配置図 (1/300)



第10図 河道2 (1/60) ・出土遺物 (1/4)

の溝4と重複していたため、標高6.0mまで掘り下げて平面形を検出した。河道内に堆積した砂礫層にはラミナが顕著に認められ、標高4.8mで確認した河床と見られるシルト層の上から縄文土器が若干出土した。これらは、太い沈線文を飾る4・5、磨消縄文を描く6・7、屈曲する口縁部に文様を集中する8～10など、後期前葉～中葉のものが主体をなす。このほか、内外面に擦痕を残す14～16や凹み底の19、高台底の20などがある。なお、河道内に堆積した植物遺体の集積層を分析したところ、イネの機動細胞珪酸体が多量に確認された (第3章第2節参照)。(亀山)

2 弥生時代

土壌1 (第7・11・12図、図版7)

2区北西隅に位置し、南側は現代用水路により削平されている。1区調査時には下面にある河道1の上層堆積と判断したため北側は検出していない。平面形は楕円形を呈する断面皿形の浅い土壌で、埋土は粘性の強い単層で遺物を含んでいないが、上面の白色粗砂中からは中世の土師器小片が出土している。時期は、埋土の土質や色調から弥生時代の可能性が高いものと推察される。(杉山)

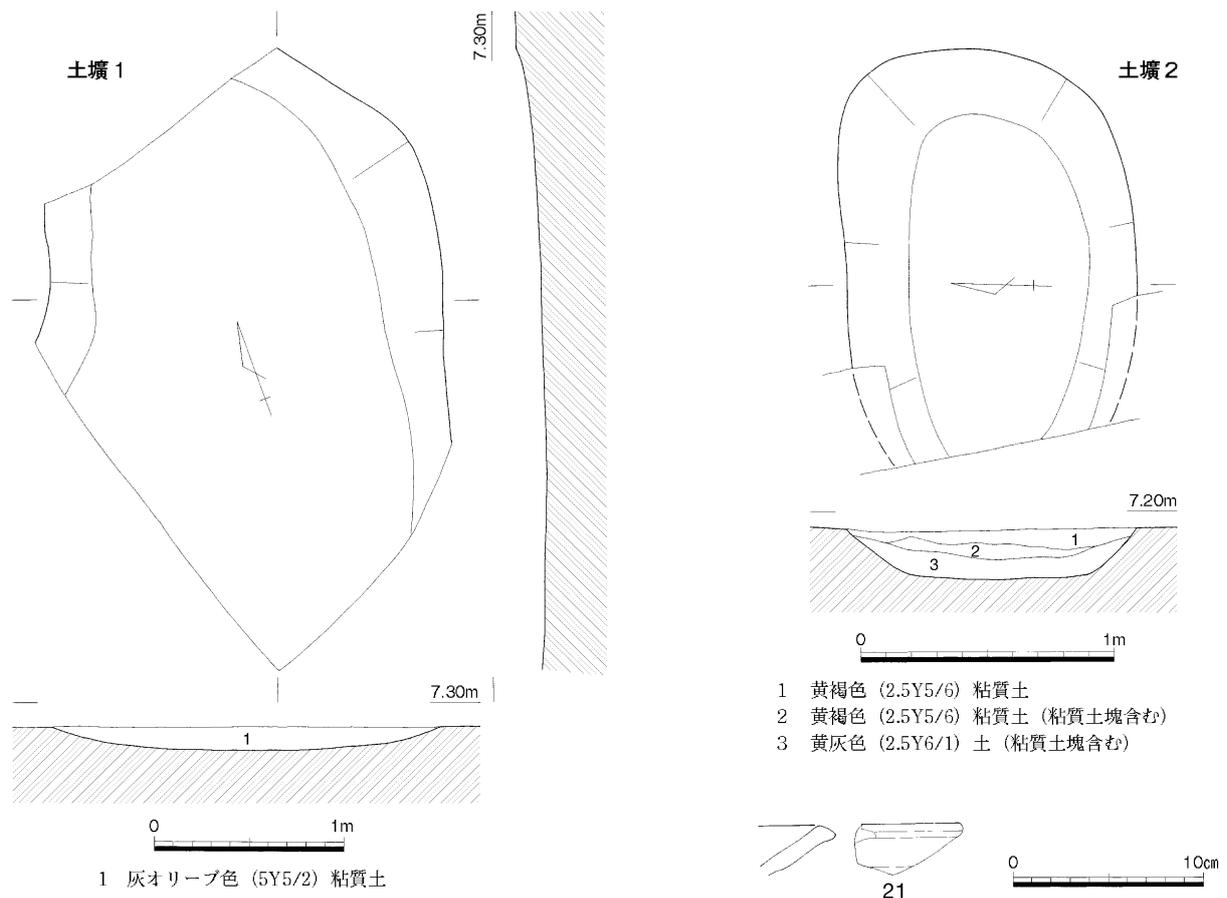
土壌2 (第11・12図、図版5)

1区南西部に位置する楕円形の土壌である。検出面には、植物痕跡と考えられる白色粗砂を埋土に持つ不整形のピットが濃密に確認され、このピットは深いもので土壌埋土の第2層中に及ぶものもある。断面形は逆台形で底面はほぼ水平であった。遺物は、第1層中から出土した21の土師器鉢の口縁部小片1点とサヌカイト製の碎片・二次加工ある剥片が合計4点出土した。

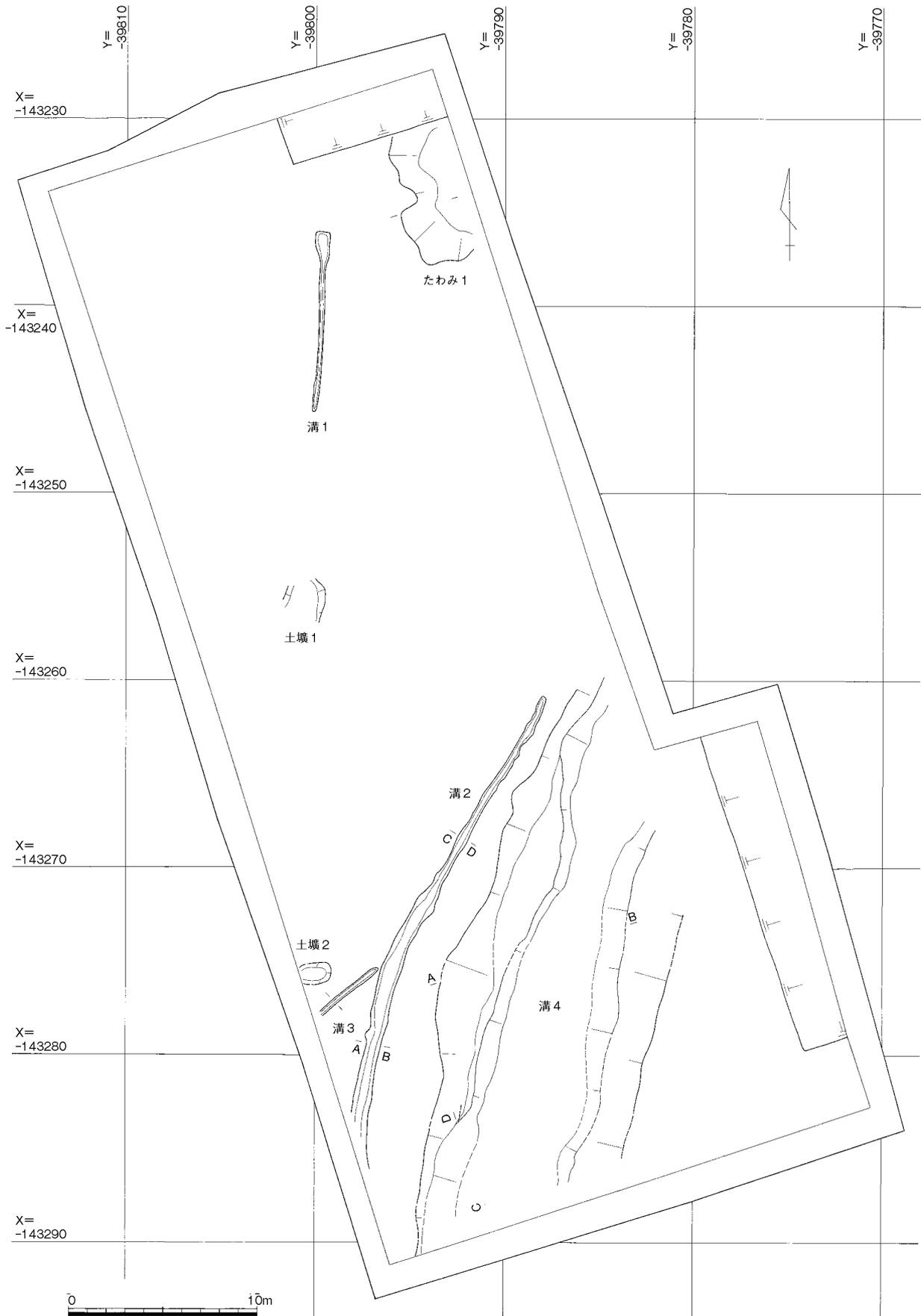
時期は、埋土の土質や色調から弥生時代と推察され、21は混入品と判断した。(杉山)

たわみ1 (第12・13図)

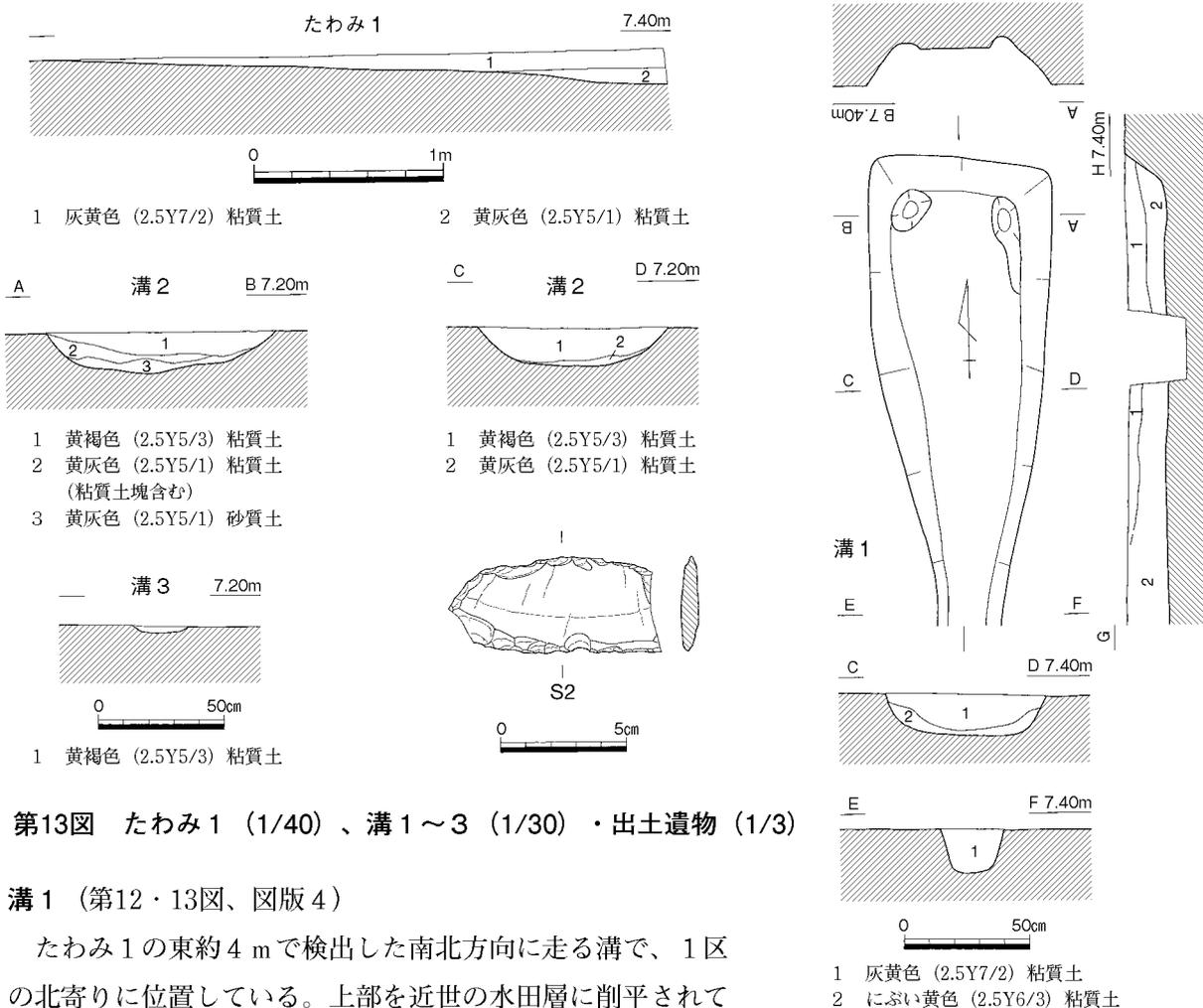
1区北東隅で検出した平面不整形の遺構である。この遺構は国立岡山病院本館調査区の溝49に繋がるもので、この地点から北東側へ延びることが判明している。調査区内での長さは最大で7.3m、幅は2.2mを測り、深さは17cmと浅かった。遺物は出土していないが、前回の調査成果に従えば弥生時代前期～中期の範疇と判断される。(和田)



第11図 土壌1・2 (1/30・1/40) ・出土遺物 (1/4)



第12図 弥生時代遺構配置図 (1/300)



第13図 たわみ1 (1/40)、溝1～3 (1/30)・出土遺物 (1/3)

溝1 (第12・13図、図版4)

たわみ1の東約4mで検出した南北方向に走る溝で、1区の北寄りに位置している。上部を近世の水田層に削平されていたため遺存は悪く、深さは最大でも17cmを測るのみであった。このため、検出長は9.6mを測るものの、本来の全長は不明である。急な角度をもって立ち上がる北端はやや幅広となり、最大幅75cmを測る。その底面の北端には柱穴状の浅い凹みが二つあり、上段の水を集めて下方へと導く溜榊のような施設を想定し得る。時期は弥生時代か。(和田)

溝2 (第12・13図、図版3・4)

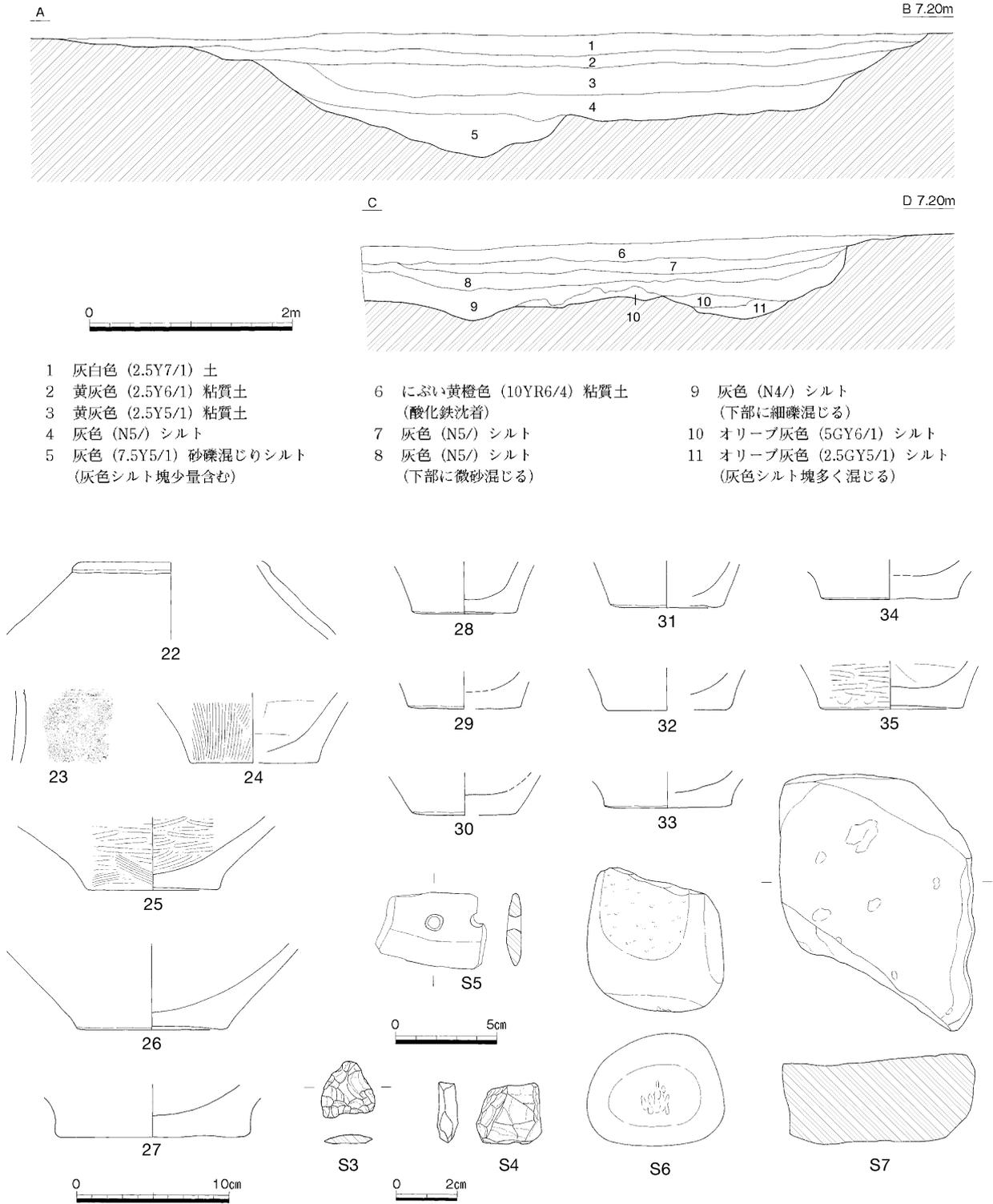
1区南部から2区にかけて位置し、断面形は逆台形を呈し、北東から南西に流れる粘質土で埋没した溝である。南西部底面では部分的に2条の流路痕跡が確認されたが、明確な切りあい関係はない。出土遺物は、弥生土器の壺や甕の体部小片がある。S2はサヌカイト製打製石包丁で中央部から出土した。他にサヌカイト製の碎片など合計8点が出土している。時期は、出土遺物と埋土の状況から弥生時代と判断される。(杉山)

溝3 (第12・13図、図版4)

1区南端付近、溝2に接するように検出された溝である。近世水田層除去後に黄褐色の基盤層上面で検出した。検出長は3.8mを測り、最大で幅29cmであった。上部を近世水田により削平されているため、深さは最大でも3cmとかなり浅かった。削平状況と位置関係から考えて、実際は溝2と接続していた公算が大きい。時期は検出面、埋土の特徴などから弥生時代か。(和田)

溝4 (第7・10・12・14図、図版3・8・9)

2・3区を北東から南西に流れる幅7.4m、深さ1.2mの溝である。国立病院本館調査区を北東から



第14図 溝4 (1/60) ・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

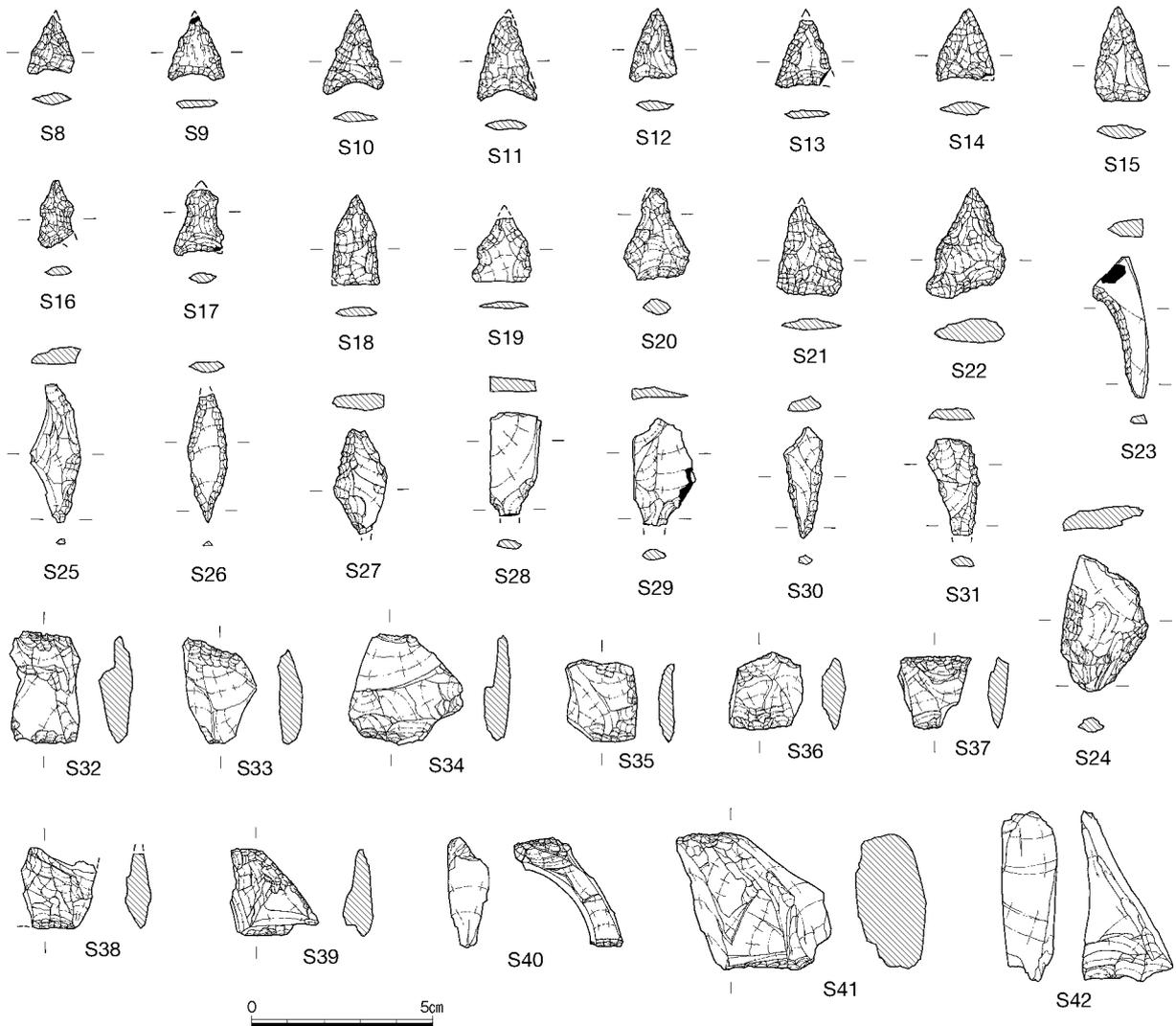
南西に蛇行しながら走る溝9・10に繋がるもので、この地点では2本の溝が重複した状態で検出した。上部には水平の堆積が認められ (第14図A-B断面1・2層)、溝の埋積過程で水田等に利用された可能性も考えられる。前回の調査箇所と比べると出土遺物は少なく、頸部との境に低い突帯をめぐらす壺22や口縁下にヘラ描き沈線を施す甕23などのほか、磨製石包丁S5や石鏃S3などがある。

(亀山)

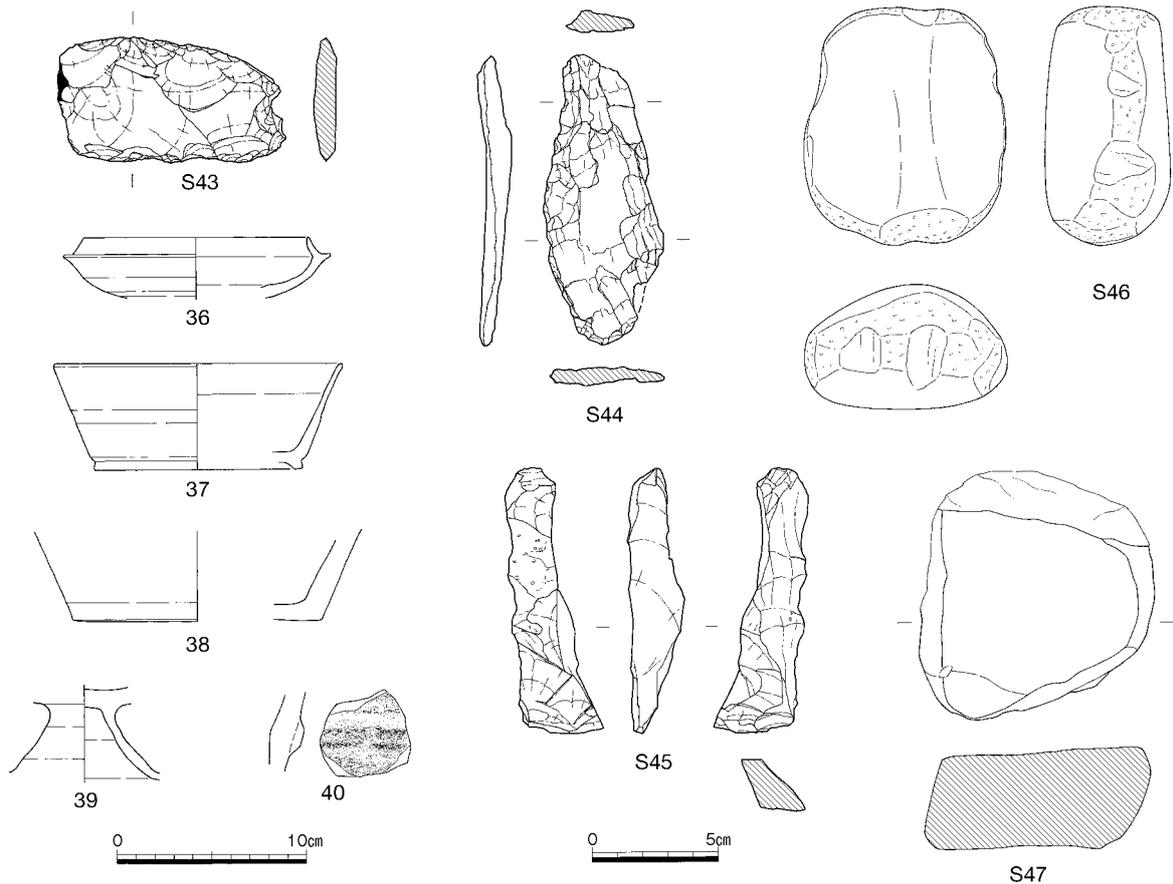
3 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない石器類は、弥生時代の基盤層を覆う水田1の耕作土を中心に多く出土しており、大半が弥生時代に属するものと思われるが、風化顕著なサヌカイト製剥片も見られることから、縄文時代のもも含まれているようである。サヌカイト製品には、打製石包丁1点、鏃は未（非）成品も含めて24点、鏃17点、楔14点、二次加工のある剥片11点、使用痕のある剥片36点、剥片・碎片361点、残核3点がある。また、錘と鋤、砥石が各1点ある。石器集中箇所は認められないものの、10mm前後の棒状や塊状の碎片や剥片が広く出土することから、近隣で石器製作が行われていたものと思われる。

第15・16図に主な製品を示した。S8～S43はサヌカイト製である。S8～S22は鏃である。S8～S15は三角形鏃で、S9は中央に大きく自然面を残す。S16・S17は押圧方向を変えることによって、側面に棘状突起を作出している。S18は丁寧に細部調整を行って整形した五角形鏃である。S19は細部調整が粗いことと基部調整がなされていないこと、成品に比べて薄いことから非成品と考えられる。S20～S22は全面に細部調整が見られるが、厚みがあることと形態が整っていないことから未成品と判断した。S23～S31は鏃で、S23～S26・S30は鏃部に摩滅が見られる。S26・S30・S



第15図 遺構に伴わない遺物 1 (1/2)



第16図 遺構に伴わない遺物2 (1/3・1/4)

31は細かな細部調整を施して錐部とつまみ部の形態を整えているが、その他は剥片の形状を利用して簡単な調整を行っているのみである。S32～S42は一辺または相対する辺に微細な階段状剥離やツブレ痕跡が見られることから、いわゆる楔と判断される。S35・S39は三辺に痕跡が見られる。S40は下辺に僅かに階段状剥離痕が残るがせん断面が明瞭に認められる。S41は塊状のもので、上下に剥離痕跡が明瞭に残るとともにせん断面も認められる。S42は明確な階段状剥離は見られず、下辺に粗い剥離痕が見られるのみだがせん断面が明確に残る。S43は打製の石包丁で一側辺に挟りがある。

S44は緑色片岩製の石器で、表面の風化が顕著で剥離状況と使用痕は明確でない。しかし、全長の下部3分の1を剣先形に整形し、基部となる上部に浅い挟りを作出していることから石鎌と考えられる。S45はサヌカイト製の棒状の大形剥片で、表裏に粗い剥離面が見られ、部分的に自然面が残る。図の下部には階段状剥離が見られるが上部には自然面が残っており、残核と考えられる。S46は細粒花崗岩製の円礫の周辺部に細かな敲打痕が見られることから叩き石として使用されていたことがわかる。敲打痕を切って対面する四辺に残る大きな打割痕が紐掛け溝と判断されることから、打ち欠き石錘に使用されたと考えられる。S47は上下面に研磨による平滑面が残る流紋岩製の砥石で、1区水田1の耕作土中から出土したことから中世まで下る可能性がある。

このほか、古墳時代～奈良時代の遺物が若干出土している。36～39は須恵器で、底部をヘラ削りする蓋杯36や高台をもつ杯37、平底の壺38、高杯の脚部39がある。40は突帯を貼り付けた埴輪の一部と思われる。これらは弥生時代～中世の基盤となる黄褐色土層の上面から出土した。また、中世～近世の水田層に混じって出土した鉄滓や製鉄炉の炉壁が44点(1.2kg)ある。(亀山・杉山)

第3節 中世以後の遺構・遺物

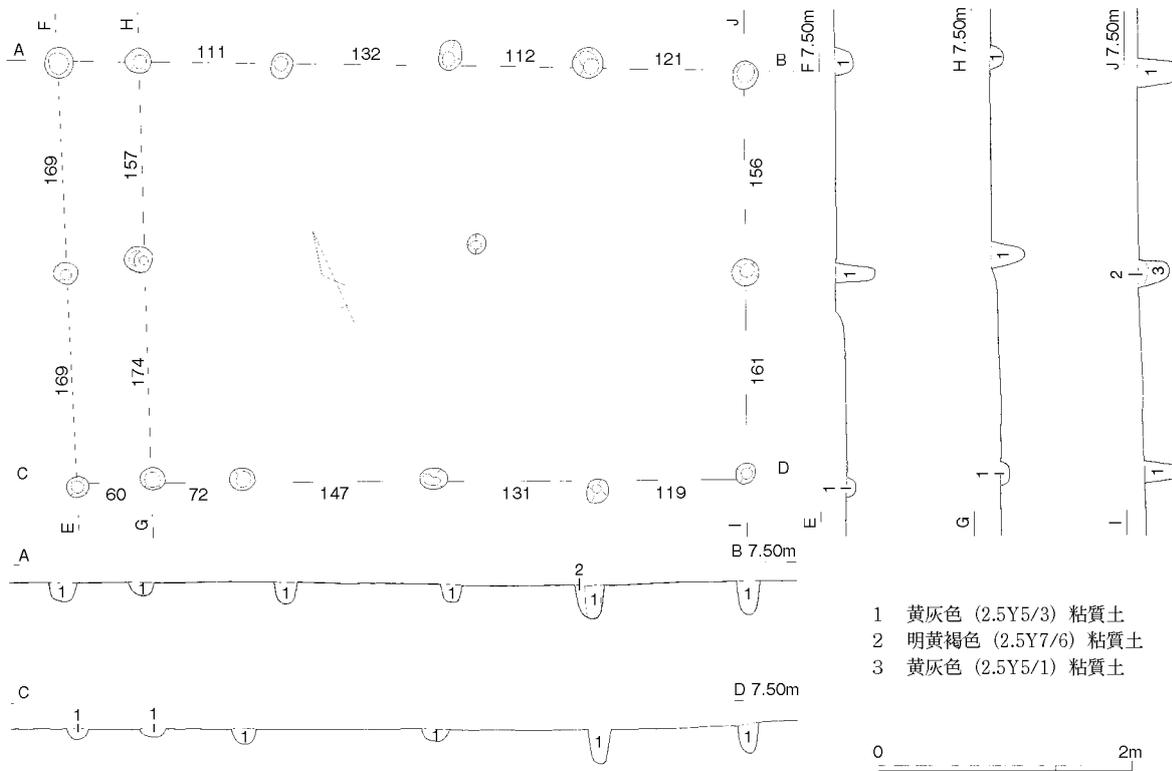
1 中世

掘立柱建物1 (第17・18図、図版4)

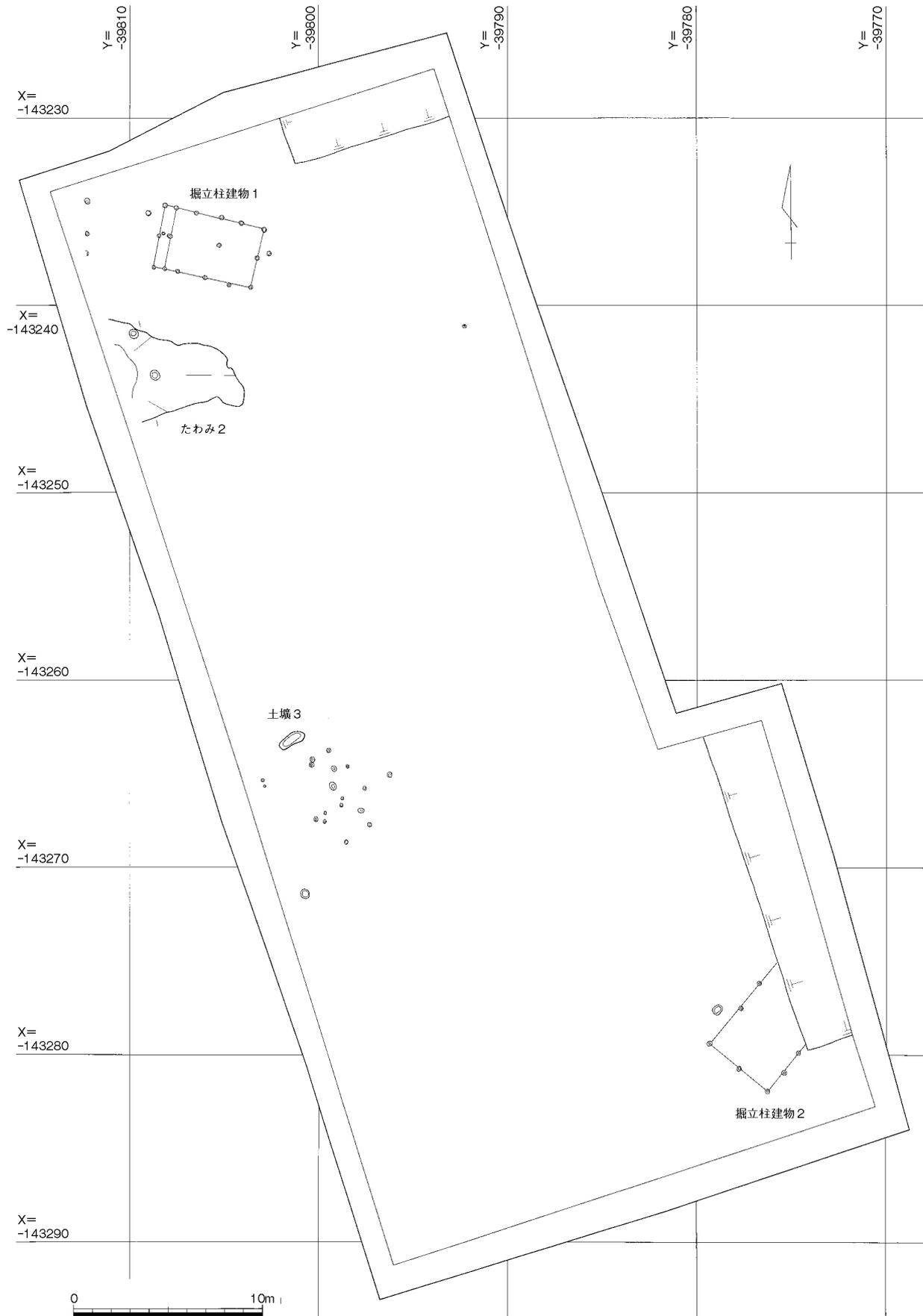
1区北東端で検出した5×2間の側柱建物である。棟方向はN-67°-Wを測り、20度ほど北に振れた東西棟の建物である。規模は桁行541cm、梁行437cmを測り、面積は18.1㎡である。桁の柱間は60～147cmと不揃いで、特に西端の柱間は60～64cmと格段に狭い。このため、庇もしくは縁である可能性もあるが、柱穴の位置関係から建物の間仕切りと考えたい。柱穴埋土の特徴や検出面から、時期は中世である。 (和田)

掘立柱建物2 (第18・19図、図版5)

3区の東側で検出した掘立柱建物で、平成8年度に調査した本館8区の南側にまたがっている。693cmを測る桁行は、北西辺が柱間距離164～251cmの3間、南東辺が柱間距離131～147cmの5間と異なっているのに対し、395cmある梁間は、北東辺・南西辺とも柱間距離189～206cmの2間と揃っている。棟方向は、東に40度振れており、面積は27.3㎡を測る。柱穴は15～29cmの円形を呈するが、深さは10cmと浅く、水田の造成に際して削平を受けたものと思われる。遺物は出土していないが、柱穴の埋土や構造などからして、掘立柱建物1と近似した時期が想定される。 (亀山)

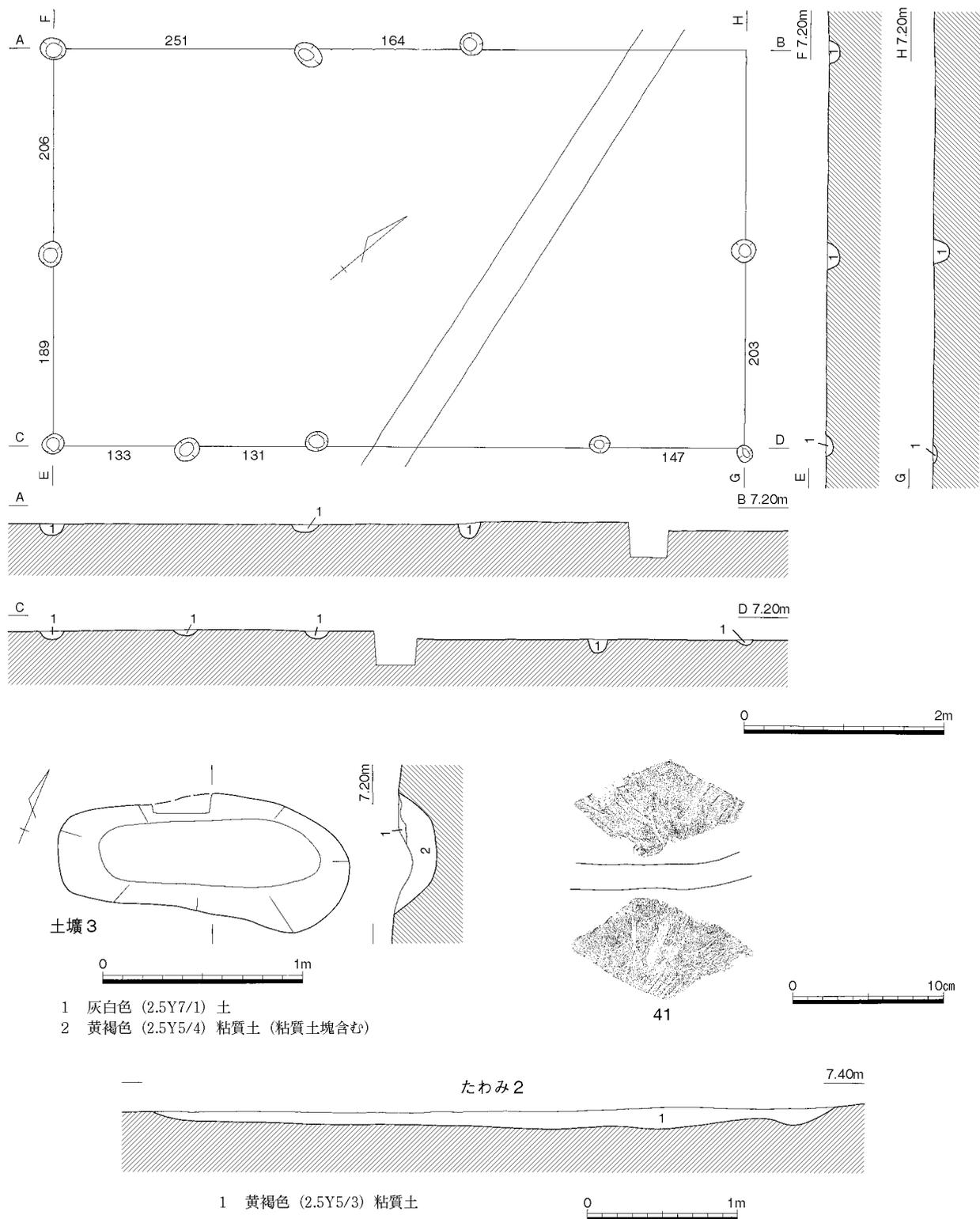


第17図 掘立柱建物1 (1/60)



第18図 中世遺構配置図 (1/300)

第2章 調査の概要



第19図 掘立柱建物2 (1/60)、土壌3 (1/30)、たわみ2 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌3 (第18・19図、図版4・5)

1区の中央東より、たわみ2の南東約18mに位置する。近世水田層を掘り下げ後、明黄褐色の基盤層上で検出した。長楕円形を呈する平面は、長軸146cm、短軸61cmを測り、深さは最大で18cmである。埋土上層の灰白色土は、その特徴から近世の水田層に由来するものと見られた。この土壌の時期は、



第20図 近世以後遺構配置図1 (1/300)

第2章 調査の概要

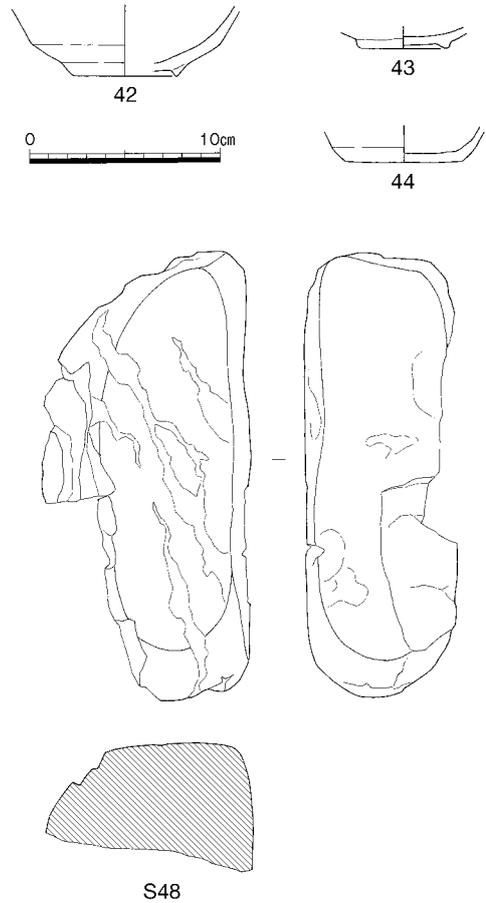


第21図 近世以後遺構配置図2 (1/300)



- 1 灰色 (N6/) 砂質土 (下部に細礫混じる)
- 2 灰色 (N5/) 砂質土 (微砂のラミナ)

第22図 土壌4 (1/40)・出土遺物 (1/4)



層位関係と埋土の特徴から中世であろう。 (和田)

たわみ2 (第18・19図、図版4)

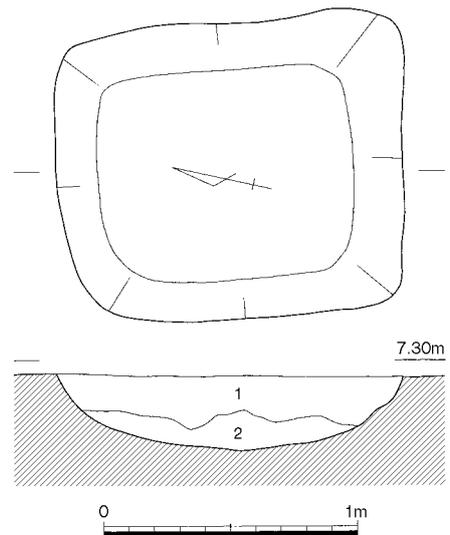
1区の北東端で検出した、平面不整形の窪みである。調査区外へ延びると見られ、最大長6.0m、最大幅は5.7m、深さは18cmを測る。底面は平滑で西側に向かって徐々に深くなっている。出土遺物には須恵器の甕底部片41がある。このたわみの時期は埋土の特徴や層位関係から中世である。

(和田)

2 近世以後

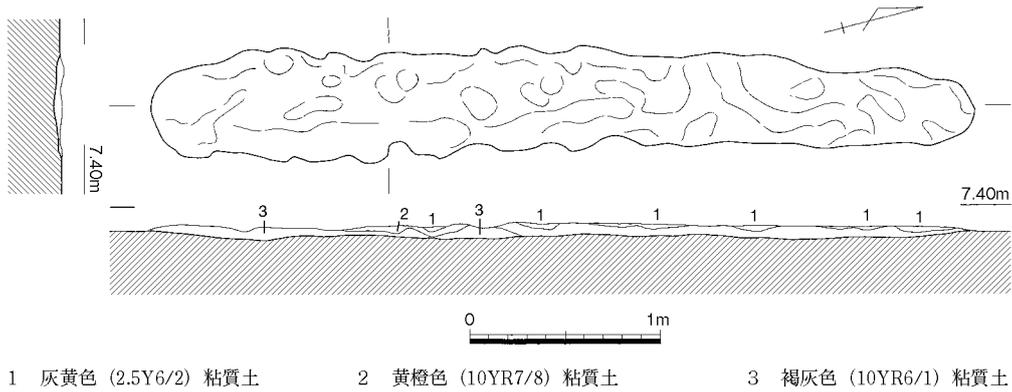
土壌4 (第20・22図、図版6)

2区北西部で検出した不整形の土壌で、畦1を切るものの、東側は鍵形をなす溝により削平されている。底面には顕著な凹凸がみられ、部分的に人頭大の角礫や円礫が残る。



- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土 (粘質土塊含む)
- 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土

第23図 土壌5 (1/30)



第24図 土壌6 (1/40)

出土遺物には、土師器碗42・43や備前焼壺44といった小片のほか、被熱を受けた破片が接合した砥石S48がある。時期は、室町時代以降と判断される。(杉山)

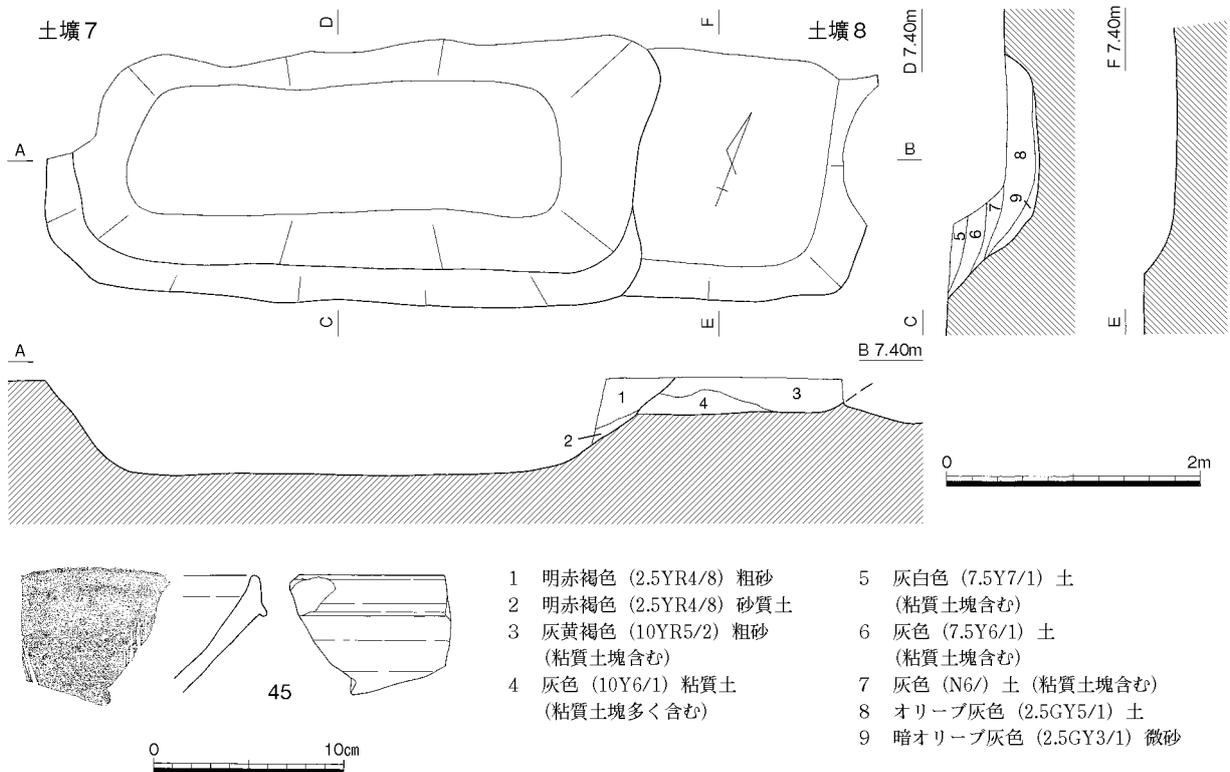
土壌5 (第20・23図、図版6)

2区の北西で検出した、長さ137cm、幅120cmの方形をなす土壌で、土壌4の南に接している。水田2を検出する過程で確認したもので、埋土は黄褐色粘質土を含む上層と砂質の下層に分かれるが、遺物は出土していない。灰色土層からは江戸時代前期の陶磁器が出土していることから、江戸時代中期に属する可能性が高い。(亀山)

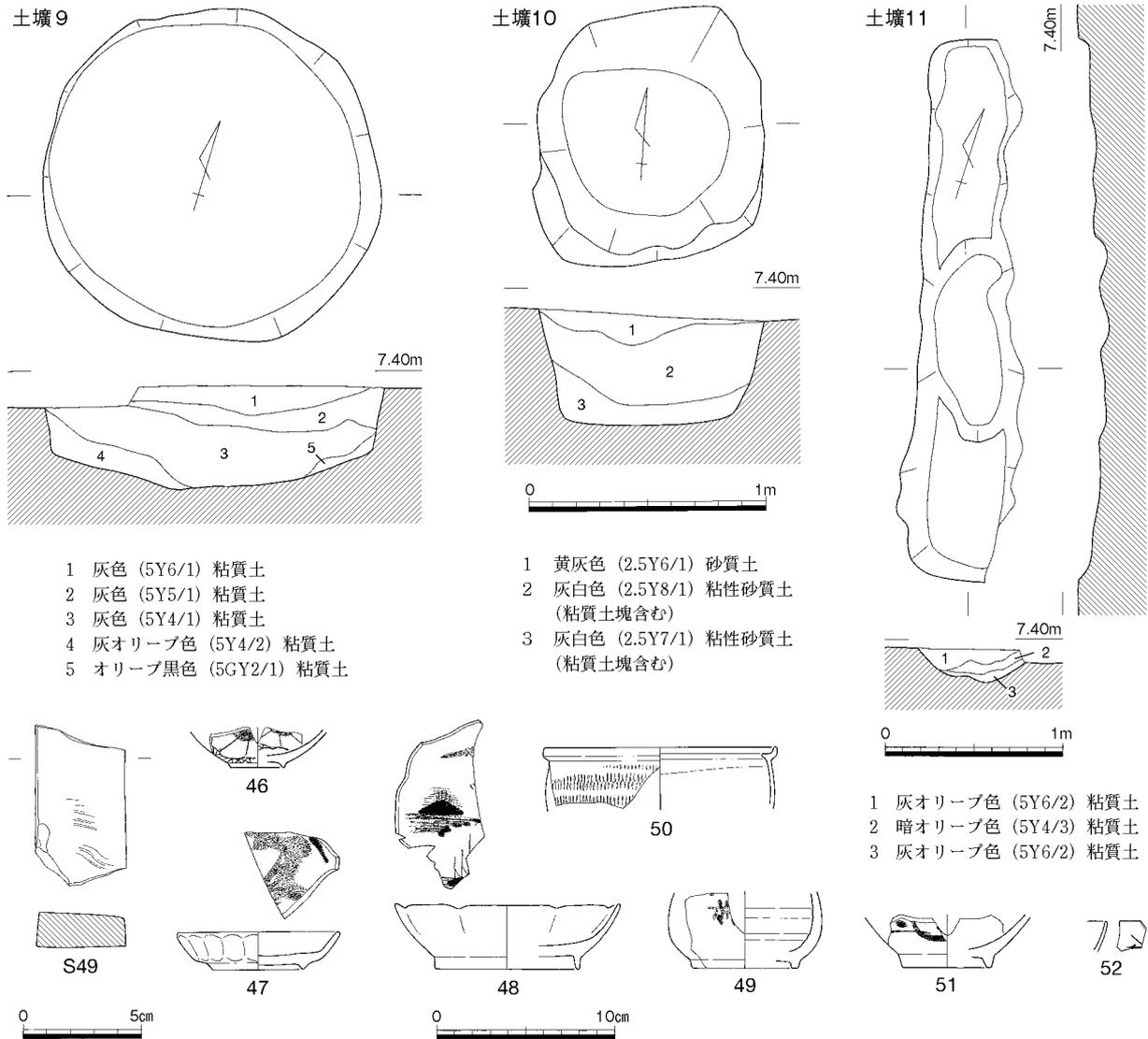
土壌6 (第20・24図、図版6)

1区の南東から2区の北東にかけて検出した遺構で、土壌4の北東10.5mに位置する。

灰色土層を掘り下げた際、幅73cmの帯状をなす黄褐色土の広がり確認され、畦畔とも思われたが、



第25図 土壌7・8 (1/60) ・出土遺物 (1/4)



第26図 土層9～11 (1/30・1/40)・出土遺物 (1/3・1/4)

長さ428cmで途切れて終わることから、黄褐色土で埋めた浅い溝状の窪みと判断した。出土遺物はないが、水田3に先行することから江戸時代中期頃のものと思われる。(亀山)

土層7・8 (第21・25図、図版6・8)

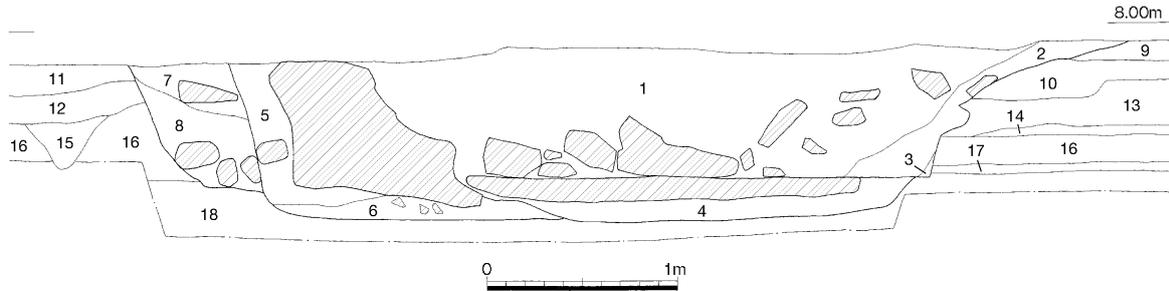
1区西部から2区北部に位置し、現代水路によって北辺を削平されている。平面長方形を呈する土層で、底面は両者とも平坦である。土層観察から土層7は土層8を人為的に埋め戻した後に掘削しており、土層7も一旦第8層で埋めた後に第1・2・5～7層で埋め戻されている。

出土遺物は室町時代の備前焼播鉢45が1点あるが、周辺の状況から近世に掘削され、耕作痕跡との切り合い関係から水田4が営まれるまで機能していたと推察される。また、溝5に近接して掘削されていることから、耕作に利用する水の管理に関係する機能が考えられる。(杉山)

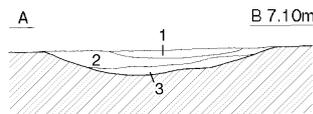
土層9 (第21・26図、図版7・9)

2区北西部の現代水路南側に位置し、土層8と畦4を切っている。平面円形で、第1～3層は遺物と粘質土塊を含む人為的な埋め土と判断されるが、機能については明確でない。

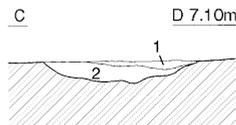
出土遺物は、46～49は染付磁器で、46は小碗、47・48は皿、49は瓶である。47は瀬戸産で、その



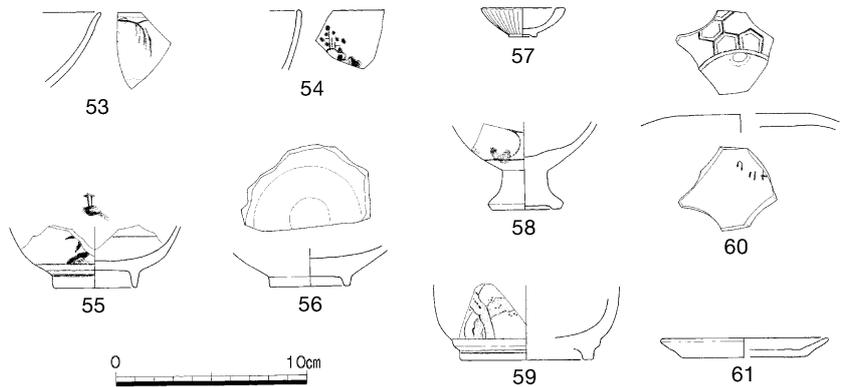
- | | |
|---------------------------------|------------------------------------|
| 1 灰色 (5Y6/1) 土 (粘質土塊、コンクリート片含む) | 10 灰黄色 (2.5Y6/2) 土 (上面に酸化鉄沈着) |
| 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 (ビニール含む) | 11 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土 (酸化鉄沈着) |
| 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗砂 | 12 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 (マンガン沈着) |
| 4 灰白色 (N7/) 碎石 (1cm) | 13 灰黄色 (2.5Y6/2) 土 (上面に酸化鉄・マンガン沈着) |
| 5 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 | 14 灰黄色 (2.5Y7/2) 土 |
| 6 オリーブ黒色 (5Y3/1) 円礫 | 15 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 |
| 7 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土 | 16 灰黄色 (2.5Y7/2) 土 (酸化鉄沈着) |
| 8 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 土 | 17 浅黄色 (2.5Y7/3) 土 (酸化鉄沈着) |
| 9 灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂混じり土 | 18 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質土 (シルト?) |



- 1 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土
 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土
 3 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土



- 1 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土
 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土



第27図 溝5 (1/40) ・出土遺物 (1/4)

他は肥前系である。関西系陶器50は雪平鍋である。これら以外に平瓦片2点があり、出土遺物や水田との関係から19世紀以降に機能していたと考えられる。(杉山)

土壌10 (第21・26図、図版7・9)

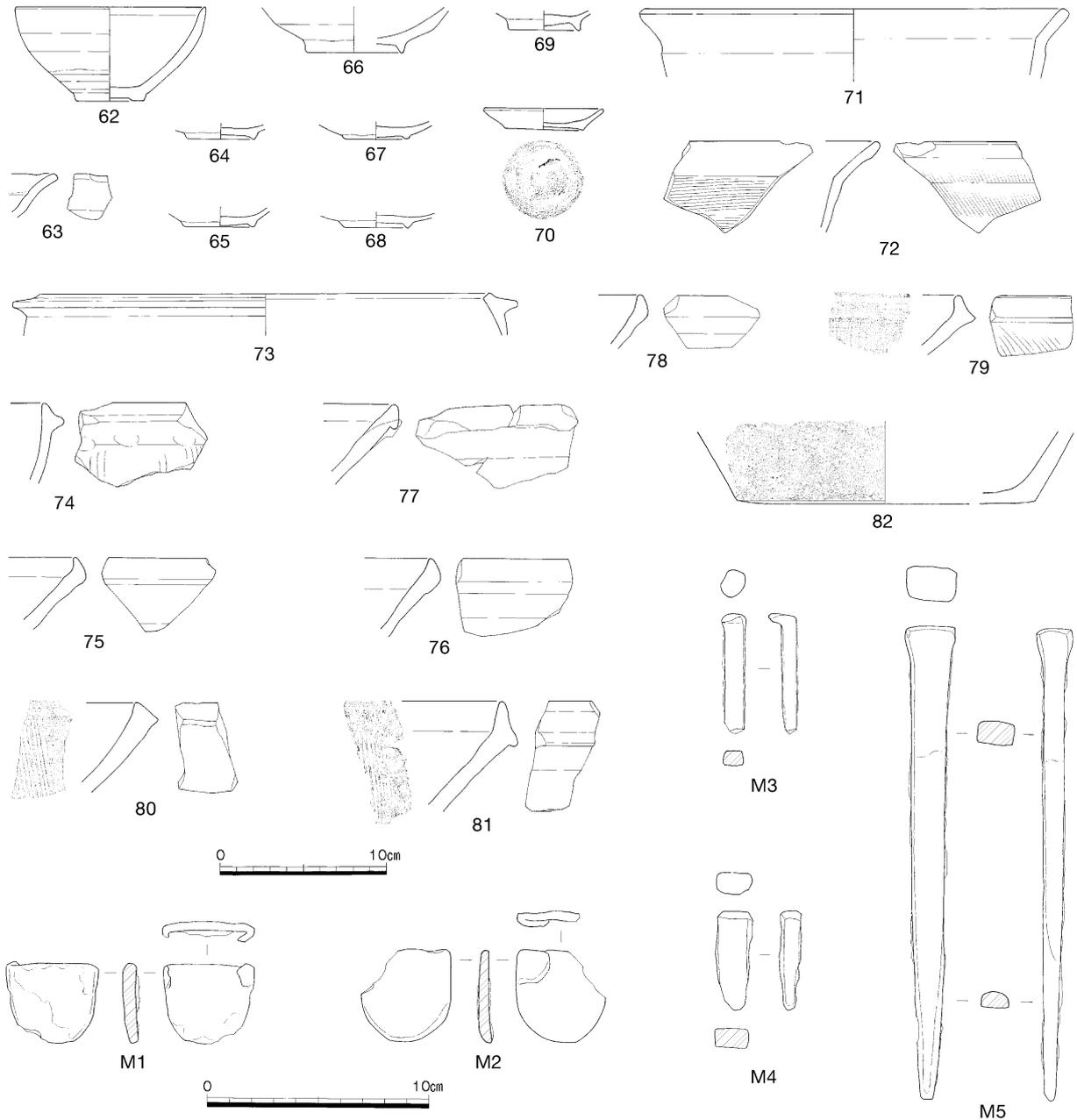
土壌4と重複して検出した土壌で、水田3を検出する過程で確認したが、本来は水田4の上から掘りこまれた可能性がある。掘り方は、長さ105cm、幅96cmの不整形を呈し、平坦な底面の海拔は6.81mを測る。逆台形をなす断面の高さは47cmあり、粘性を帯びた砂質土がU字形に堆積していた。江戸時代の染付碗51が出土しているが、検出状況からすると近代までに下るものと思われる。(川島)

土壌11 (第21・26図)

水田3の畔4に沿って掘りこまれた溝状の土壌で、土壌10の南西7.8mに位置する。長さ306cm、幅60cmを測り、断面は皿形を呈する。水田3が埋積する過程で掘りこまれたものと見られ、深さ20cmにある底面に著しい凹凸が見られ、耕作にかかわる痕跡と推定される。粘質を帯びた埋土から染付の小片52が出土しており、江戸時代後期と判断される。(川島)

溝5 (第21・27図、図版7・9)

2区の北側を東西に走る現代水路と重複して検出した溝で、幅94cm、深さ9cm、検出長10.1mを測る。2区東壁の断面(第27図上)を観察すると、造成に際して埋められた現代水路(1~4層)の北



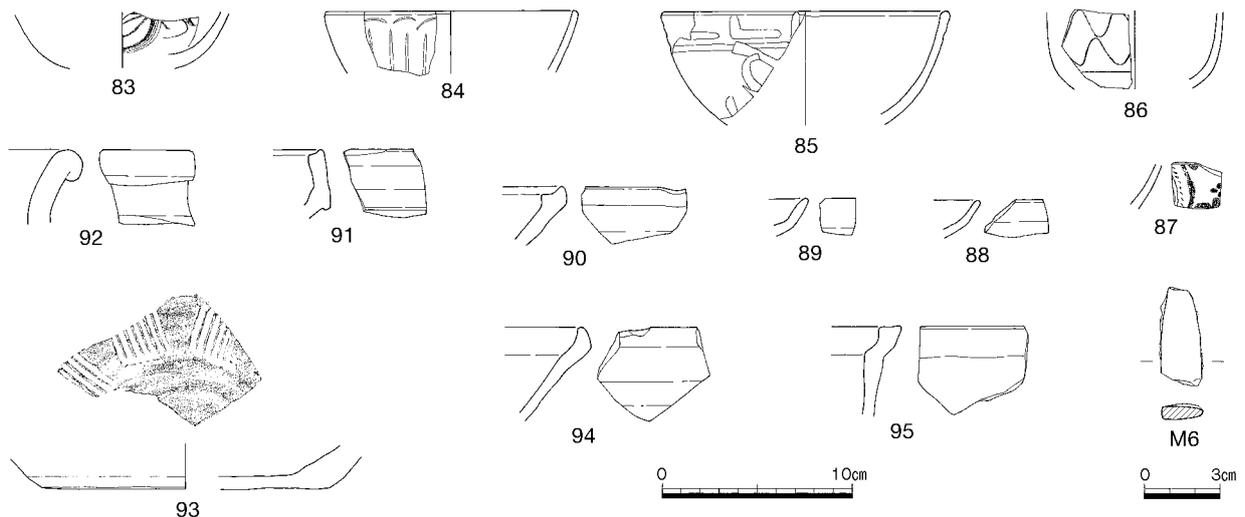
第28図 水田1出土遺物 (1/3・1/4)

側に、コンクリートの擁壁が残る水路（5・6層）があり、さらにその北側に川原石を積み上げた水路（7・8層）が観察された。水路の底に遺存していたこの溝は、これらの水路に先行するものと思われるが、その走流方向は畦3とほぼ並行しており、耕作痕跡との関係からしても水田2と同時に機能していた可能性が高い。

出土した染付の中には江戸時代前期の碗53や中期の皿56も見られるが、碗55や蓋60、蓋物59、仏飯器58など後期のものが主体をなしている。 (亀山)

水田1～4 (第20・21・28～31図、巻頭図版2、図版6～10)

水田1は、弥生時代～中世の基盤をなす黄褐色土層（第6図A-B断面9層、C-D断面9・10・20層、第7図10～12・39層）の上面で検出した。1区では畦畔は遺存していなかったものの、酸化鉄やマンガンの沈着範囲を手掛かりとして、北西から南東に走る畦畔の痕跡を境に西側に1面、東側に

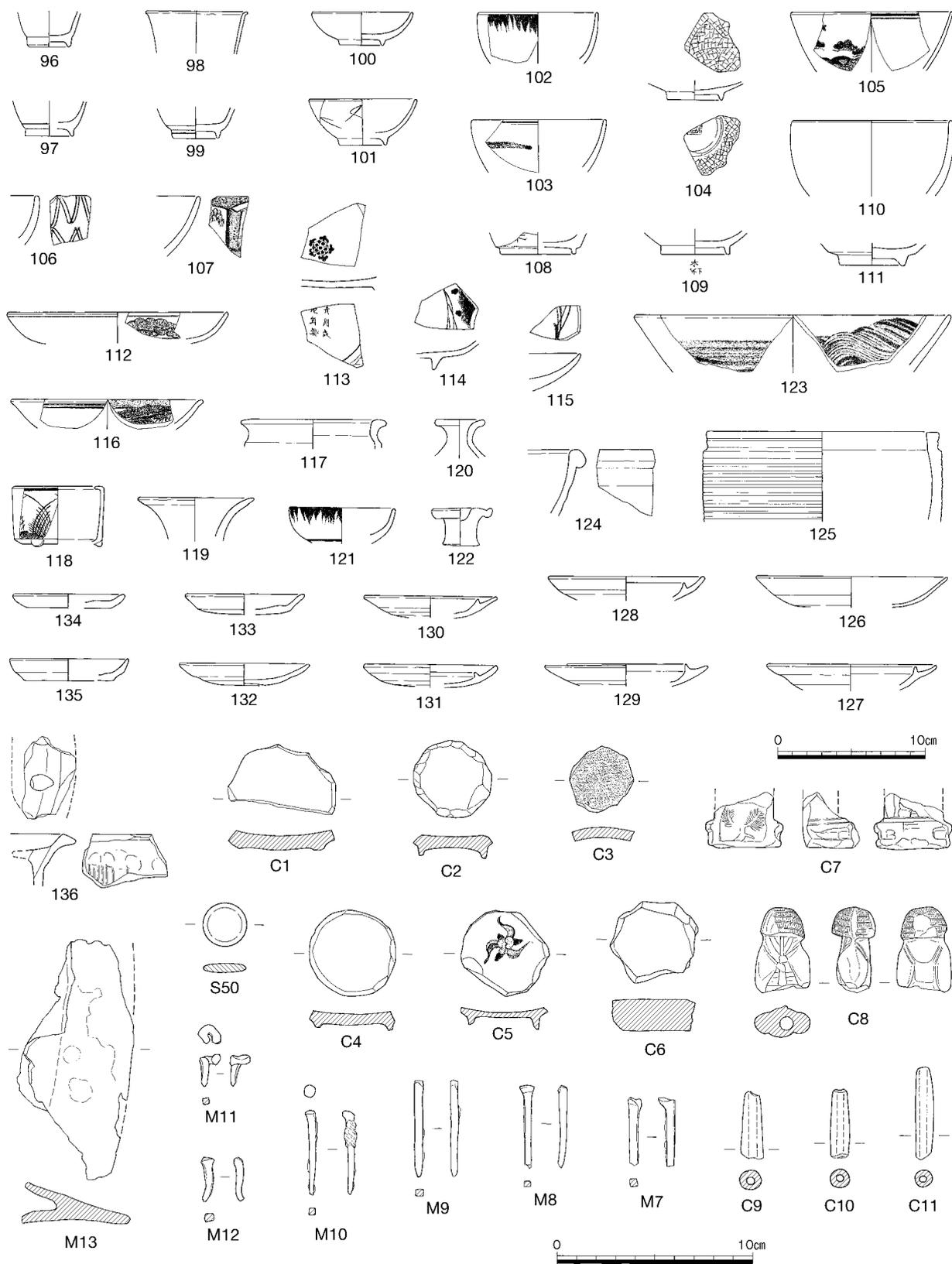


第29図 水田2出土遺物 (1/3・1/4)

2面の水田区画を想定した。その標高は7.4mの北側を最高として、西側で7.2m、東側で7.1mを測り、南東へ下る傾斜を見せる。2・3区でも、西に20度振れながら南北に延びる畦1で仕切られた2面の区画を検出したが、標高7.0mを測る西の区画は西より10cmほど低くなる。高さ4cm、幅60cmの断面台形を呈する畦1は黄褐色土層を削り出してつくられており、その北端は土壌4と重複する鍵形の溝に切られている。これらの田面では、径10cmほどのU字形をしたくぼみが水田の区画に沿って帯状に分布し、牛馬による耕作の痕跡と推定された。出土遺物には、瀬戸の天目茶碗62、輸入青磁の皿63、土師器の碗64～69、小皿70、鍋71～73、東播系須恵器の捏鉢75～77、瓦質をなす亀山焼の播鉢79、甕82、備前焼の播鉢80・81のほか、鉄製品M1～M5がある。M1・M2は2区の近接した地点で出土した用途不明の金具で、U字状の形体の上端部両端を折り曲げている。M3は釘、M4は頭部に折り返しがみられないことから楔と考えられる。M5は棒状の鉄製品で、断面が長方形をなす基部に対し先端は蒲鋒形を呈することから馬鍬の刃先と思われる。

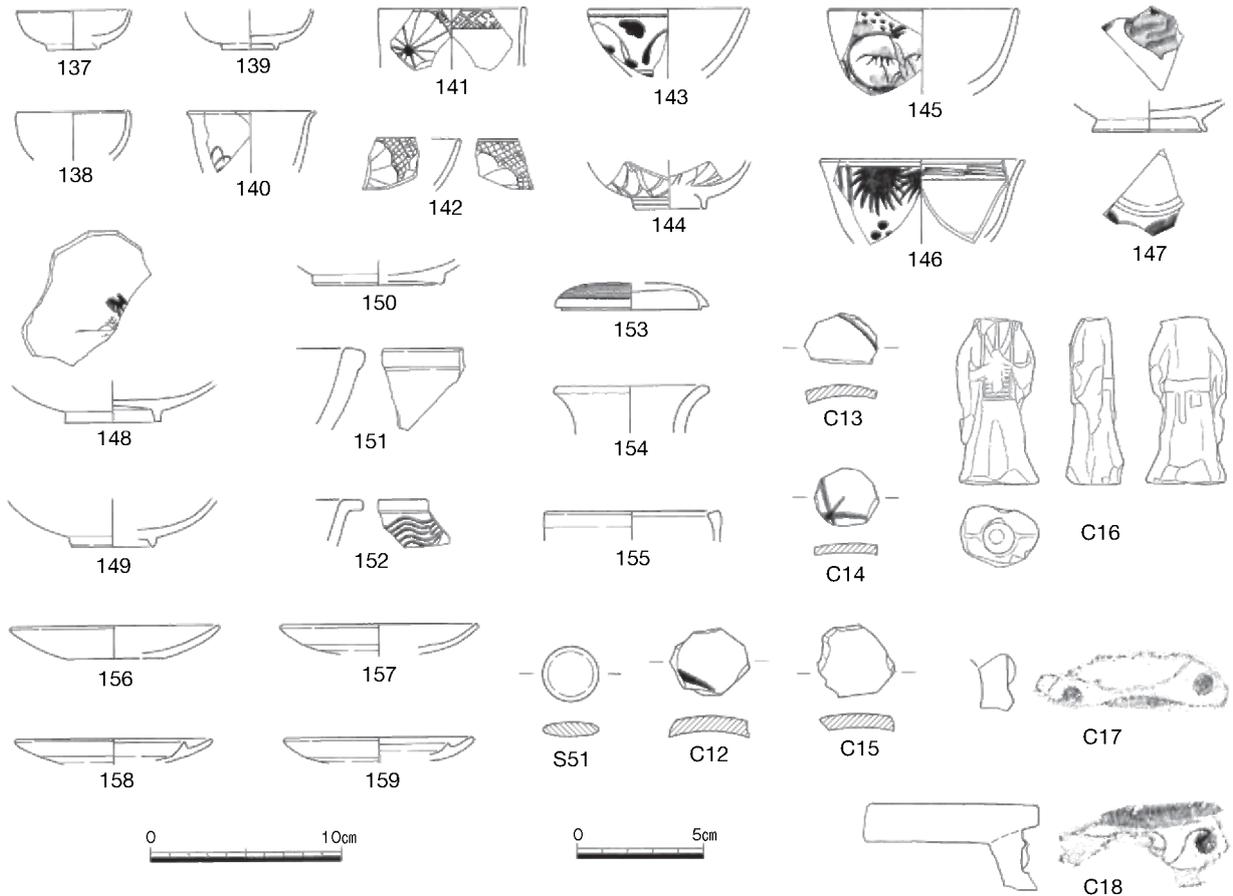
水田2は、灰白色土層（第6図A-B断面8層、C-D断面8層、第7図8層）の上面で検出した。1区では標高7.5mと一段高い北端と、標高7.3mの南端において遺存するにすぎないが、2・3区では全面にわたって確認できた。しかし区画は明瞭でなく、標高7.2mを測る2・3区の田面に耕作痕と見られる溝を多数検出するに留まった。出土遺物には、草花文や蓮弁文、雷文帯を飾る輸入青磁の碗83～85、皿89や美濃の小皿88、瀬戸の灰釉鉢皿90、備前焼の壺92、播鉢91・93、東播系須恵器の捏鉢94、土師器の鍋95など中世に属するものが多いが、肥前系染付碗86・87のように17世紀まで下るものもわずかに含まれている。このほか鉄製品として刀子の刃部と見られるM6がある。

水田3は、灰色土層（第6図A-B断面5層、C-D断面4層、第7図4層）の上面で検出したもので、1区では北西から南に向けて屈曲しながら延びる畦2を境に東西2面の区画を確認した。このうち東側の区画では、南端を区切る畦3が溝5と平行することからこれと同時期である可能性が高い。2・3区では西に22度振れながら南北に延びる畦4で仕切られた2面の区画を検出している。このうち東側の区画は2区西側の側溝にかかって南北に延びる畦の痕跡を確認しており、その東西幅は13mとなる。水田1の畦1より西へ1～1.5m離れた位置にある畦4は、高さ12cm、幅50cmの断面台形を呈し、盛り土の中から拳大の円礫1点が出土したが境石として埋め込まれたものかどうか判然としない。土壌11はこの畦際で検出した窪みであり、土壌5はこの畦の下から検出した。標高7.2～7.3mを



第30図 水田3出土遺物 (1/3・1/4)

測る田面には区画に沿って走る溝状の耕作痕が無数に認められた。出土遺物は18世紀を中心とする肥前系磁器の碗・皿が主体をなし、備前焼の灯明皿片も多数みられる。96~99・101~107・112~116・118・121は肥前系染付、100・119・120は肥前系白磁、117は肥前系青磁、108~111・123・124・

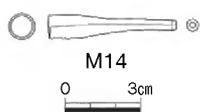


第31図 水田4出土遺物 (1/3・1/4)

132は国産陶器、125～131は備前焼、133～135は土師器、136は瓦質土器である。C1～C6は陶磁器や平瓦の破片を粗く打ち欠いて整形した円板である。軟質陶器の人形には、祠を象った天神像C7と底面に軸棒痕跡のある虚無僧C8がある。C9～C11は管状土錘、S50は径2.2cm、重量3.6gを測る粘板岩製の黒碁石である。M7～M13は鉄製品で、M7～M12は釘、M13は鋤先である。

暗灰色土層（第6図A-B断面4層・C-D断面2層、第7図1層）の上面で検出した水田4は、北側の標高が7.7m、南側が7.4mを測り、南と北の壁面中央に観察される畦畔は造成前の水田畦畔とほぼ合致する位置にある。出土遺物には肥前系磁器の碗・杯・皿に加えて関西系陶器の碗が多く見られ19世紀のものが主体をなす。137～139・155は肥前系白磁、140～147・153は肥前系染付、148～152・156は国産陶器、154は肥前系青磁、157～159は備前焼である。C12～C15は陶磁器片を転用した円板で、周囲を粗く打ち欠いている。C16は虚無僧を象った軟質陶器の人形で、底面には軸棒痕跡がある。燻瓦には大ぶりの珠文をめぐる巴文軒丸瓦C17と巴文を中心飾りとする唐草文軒平瓦C18がある。径2.2cm、重量4.1gを測るS51は粘板岩製の黒碁石である。（亀山・杉山）

3 遺構に伴わない遺物



第32図 遺構に伴わない遺物 (1/3)

水田の掘り下げに際して設定した側溝から、羅字煙管の吸口M14が出土した。銅板を筒状に丸めて蠟付けしたもので、長さ5.1cm、小口径0.9cmを測る。出土層位は明確ではないが、江戸時代中期～近代の水田3・4に伴う可能性が高い。（亀山）

第3章 総括

第1節 田益田中遺跡の変遷

1 縄文時代以前

谷間を渉猟する人々

津高地区の中央を流れる笹ヶ瀬川は、第四紀洪積世前期に吉備高原上を流れていた古旭川の名残りとしてされ¹、吉備高原の南端に源を発したその流れは、岡山平野を南流して瀬戸内海へと注いでいる。中生代に貫入した花崗岩の風化土壌が広がるこの一帯では浸食作用が顕著で、運ばれた大量の土砂は谷底平野を形成するとともに、丘陵裾部に小規模な扇状地を形成している。集落遺跡の多くはこうした谷底平野の氾濫原や扇状地上に立地しており、田益田中遺跡もその一つである。

瀬戸内海沿岸部における旧石器時代の遺跡は、丘陵上や島嶼部に点在しており、岡山平野においても操山（標高169m）の山上で旧石器が採集されている。その一方で、谷部に位置するこの遺跡においても、国立病院調査区（以下国立病院）の河道から出土したのではあるが、後期旧石器時代のナイフ形石器が1点確認されている。これと関連するように、笹ヶ瀬川調節池調査区（以下調節池）では、標高3.68～2.98mにおいて、マツ・ツガ・モミ・トウヒといった針葉樹の花粉が卓越する地層が確認された²。これに対応する地層は、ここから18km南に離れた玉野市八浜の標高-14.7～-15.9m（深度20.55～29.95m）において確認されており、29,000±720BP～10,500±125BPの年代値が示されている³。これらは、市街地の地下でしばしば観察されるAT火山灰層を挟む洪積層の泥炭層とともに、岡山平野の形成過程を示す重要な資料と言える。

旧石器時代、岡山平野一帯には児島湾を谷底とする平原が広がっていたものと推定されているが⁴、人々が活動した痕跡は厚い沖積層に阻まれて確認することはできない。しかし、田益田中遺跡で旧石器の出土を見たことは、谷間から平原へと渉猟する人々の存在を想起させる。

低地への進出

縄文時代における最も古い遺物は、やはり調節池の河道から出土した草創期の尖頭器である。岡山県内ではこれまでに38点の尖頭器が知られているが⁵、県南部におけるその分布は旧石器と同様の傾向を示しており、活動の主たる舞台が依然として平原を望む丘陵部にあったことを物語る。標高-2.5mで確認された南方釜田遺跡のAH火山灰を伴う生

表1 河道出土の縄文土器

時期	笹ヶ瀬川調節池				国立岡山病院					
	河道9	河道10	河道14	河道1	河道2	河道5	河道6	河道7	河道10	
中期	里木Ⅱ	○								
	矢部奥田	○		○	○					
後期	中津			○	○	○				
	福田KⅡ			○	○					
	+			○		○	○		○	
	彦崎KⅠ			◎	◎			◎	○	
	彦崎KⅡ			◎	◎			○		
晩期	福田KⅢ				○					
	+				○					
	舟津原								○	
	谷尻				○				◎ ◎	
	南方前池				○				◎	
	沢田								◎	

痕⁶や、標高-0.6mで確認された岡山城下町の波食台(6220±95BP)⁷などから推定されるように、海進が進んだ前期には南方あたりまで海が入り込んでいたようで、谷部を抜けた笹ヶ瀬川もこの海に直接注いでいたものと思われる。その後、沖積化は急速に進み、人々の氾濫原への進出が本格的にはじまる。

この遺跡でまとまった遺物がみられるようになるのは中期末に位置づけられる矢部奥田式の段階で、岡山平野の北縁に位置する朝寝鼻貝塚⁸や津島岡大遺跡⁹においても同時期の遺物が知られている。後期前葉(中津式期)の遺物も見られるものの、最も多いのは後期中葉(彦崎K I~K II式期)の段階である。しかし、後期後葉から晩期前葉にかけて遺物量は減少し、再び増加に転じるのは晩期後葉(突帯文期)

のことである。このように田益田中遺跡では、小規模な集団が断続的に活動していた様子がうかがえるが、その動きは岡山平野の集団ともほぼ軌を一にしている。

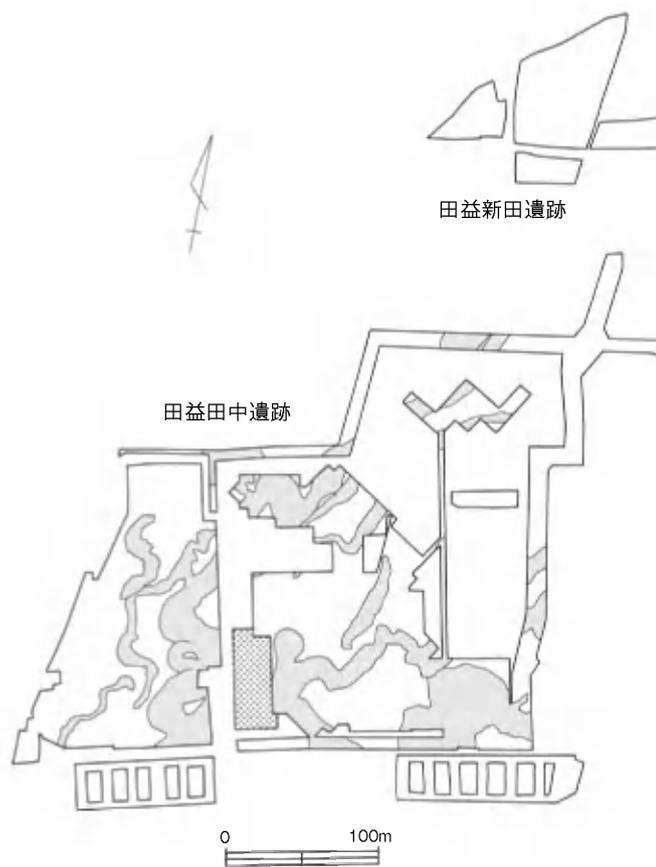
ところで縄文時代の田益田中遺跡では、大形植物遺体や花粉化石の同定を通じて、網状の河道が広がる氾濫原に、照葉樹に広葉樹や温帯性針葉樹を交えた森林が迫る環境が復元されている。ところが今回、そうした河道の堆積層にイネの機動細胞珪酸体が含まれていることが新たに判明した。その量は稲作を想定するに十分なものと判断されており(第2節参照)、水田雑草とされるキビ属の珪酸体の存在からしても、縄文時代のある時期に河道の周辺でイネの栽培が行なわれていた可能性がある。突帯文期の遺物はそれ以前と異なり、国立病院の南東から調節池(下池)にかけて集中する傾向を示すが、その背景にこうした生活基盤の変化があったことも考えられ、今後、石器なども含めて検証していく必要がある。(杉山)

2 弥生時代

弥生集落の形成

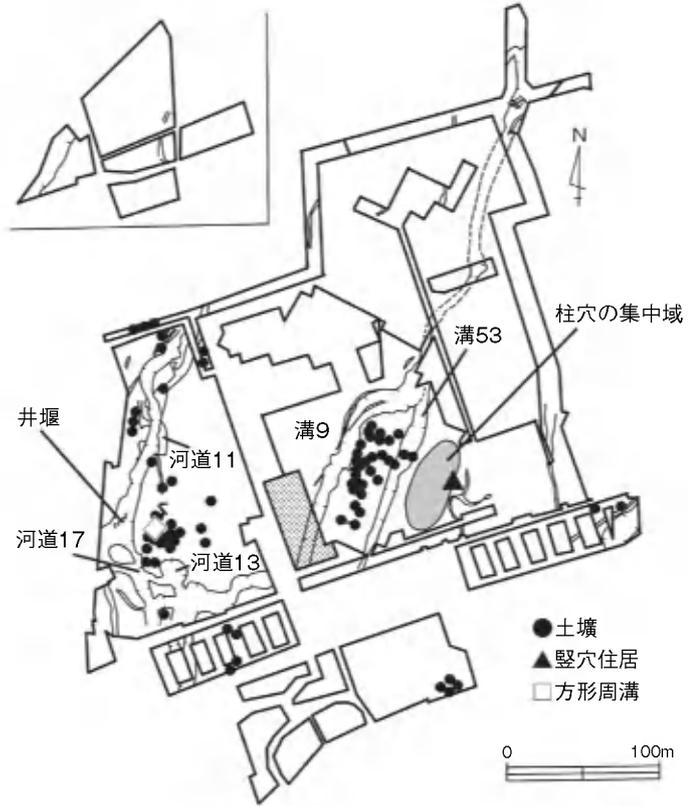
弥生時代前期の遺構は田益地区のほぼ全域で検出されている。その総数は確実に時期の判明するもので124を数える。その内訳は竪穴住居1軒、方形周溝1基、土壇92基、溝23条、河道7条である。土壇が多く、これに溝と河道が続くものの、この両者には判別の難しいものが含まれている可能性は否めない。なお、出土遺物の大半は河道ないしは溝からの出土であり、土壇からの出土は少ない。

次に遺構の分布を検討する。まず、河道であるが、国立病院の河道1・11、あるいは調節池の河道



第33図 縄文時代遺構全体図(1/5,000)

13・17などにみるように、調節池（上池）西側を北西から南西にかけて蛇行しながら流れている。さて、調節池（上池）での特筆すべき遺構としては、調査区のほぼ中央で検出された、幅50cmの溝が8×5mの方形に巡る遺構が挙げられる。この方形周溝は墓と推定されているが¹⁰、埋葬の痕跡は確認されておらず、その性格は必ずしも明らかではない。しかし、これを取り巻くように検出された約20基の土壇の大半から遺物が出土すること、すぐ近辺の河道11で約60点の土器とともに人面表現のある土器が出土したこと、さらに隣接する河道17でも80点を超える土器の出土したことは注目できる。人面表現のある土器については集落周辺の溝や河道、墳墓からの出土が多く、葬送儀礼や集落内祭祀に使用されたものとされることと合わせて¹¹、この地点



第34図 弥生時代前期遺構全体図（1/5,000）

でこれら土器の廃棄を伴う祭祀行為のあった可能性が指摘できる。また、この方形周溝の北西約30mの地点の河道内で検出された井堰も川の流路方向に沿うように築かれており、方形周溝近辺での導水を目的としたものと見られる。これもあわせた祭祀用の空間が形成されていたのではないかと考える。すなわち、この方形周溝は祭祀空間における中心となる遺構であると評価したい。一方、遺跡の中央では今回調査した溝4の続きにあたる国立病院の溝9や溝53の間隙地と、溝10の南東側にあたる国立病院の竪穴住居1近辺で遺構の集中が認められる。特に前期後葉とされる竪穴住居1近辺では多数の柱穴が検出されており、この地点に掘立柱建物を伴う集落の中心のあった可能性が高い。なお、用排水路とされる国立病院の溝9や溝53は弥生時代前期の例としては大規模なものである。その走流方向は先述の河道1等と同じく遺跡の北東から南西に向かっており、今回の調査地点などで縄文時代の河道と部分的に重なって検出されていることなどから、旧河道の窪みなどを利用しながら掘削された様子が窺える。

移動する集落

弥生時代中期の遺構は前期段階に比べるとかなり希薄である。遺構の総数は40であり、その内訳は土壇19基、溝21条を数える。なお、調節池の河道群も前期に引き続きこの地点を流れていたものと見られるが、前期の河道との分別は難しく、弥生時代中期の遺物の出土した河道の範囲を点線で示している。さて、遺構の分布に着目すると、国立病院中央の溝10や溝53を除けば、遺構の大半は東側の溝66・67・68近辺に集中するようになる。しかしながらこの地点の遺構は土壇のみであり、建物や住居等は検出されておらず、居住域は遺跡外へと移動したものと考える。

広範な集落の展開

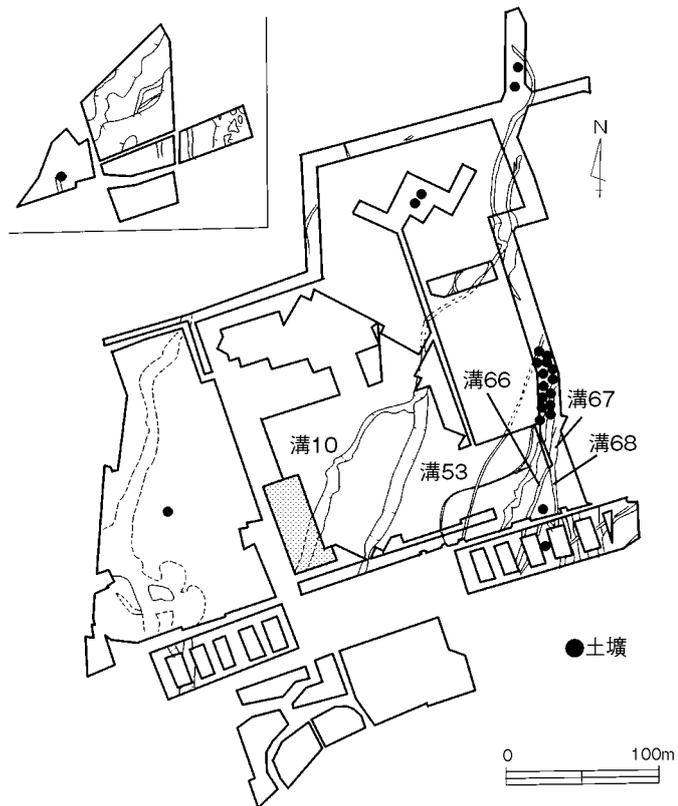
弥生時代後期になると、遺構数は再び増加に転じる。その総数は78であり、内訳は竪穴住居4軒、掘立柱建物5棟、井戸8基、土壇43基、溝17条、河道1条である。弥生時代前期～中期にかけてみられた河道の大半はこの時期までに埋没し、残る調節池（上池）の河道1や、田益新田遺跡の河道群も後期末頃には埋没することから、沖積化の進行が窺える。なお、河道の埋没に合わせるようにして、井戸の出現することは示唆的である。

さて、弥生時代後期には中期まで遺構分布の見られた国立病院で遺構がほぼ姿を消し、それまで遺構の希薄であった山陽自動車道A・B調査区（以下山陽自動車道A・B）と田益新田遺跡に集中して遺構がみられるようになる。その内容も地点ごとに異なり、山陽自動車道Aでは土壇のみ9基、山陽自動車道Bでは竪穴住居3軒・掘立柱建物2棟と井戸5基、田益新田遺跡では掘立柱建物3棟と井戸3基、土壇11基が検出されている。遺跡全体が調査されたわけではないため断言はできないが、掘立柱建物・竪穴住居数と井戸の数がほぼ拮抗することを指摘できる。吉備地域での弥生時代後期の井戸について、弥生時代後期までは世帯共同体単位での井戸の位置が考えられる一方、弥生時代後期末からは、単一住居址での占有的位置として捉えることができるとされるが¹²、この遺跡でもほぼ同様の関係にあるのではないかと推察される。

さて、弥生時代後期には中期まで遺構分布の見られた国立病院で遺構がほぼ姿を消し、それまで遺構の希薄であった山陽自動車道A・B調査区（以下山陽自動車道A・B）と田益新田遺跡に集中して遺構がみられるようになる。その内容も地点ごとに異なり、山陽自動車道Aでは土壇のみ9基、山陽自動車道Bでは竪穴住居3軒・掘立柱建物2棟と井戸5基、田益新田遺跡では掘立柱建物3棟と井戸3基、土壇11基が検出されている。遺跡全体が調査されたわけではないため断言はできないが、掘立柱建物・竪穴住居数と井戸の数がほぼ拮抗することを指摘できる。吉備地域での弥生時代後期の井戸について、弥生時代後期までは世帯共同体単位での井戸の位置が考えられる一方、弥生時代後期末からは、単一住居址での占有的位置として捉えることができるとされるが¹²、この遺跡でもほぼ同様の関係にあるのではないかと推察される。

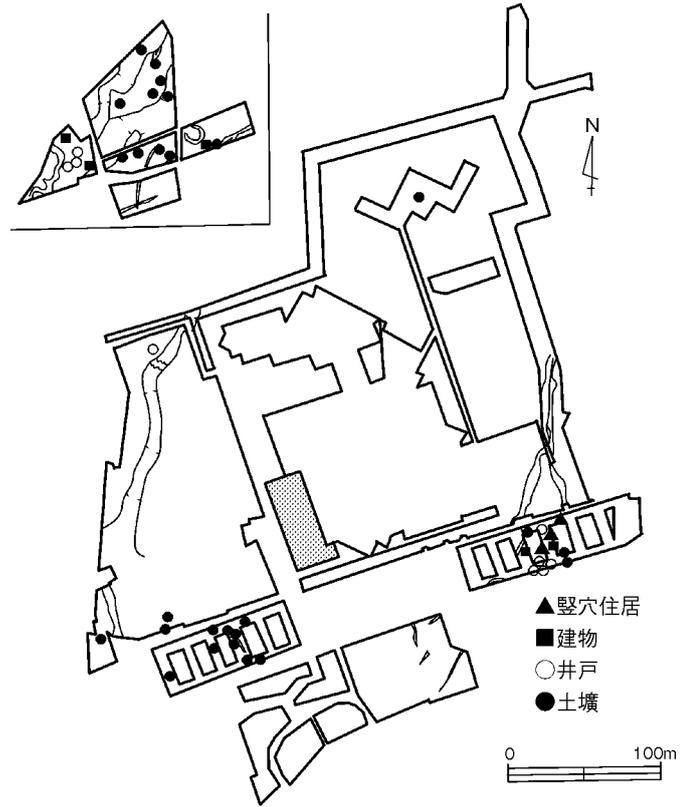
弥生集落の特徴

今回の調査と合わせて田益田中遺跡では弥生時代前期～後期にかけての遺構の変遷が明らかとなった。弥生時代前期に遺跡中央で祭祀空間と居住域が形成された。また、自然地形に規制されながら大形溝が掘削された。このことは未だ人口の少ない段階の効率的な土木技術であったことと同時に、弥生時代前期の段階でこうした大規模灌漑事業を可能とする農業共同体的な強い靱帯が形成されていたと評価できる。その後、弥生時代中期には一時的に居住域が認められなくなる。この遺跡の南西約2.4kmの丘陵上にある津高住宅団地内遺跡群では、この時期に遺構が出現しており、居住域の移動がこうした丘陵部への集落進出と連動している可能性を指摘しておきたい。続く弥生時代後期には河道が埋没し、遺跡の南側や田益新田遺跡で井戸や住居、建物からなる居住域が形成された。また、井戸と住居・建物の関係から推察されるように、世帯ごとの自立傾向が見られるようになった。一方、遺跡の南東約500mの丘陵上に位置する大岩遺跡では、特殊器台の出土から墳墓域のあったことが窺える。世帯ごとの自立を背景としながらも、後期末には墳墓・祖霊祭祀という新たな共同体的イデオロギー



第35図 弥生時代中期遺構全体図（1/5,000）

の受容が見られることは注意を要し、こうした二重制が当該地域の社会構造の一端を示していると評価する。ところで、今回の調査と合わせても弥生時代の生産域の動向をつかむことはできなかった。多数の溝の存在から、これらが灌漑する水田域の存在を想定できるが、その詳しい位置は不明である。しかしながら今回調査した弥生時代前期の溝4（国立病院の溝9）からは多量のイネの機動細胞珪酸体が出土しており、溝周辺での稲作の存在が指摘されている。溝4は先述のように、その規模からこの段階の基幹水路と見られるが、調査範囲内ではそれにとりつく枝水路がほとんど見られない。そのため、弥生時代前期の水田域は調査区内ではなく、遺跡の北東側、あるいは導水先である遺跡南西の低位部に広がっているものと考えたい。（和田）



第36図 弥生時代後期遺構全体図（1/5,000）

3 古墳時代

古墳時代の集落

古墳時代の遺構は、調節池と山陽自動車道にまとまっており、国立病院では概して稀薄である。調節池（上池）は丘陵裾部から氾濫原へ移行する地点にあたり、その境界には笹ヶ瀬川から分岐した河道が南西に向かって流れている。検出された遺構は竪穴住居3軒（前期2軒、中期1軒）、土壇数基、溝2条にすぎないが、河道からは前期前半～後期後半にわたる遺物が多量に出土している。岡山南部では、前期後半～中期前半にかけて集落遺跡が減少する傾向にあり、御野平野でも津島遺跡¹³や北方下沼遺跡¹⁴がわずかに知られるのみであるが、この地点では小規模ながらも継続して集落が営まれていたようである。とくに後期後半の河道内遺物は比較的まとまっており、大形の横穴式石室をもつ西山古墳群¹⁵のような群集墳や、後述するような製鉄遺跡とのかかわりが注目される。

一方、氾濫原の山陽自動車道や調節池（下池）では、山陽自動車道Bから調節池（下池）の東側にかけて、前期前半の竪穴住居2軒、土壇2基、溝8条が検出されている。この地点では弥生時代後期の竪穴住居や井戸、土壇、溝などが検出されており、前代から引き続き集落が営まれたものと思われる。しかし、中期に入ると遺構・遺物はほとんど見られず、他地に移動した可能性が高い。

特異な田益新田遺跡

ところで、この遺跡の北側に近接する田益新田遺跡では、才の町式～下田所式段階（IX c～X b期）¹⁶の小規模な掘立柱建物が多数検出されている。これらは、1×1間（4.1～7.2 m）15棟、2×1間

(8.6～11.1㎡) 9棟、2×2間 (8.4～9.5㎡) 2棟、3×2間 (17.6㎡) 1棟と、10㎡に満たない建物がほとんどである。調査担当者は削平された竪穴住居と判断しているが¹⁷、その構造や柱穴の遺存状態から考えて、平地式の建物と見做してよいだろう。建物の周辺で検出された15基の井戸は、いずれも深さ1m前後と浅く、地下水位が極めて高かったことを示している。この場所は、笹ヶ瀬川から分岐した河道が弥生時代前期～後期にわたって重複するように走っており、集落が形成された段階でもその痕跡が窪みとして残されていたようである。竪穴住居という半地下式の住居構造が採用されなかったのは、こうした湿潤な立地に起因するものと考えられるが、あえてこのような場所が居住地として選ばれたのは、眼前に広がる氾濫原の水利を掌握する

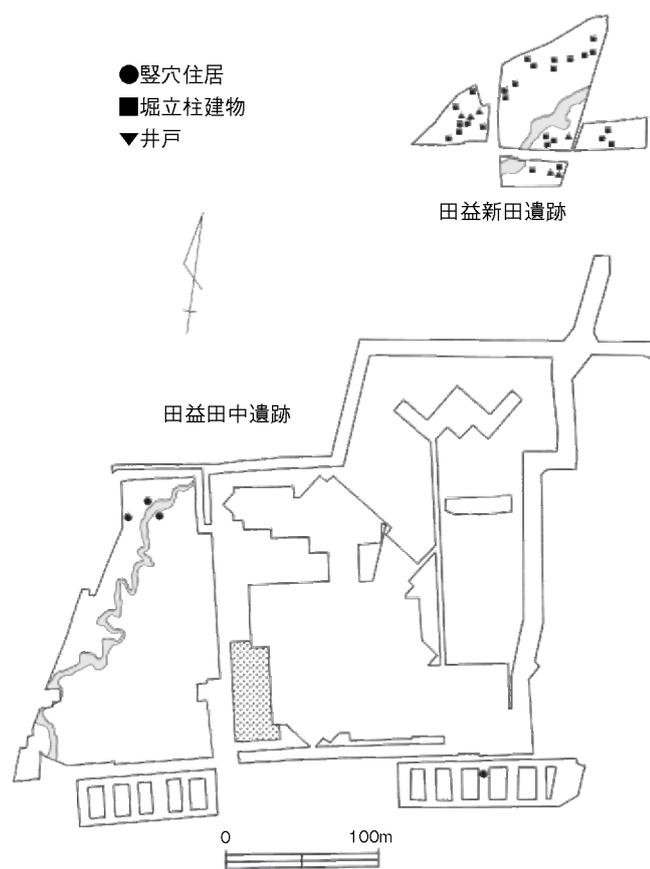
ねらいがあったのかも知れない。しかし、短期間に廃絶したようで前期後半には姿を消している。

さて、この遺跡から出土した土器を見ると、壺では、体部内面をヘラ削りする二重口縁の壺に加えて、体部の内面をハケメで調整する非在地系の壺が混じる。甕には、櫛描き沈線を施す二重口縁の甕(吉備型甕)と、く字形の口縁部をもつ甕があるが、前者の占める割合は44%と同時期の御野平野の集落に比べると極めて低い。これは、前者を製作・供給する集団との地理的あるいは社会的な隔たりを示しているように思われ、伝統的技法で製作された後者は、その供給不足を補うために集落内で製作されたことも考えられる。このほか、近畿系の二重口縁壺(吉備新線28、北バイパス137)や高杯(北バイパス228)、山陰系の壺(北バイパス126)や甕(北バイパス55・206)、器台(吉備新線85・182、北バイパス313)なども出土しており、御野平野の拠点集落である津島遺跡¹⁸や伊福定国前遺跡¹⁹と比較すると数は少ないものの、やや奥まったこの地域にまで他地域産の土器が持ち込まれている点は、集落形成の背景とともに興味のもたれるところである。(亀山)

4 古代

条里制地割の遺構

古代の遺構は、丘陵裾部にあたる調節池(上池)で検出した溝2条にすぎないが、遺物は少量ながらも広範囲にわたって出土しており、今回の調査でも黄褐色土層上から須恵器の杯37・壺38が出土している。検出された遺構のうち、幅2～4m、深さ30～40cmを測る溝19は、現在も残る条里制地割の坪境を、110mにわたって南北にまっすぐ走っている。このような条里制地割にかかわる遺構は県内



第37図 古墳時代前期遺構全体図 (1/5,000)

各地で調査が行われており、御野平野においても坪境を東西に走る幅10m前後の大溝が、津島岡大遺跡²⁰や津島中溝遺跡²¹、北方地藏遺跡²²などで検出されている。しかし田益田中遺跡では、溝19のほかに条里制地割にかかわるような古代の溝は検出されていない。そこでこの溝を延長してみると、南は津波井で半田山を下った山陽道と直交して烏山の尾根に至り、北は花園団地の丘陵先端をかすめて小原山の頂に達する。これは、津高地区南部の沖積地を東西にほぼ二分する位置にあたり、条里制地割を施工する際の基準線として掘削されたことも考えられる。

津高地区は、律令制下の津高郡津高郷に比定され、宝亀7年(776)の売買券が残るように早くから開発が及んでいたことが知られる。この津高地区の条里制地割を規制する古代山陽道は、半田山から津高台地遺跡群の谷を下りて笹ヶ瀬川を横断し、富原遺跡の南を通って坂を越え、辛川へ抜ける道筋が想定されている。津高駅に比定される富原遺跡は、備前国の国府系瓦とされる平城宮6225・6663型式の軒瓦をもつことで知られており、遅くとも8世紀後半にはこの道筋が整備されたものと考えられる。田益田中遺跡の溝19からは8世紀末～9世紀初頭の土器が出土しているが、前述した御野条里にかかわる大溝からも8世紀前半の土器が出土していて、津高条里がこれらにさほど遅れることなく施行された可能性が高い。

製鉄との関わり

黄褐色の基盤を覆う水田層からは、古代～中世の土器に混じって鉍石系の製錬滓と鍛冶滓、炉壁片(第3節参照)が出土している。鍛冶滓の存在は、この遺跡で鉄器生産が行われた可能性を示唆するが、製錬滓や炉壁から製鉄作業を含めた一貫操業を考えてよいのかどうか、遺跡の立地や資料の僅少さから躊躇せざるをえない²³。しかし近年、津島遺跡(家庭裁判所所長宿舍)²⁴や原尾島遺跡(雇用促進住宅)²⁵など沖積地で鉄鉍石と製錬滓が伴出する事例が増えており、沖積地において製鉄作業が行われていた可能性も全く否定はできない。

津高地区では、笹ヶ瀬川東岸の丘陵に白壁奥遺跡²⁶や津高住宅団地内遺跡群²⁷、西岸の丘陵に小原山遺跡²⁸など、7世紀の製鉄炉や製炭窯が検出されており、金山に産出すると言う鉄鉍石と、丘陵部の豊かな森林を原料として盛んに製鉄作業が行われていたものと推定されている。この遺跡では、こうした遺跡で生産された鉄素材をもとに鉄器製作を行い、御野平野の諸集落へ供給する役割を果たしていたのではなかろうか。(亀山)

5 中世以後

中世の集落

調節池や国立病院では、中世のものと思われる遺構が散見される。掘立柱建物は、調節池(上池)の東側から国立病院本館の西側にかけて3棟を検出した。5×2間の東西棟1、3×2間の南北棟1、3×2間の東西棟1で、棟筋は地形にあわせて北西ないし北東へ振れている。また、国立病院の東側でも、2×1間、1×1間の東西棟をそれぞれ1棟検出しているが、これらの棟筋は条里制地割を指向している。両者とも時期の比定は困難であるが、包含層の遺物は14～15世紀に属するものが多い。

この時期、御野平野では松田氏の活躍が伝えられている。松田氏は、南北朝の動乱の際、伊福郷の地頭職を得て相模より来住したといい、鹿田荘を蚕食しながら勢力を広げ、ついには西備前を支配下において守護赤松氏と対立するに至る。備前守護代浦上氏と対峙した福岡合戦において既にその名に見える横井氏は、金川に拠点を移した松田氏が富山城の城番を委ねた老臣であるが、その城館跡の伝

承地が、田益田中遺跡と幅15mほどの旧河道を隔てた東側に残されている²⁹。田中集落の一画を占めるこの場所は、水路と路地で囲まれた東西60m、南北50mの不整形をなし、城之内の小字名を留めている。付近には陶磁器の散布が認められ、山陽自動車道の建設に伴い発掘調査が実施されたが、明確な遺構は検出されていない。

近世村落と新田開発

近世に入ると、田中の集落は笹ヶ瀬川に近い自然堤防上に移り、調査地点はもっぱら耕地として利用された。田中村は、横井中村と呼ばれる横井村の枝村であったが、18世紀前半の「備陽記」によれば家数は74軒と本村の79軒にほぼ匹敵している。さらに、19世紀初頭には122軒まで増加しており、集落から離れた国立病院においても耕地に隣接して建物や井戸が検出されている。今回の調査でも、水田層や水路から18～19世紀を中心とした陶磁器が少なからず出土しており、付近に人家が存在していたことをうかがわせる。これらの陶磁器は、肥前系の碗・皿・鉢を主体として、関西系の椀・搦鉢、備前の鉢・徳利・灯明皿などで構成されるが、量産品の中でも上手に属する器は含まれておらず、かつまた焼成不良の製品が多く見られるといった点で、近郊農村との違いを示しているという³⁰。

今回検出した中世末～近世初頭の水田を見ると、中世以後に急速に進んだ土砂の堆積によって北西から南東に下る傾斜が次第に克服され、江戸時代末には医療センター建設まで見られたような短冊形の水田が東西に整然と並ぶ地割が成立している。その一方で、吉備高原の南縁を走り下る笹ヶ瀬川は、山林の荒廃もあいまって、大量の土砂が流入して天井川と化し、利水が困難となっていった。そのためこの地域では、谷部を利用して溜池が数多く造られており、内田の谷に築かれた益井池もその一つである。しかし、寛文年間に小原池が丘陵上に築かれると益井池は埋め立てられ³¹、新たに開かれた新田をもとに益井村が成立する。

明治8年、田中村は益井村と合併して田益村となり、その14年後には横井上・富原・中原の3村と合併して横井村が誕生する。そして昭和34年には津高村と合併して津高町となったが、昭和46年に岡山市へ編入された。近年は市街地近郊の住宅地として開発が進められる一方で、岡山空港や山陽自動車道・国道53号バイパスの建設を契機に、工業団地の整備が行なわれるとともに大型商業施設の進出も相次いでいる。

(亀山)

註

- 1 斎藤伸英「第四章第六節 笹ヶ瀬川・足守川流域」『岡山県史』第一巻 1983
- 2 バリノ・サーヴェイ株式会社「田益田中遺跡の自然科学分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140 1999
- 3 鈴木茂之「岡山平野における最終氷期最盛期以降の海水準変動」『岡山大学地球科学研究報告』vol.11-1 2004
- 4 註3文献
- 5 小嶋善邦・石田為成「縄文時代草創期の遺物について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』216 岡山県教育委員会 2008
- 6 福武書店本社建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会「岡山平野発見の火山灰」『古代吉備』第11集 古代吉備研究会 1989
- 7 高橋学『平野の考古学』2003

- 8 「朝寝鼻貝塚」『加計学園埋蔵文化財発掘調査室発掘調査報告書』2 加計学園埋蔵文化財調査室 1998
- 9 「津島岡大遺跡」16『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』21 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2005
- 10 小林利晴「弥生時代の遺構と遺物」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 岡山県教育委員会 1999
- 11 設楽博巳「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 1990
- 12 中野雅美「弥生・古墳時代初頭の井戸」『鎌木義昌先生古希記念論集 考古学と関連科学』1988
- 13 「津島遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 岡山県教育委員会 2003
- 14 「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 岡山県教育委員会 1998
- 15 「田益新田遺跡・西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109 岡山県教育委員会 1996
- 16 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告』9 岡山県立博物館 1988
- 17 「田益新田遺跡・青谷5号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』112 岡山県教育委員会 1996
- 18 註13文献
- 19 「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』125 岡山県教育委員会 1998
- 20 「津島岡大遺跡」6『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』9 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995
「津島岡大遺跡」10『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』14 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998
- 21 註14文献
- 22 「北方地蔵遺跡・北方藪ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』149 岡山県教育委員会 2000
- 23 鍛冶操業を行っていた岡山市津寺遺跡でも炉壁の出土が報告されており、鉄素材とともに集落へ持ち込まれた可能性がある。
「津寺遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 岡山県教育委員会 1997
- 24 「津島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137 岡山県教育委員会 1999
- 25 「原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 岡山県教育委員会 1999
- 26 「大岩遺跡・田益田中遺跡・白壁奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』128 岡山県教育委員会 1998
- 27 「津高住宅団地造成地内遺跡発掘現地説明会資料」岡山市教育委員会 1991
- 28 近藤義郎「かなな流し跡追及の失敗」『垣間みた吉備の原始古代』吉備人出版 1997
- 29 近世の地誌類に田中城の記述はなく、青井芳太郎が典拠に挙げた『御津郡誌』にも見当たらない。また青井は、宇喜多氏の家臣である別所豊後守の居城とする系図も紹介している。
青井芳太郎『松田氏と横井氏』津高郷土研究会 1938
青井芳太郎「横井城主の略史」『横井村誌』第2集 津高郷土研究会 1940
- 30 岡山市教育委員会 乗岡実氏教示。
- 31 確認調査に際して、粘質土塊で埋め立てられた様子が観察されている（T16）。
「田益田中（国立岡山病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 岡山県教育委員会 1999

第2節 田益田中遺跡の環境考古学分析

株式会社 パレオ・ラボ

1 大形植物遺体の同定

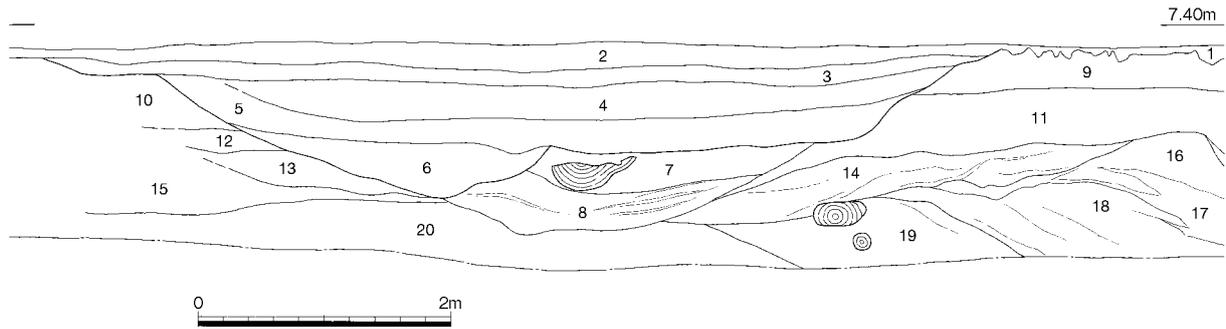
縄文時代後期～晩期の河道2の大型植物遺体を同定した結果、良好な状態の葉や種実遺体が検出された。食用または薬用などに利用の可能性がある種実としては、カヤと、イチイガシ、ムクノキ、エノキ属、クワ属、サクラ属サクラ節、キイチゴ属、キハダ、トチノキ、ニワトコ、シソ属などがあるが、種実の形状に人間が利用した痕跡は見いだされなかった。カヤやイチイガシ、トチノキは食用とされない部位も伴って産出しており、河道周辺に生育していた樹木から自然落下して河道内に堆積したと考えられる。河道内からは縄文時代後期前葉～中葉の土器片が出土している。本遺跡の他の調査区では土壌などが検出されているが、周辺に同時期の拠点的な集落は確認されておらず、小集団あるいは短期間の居住地であったと考えられている。河道2においても人間と植物の関わりが示せる積極的な痕跡は見いだされなかった。

また自然木については、弥生時代前期中葉の溝4ではアカガシ亜属が産出し、縄文時代後期前葉～晩期初頭の河道1ではイヌガヤとケヤキ、ニワトコ、縄文時代後期前葉～中葉の河道2ではアサダが産出した。アサダとアカガシ亜属、ケヤキは割れた材であったが、イヌガヤとニワトコの木取りは芯持丸木であった。確認できた試料の直径は、イヌガヤが1.8cm、ケヤキが復元値で18.0cm、ニワトコが2.5cmであった。

平成7～9年度に実施された国立岡山病院の調査では、縄文時代後・晩期の旧河道から出土した自然木50点の樹種同定が行われており、モミ属とムクノキ、ムクロジが各7点、コナラ属コナラ節が5点、イヌガヤが3点、ヤナギ属が2点、アカガシ亜属とケヤキ、サクラ属が各1点、広葉樹が16点産出した。ま

表2 田益田中遺跡出土の大型植物遺体（括弧は破片を示す）

分類群	出土遺構 層 洗浄量 部位/推定時期	河道2	河道2
		水洗済	第17層 500cc
カヤ	葉 種子	5	5
イヌガヤ	葉 種子	6	29
モミ	葉		82
イヌシデ	果実		2 (2)
アカシデ	果実		1
イチイガシ	葉 果実 未熟果	27 (1) 14	42+ 2 (8) 10
ツクバネガシ	殻斗	1	10 (6)
コナラ属	葉 果実 未熟果		3+ (17)
ムクノキ	核	3	1 (13)
エノキ属	核		2 (3)
ケヤキ	葉 種子		9+ 18 (4)
クワ属	核		5 (1)
サカキ	核		4
ヒサカキ属	核		3
モモ	核	1	
サクラ属サクラ節	核		(2)
キイチゴ属	核		1
フジ属	芽		4
アカメガシワ	種子		(2)
キハダ	種子		1
カラスザンショウ	種子		1
センダン	核	4	1
イタヤカエデ	果実		3
ミツデカエデ	果実		5 (1)
ムクロジ	果実	32 (5)	1
トチノキ	果実 未熟果 種子	1 (3) 4 (2)	(1) 23 (1)
タラヨウ近似種	核		2 (1)
ヤブカラシ	種子		1
タラノキ	核		3
エゴノキ	核	44	1
ハクウンボク	核	5	1
ムラサキシキブ属	核		3
ニワトコ	核		12
カラムシ属	果実		3
ヤナギタデ	果実		1
オカトラノオ属	種子		1
シソ属	果実		1
ナス属	種子		1
スゲ属	果実		1
不明芽	芽		++



- | | |
|---|--|
| 1 暗灰黄色 (2.5Y5/1) 土 | 10 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト |
| 2 灰白色 (2.5Y7/1) 粘質土 | 11 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト～微砂 (試料3) |
| 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土 (試料1) | 12 灰色 (7.5Y6/1) 細砂混じりシルト |
| 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 | 13 灰色 (7.5Y6/1) 砂礫 |
| 5 灰色 (N5/) シルト | 14 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 細砂～粗砂
(植物遺体を層状に含む、ラミナ顕著) |
| 6 灰色 (7.5Y5/1) 砂礫混じりシルト
(灰色シルト塊少量含む、試料2) | 15 緑灰色 (5G5/1) 細砂 (試料5) |
| 7 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 細砂～粗砂
(植物遺体を層状に含む) | 16 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂 |
| 8 灰色 (7.5Y6/1) 砂礫 (ラミナ顕著) | 17 黒褐色 (2.5Y3/1) 植物遺体集積層 (試料4) |
| 9 黄橙色 (10YR6/8) シルト (酸化鉄沈着) | 18 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂～細礫 (ラミナ顕著) |
| | 19 灰色 (7.5Y5/1) 細礫 (流木含む) |
| | 20 明緑灰色 (7.5GY7/1) 微砂混じりシルト |

第38図 試料採取層位 (1/60)

た、笹ヶ瀬川調節池の調査でも、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期の自然木の樹種同定が行われており、縄文時代後期ではムクノキが2点、イヌガヤ、モミ属、カヤ、チドリノキ、カエデ属、ムクロジが各1点、縄文時代晩期ではクリが5点、ヤナギ属が4点、ムクノキが2点、エノキ属とヤマグワ、ムクロジが各1点、弥生時代前期ではアカガシ亜属が2点、モミ属とクスノキが各1点産出した。本調査で出土した縄文時代後期前葉～晩期初頭の自然木でもイヌガヤやケヤキなどが、また弥生時代前期中葉ではアカガシ亜属が産出し、樹種構成は概ね一致していた。

このように周辺の植生としては、木本植物が主体を占め、草本植物はほとんど含まれていないことから、河道周辺の微高地に森林が迫った景観であったと推定される。花粉分析でも木本主体の組成が示されており、整合的である。葉の中ではイチイガシが主体を占め、果実、未熟果、殻斗と複数の器官を伴って産出しており、河道のごく近くに生育していたと推定される。カヤやイヌガヤの温帯性針葉樹や、ケヤキやトチノキの落葉樹も同様に複数の器官が産出しており、ムクロジも産出数が多く花粉も一定量検出されているので、これらの母植物が近くに存在し河畔林を構成していたと考えられる。また、アカメガシワやカラスザンショウ、タラノキなどの広葉樹の陽樹が含まれることから、河道周辺の林縁には明るく開けた場所があったと推定される。周辺にはイチイガシやツクバネガシ、サカキ、ヒサカキ属、タラヨウ近似種などの照葉樹によって構成される暖温帯の照葉樹林にイヌシデやアカシデなどの広葉樹が混じる植生が広がっていたと推定される。それらの樹木につる性植物であるフジ属やヤブカラシなどが絡んでいたと思われる。

2 花粉分析

縄文時代後期～晩期の河道2より採取された試料3 (第38図11層)、試料4 (同17層)、試料5 (同15層)によると、田益田中遺跡周辺丘陵部では尾根部などにアカガシ亜属を中心にシイ類、モチノキ属、ツバキ属などを交えた照葉樹林が広く成立していたとみられる。また谷部斜面にはコナラ亜属、クマシデ属-アサダ属、ムクロジ属などの落葉広葉樹林が成立しており、モミ属、ツガ属、ヒノキ類

表3 産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6
樹木							
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	1	-	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	3	11	2	2	4	2
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	7	4	-	-	-
マツ属 複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	3	10	2	2	-	-
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	5	3	4	-	1	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	6	5	3	-	1	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	12	19	-	1	-	1
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	2	3	1	4	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	5	-	-	-	1	-
ベカン属	<i>Carya</i>	-	-	-	-	1	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	2	2	-	-	1	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	21	11	12	1	3	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	3	1	1	-	1	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	1	4	1	8	2
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	1	-	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	78	35	18	1	2	1
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	110	148	30	182	6	3
シノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Pasania</i>	1	17	8	4	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	2	4	1	3	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	21	1	2	-	-
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	1	-	-	-	-	-
フウ属	<i>Liquidamber</i>	-	-	2	-	1	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	1	-	-	-	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	-	1	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	3	-	1	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	1	1	1	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	1	-	-	-	-
ムクロジ属	<i>Sapindus</i>	-	9	-	41	1	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	1	-	1	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	1	-
マタタビ属 近似種	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	1	-	-
ツバキ属	<i>Camellia</i>	-	1	-	6	-	-
サカキ属-ヒサカキ属	<i>Cleyera-Eurya</i>	-	-	-	1	-	-
ティカカズラ属	<i>Trachiospermum</i>	-	-	-	-	2	1
草本							
ガマ属	<i>Typha</i>	-	1	-	-	-	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	1	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	2	1	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	234	180	42	3	7	2
カヤツリグサ科	Cyperaceae	16	10	4	1	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoxia</i>	-	1	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	1	1	1	1	-
ギンギン属	<i>Rumex</i>	1	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	1	2	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	1	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	-	-	-	-
キンボウケ科	Ranunculaceae	-	2	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	-	1	1	-	-	-
ユキノシタ科 近似種	cf. Saxifragaceae	-	1	-	1	-	-
マメ科	Leguminosae	1	2	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	2	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	-	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	1	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	20	28	6	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	2	-	-	-	-
タンポポ科	Liguliflorae	-	-	1	-	-	-
シダ植物							
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	1	4	-	-	-
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	7	15	99	2	139	9
三条型胞子	Trilete spore	4	4	10	-	13	-
樹木花粉							
樹木花粉	Arboreal pollen	260	319	94	255	35	10
草本花粉	Nonarboreal pollen	277	238	55	6	8	2
シダ植物胞子	Spores	12	20	113	2	152	9
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	549	577	262	263	195	21
不明花粉							
不明花粉	Unknown pollen	37	24	18	1	3	2

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

などの針葉樹類も一部に生育していたとみられる。なお、アカガシ亜属については、試料4において行われている種実同定の結果をみると、その多くがイチイガシの果実等であることから、アカガシ亜属花粉の大半はイチイガシと推測される。この時期の河道2の土手などにイネ科やカヤツリグサ科、クワ科、ヨモギ属、シダ植物などが生育していたとみられる。

また、弥生時代前期の溝4より採取された試料1（第38図2層）、試料2（同6層）によると、田益田中遺跡周辺丘陵部では尾根部などに依然としてアカガシ亜属を中心とした照葉樹林が成立していたと推測される。また谷部斜面にはコナラ亜属、クマシデ属—アサダ属などが生育する落葉広葉樹林も依然としてみられ、モミ属、ツガ属などの針葉樹類も生育していたとみられる。さらにスギ林も一部にみられるようになったと推測される。この時期の低地部ではイネ科花粉の多産や、オモダカ属、ミズアオイ属などの水田雑草を含む分類群も検出されていることから、水田稲作が行われていたことが推察される。

以上のように、縄文時代後期～晩期から弥生時代前期の田益田中遺跡周辺においては、アカガシ亜属を中心とした照葉樹林が成立していたと推測され、一部に落葉広葉樹類や針葉樹類も生育していたとみられる。これは、先に笹ヶ瀬川調節池建設に伴う発掘調査の際行われた自然科学分析結果と調和的であると考えられる。

3 植物珪酸体分析

弥生時代前期の溝4より採取された試料1・2と、縄文時代の河道2より採取された試料4からイネの機動細胞珪酸体が非常に多く検出された。ここで検出個数の目安を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原、1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。試料1と2では20,000個前後が検出されており、上記のことから弥生時代前期に溝4周辺で稲作が行われていた可能性は非常に高いと判断される。また、試料4においても、約15,000個が得られており、縄文時代後期～晩期の河道2周辺においても、稲作が行なわれていた可能性は高いと判断されよう。

イネ以外で最も多く観察されているキビ族については、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類が難しく不明である。しかしながら、イネと比例して多い値を示していることから、少なくとも試料1・2・4のキビ族については、稲作にともなう雑草類（タイヌビエなど）ではないかと思われる。ネザサ節型については、流路の土手部や遺跡周辺に成立していたと推測される森林の林縁部などの日のあたる開けたところにケネザサやゴキダケといったネザサ節型のササ類が多く生育していたとみられる。また、ススキやチガヤなどのウシクサ族も同じような所に生育していたと推測され、ススキ—ケネザサ群集といった草地を形成していたとみられる。一方、スズダケやミヤコザサなどのクマザサ属型のササ類は遺跡周辺の森林の下草的存在で生育していたとみられる。

表4 試料1g当たりの植物珪酸体個数

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	23,700	4,300	1,100	1,100	21,500	18,300	10,800
2	19,400	3,400	0	0	13,700	5,700	8,000
3	0	4,800	0	0	6,000	4,800	6,000
4	14,600	63,300	2,400	2,400	24,300	7,300	19,500
5	0	5,700	1,100	0	5,700	2,300	3,400
6	0	6,900	10,400	0	11,500	6,900	9,200

第3節 田益田中遺跡出土製鉄関連遺物の分析

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤 正己

奈良時代に属する可能性の高い3点の鋳滓と1点の炉壁について調査を行った。

(1) TT-1は長さ4.3×幅3.3×3.2cmで45.6gの鍛冶滓である。表面全体が黄褐色の酸化土砂に覆われる。顕微鏡組織を第39図の1段目に示す。主要鋳物相はウスタイト (Wustite:FeO) とファヤライト (Fayalite: 2FeO・SiO₂) がガラス地に晶出する。高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓の晶癖である。2種の鋳物相の検証はピッカース断面硬度で行った。ファヤライトは624Hv、ウスタイトは477Hvが得られた。文献硬度値の範囲内に収まる¹。化学組成分析はTable1に示す。微量Ti、V、Zr含有から磁鉄鋳 (塊状鋳) の由来である。高Mn傾向の特徴をもつ。

(2) TT-2は3.3×2.0×1.0cmで6.3gを測る。小型不定形滓で破面はみられない。鋳物相を第39図の2段目に示す。金属鉄粒のフェライト (Ferrite: 純鉄) を含み、ウスタイトの凝集気味の晶出をみる高温沸し鍛錬鍛冶滓であった。

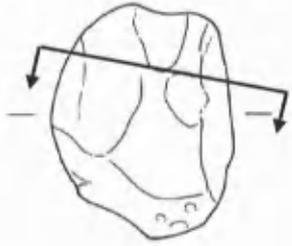
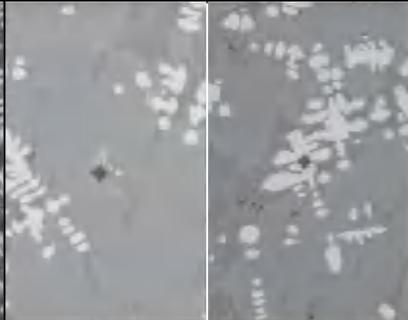
(3) TT-3は2.7×2.5×1.4cmで12.3gを測る。表面は風化が進むが、側面2面は破面だろう。微細な気孔をもつが緻密である。鋳物相を第39図の3・4段目に示す。淡灰色盤状結晶のファヤライトが成長した組織である。局部にマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄)、ヘイシナイト (hecyntite: FeO・Al₂O₃) を晶出する。磁鉄鋳 (塊状鋳) 由来の製錬滓の晶癖である。硬度測定はファヤライトが565Hvと異常値を出したがマグネタイト624Hv、ヘイシナイト1080~1172Hvと若干高め傾向を呈した。化学組成をTable1に示す。こちらも微量Ti、V、Zr系成分であるが注目すべきは6.81% MnOと高マンガンの特徴とする。磁鉄鋳 (塊状鋳) の共生鋳物としてのマンガン鉄鋳物の混入と推定される。岡山県下の鋳石製錬滓には時折り見掛ける現象である。津山市狐塚遺跡の滓で1.45%、総社市坂井砂奥遺跡の1.19%など実績値があるが、今回の数値は特別高値であった。

(4) TT-4は3.5×3.2×1.8cmで15.7gの重量をもつ。灰褐色被熱粘土と暗灰色溶融滓部が混在した小塊である。鋳物相を第39図の5段目に示す。溶融滓部は淡灰色長柱状結晶のファヤライトを晶出し、鋳石製錬を裏付ける鋳物相である。炉壁粘土の胎土はセリサイトが非晶質化し、石英は高温クラックが走る。製鉄炉炉壁の実証となる。

以上3点の鉄滓と1点の炉壁は製鉄と鍛冶に関する遺物であった。磁鉄鋳 (塊状鋳) 使用の製鉄一貫体制に連なる資料である。

表5 供試材の組成

符号	遺物名称	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化 第1鉄 (FeO)	酸化 第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 珪素 (SiO ₂)	酸化アル ミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カル シウム (CaO)	酸化マグ ネシウム (MgO)	酸化 カリウム (K ₂ O)	酸化ナト リウム (Na ₂ O)	酸化マン ガン (MnO)
TT-1	鍛冶滓	39.84	0.16	41.39	10.73	22.51	4.77	11.77	0.98	0.46	0.10	0.91
TT-3	製錬滓	41.04	0.09	42.32	11.52	23.85	4.25	3.75	0.82	0.24	0.03	6.81
符号	遺物名称	二酸化 チタン (TiO ₂)	酸化 クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化磷 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化 ジルコニウム (Zr ₂ O)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe
TT-1	鍛冶滓	0.62	0.02	0.02	0.22	0.05	<0.01	<0.01	0.01	40.59	1.02	0.02
TT-3	製錬滓	0.46	0.02	0.02	1.40	0.08	0.09	<0.01	0.03	32.94	0.80	0.01

		
<p>TT-1: 鍛冶滓 (1) (2)</p>		

遺構一覽表

掘立柱建物

掲載名称	調査名称		規模			柱穴				面積 (m ²)	棟方向	出土遺物	時期
	地区	No	間数	桁行 (cm)	梁行 (cm)	平面形	径 (cm)	桁間 (cm)	梁間 (cm)				
建物 1	1	10	5×2	541	437	円形	25～14	147～60	174～156	18.1	N-67° -W		中世
建物 2	3	31	5×2	693	395	円形	29～15	251～133	206～189	27.3	N-40° -E		中世

土壇・たわみ

掲載名称	調査名称		平面形	規模 (cm)			断面形	底面海拔高 (cm)	出土遺物	時期
	地区	No		長さ	幅	深さ				
土壇 1	2	29	楕円形	260	226	16	皿形	698		弥生時代?
土壇 2	1	15	楕円形	165	115	19	逆台形	683	土師器	弥生時代?
土壇 3	1	16	長楕円形	146	61	18	椀形	685		中世?
土壇 4	2	28	不整形	394	254	28	皿形	679	土師器、備前焼	中世?
土壇 5	2	26	方形	137	120	30	逆台形	694		近世
土壇 6	2	8	長楕円形	428	73	8	皿形	722		近世
土壇 7	1	14	長方形	472	212	76	逆台形	668	備前焼	近世
土壇 8	2	25	方形	198	186	40	逆台形	698		近世
土壇 9	2	23	円形	148	144	44	円筒形	695	染付、陶器	近代
土壇 10	2	24	不整形	105	96	47	逆台形	681	染付	近代
土壇 11	2	22	長楕円形	306	60	20	皿形	714		近世
たわみ 1	1	13	不整形	730	220	17	皿形	714		弥生時代?
たわみ 2	1	12	不整形	600	570	18	皿形	710	須恵器	中世

溝・河道

掲載名称	調査名称		規模 (m)			断面形	流走方向	出土遺物	時期
	地区	No	検出長	幅	深さ				
河道 1	1	20	28.60	7.27	1.48	逆台形	北西 → 南西	縄文土器・石器	縄文時代
河道 2	1～3	30	18.30	3.56	1.12	逆台形	北東 → 南西		縄文時代
溝 1	1	11	9.60	0.75	0.17	逆台形	北 → 南		弥生時代?
溝 2	1・2	18	27.06	1.14	0.16	逆台形	北東 → 南西	弥生土器、石器	弥生時代
溝 3	1	17	3.80	0.29	0.03	皿形	南西 → 北東		弥生時代?
溝 4	1～3	19	31.80	7.35	1.18	逆台形	北東 → 南西	弥生土器、石器	弥生時代
溝 5	1・2	21	10.10	0.94	0.09	皿形	西 → 東	染付、陶器、土師器	近世～現代

遺物観察表

土器・陶磁器

番号	地区名	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	保存	備考
					口径	最大径	底径	器高				
1	2区	河道 1	縄文土器	深鉢				(2.2)	黄灰色 (2.5Y4/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
2	2区	河道 1	縄文土器	深鉢				(2.7)	暗灰色 (N3/)	粗砂・細砂含む	体部片	縄文RL
3	1区	河道 1	縄文土器	深鉢			6.8	(2.0)	灰黄色 (2.5Y6/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	
4	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(5.9)	灰褐色 (7.5YR4/2)	粗砂・細砂含む	体部片	沈線文
5	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(6.5)	灰黄褐色 (10YR6/2)	粗砂・細砂含む	口縁部片	沈線文
6	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(5.1)	灰黄褐色 (10YR6/2)	粗砂・細砂含む	口縁部片	磨消縄文 (縄文RL)
7	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(6.4)	褐色 (10YR5/1)	粗砂・細砂含む	体部片	磨消縄文
8	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(3.8)	黄灰色 (2.5Y5/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	磨消縄文?
9	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(2.8)	黄灰色 (2.5Y5/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	沈線文?
10	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(3.0)	黄灰色 (2.5Y4/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	沈線文
11	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(3.5)	灰黄褐色 (10YR5/2)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
12	3区	河道 2	縄文土器	鉢				(3.8)	灰黄色 (2.5Y6/2)	粗砂・細砂含む	口縁部片	沈線文
13	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(3.4)	灰オリーブ色 (5Y5/2)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
14	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(6.5)	黄灰色 (2.5Y6/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
15	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(6.5)	黄灰色 (2.5Y5/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
16	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(4.8)	灰色 (5Y6/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
17	3区	河道 2	縄文土器	深鉢				(5.5)	灰黄褐色 (10YR6/2)	粗砂含む	体部片	縄文RL
18	3区	河道 2	縄文土器	深鉢		9.6		(1.7)	灰黄褐色 (10YR5/2)	粗砂・細砂含む	底部片	平底

番号	地区名	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	保存	備考
					口径	最大径	底径	器高				
19	3区	河道2	縄文土器	深鉢			9.2	(3.1)	黄灰色(2.5Y5/1)	粗砂・細砂含む	底部1/4	凹み底
20	3区	河道2	縄文土器	深鉢			13.2	(3.6)	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	高台底
21	1区南	土壌2	土師器	鉢				(2.5)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
22	2区	溝4	弥生土器	壺				(3.4)	灰白色(2.5Y7/1)	粗砂・細砂含む	肩部1/4	
23	2区	溝4	弥生土器	甕				(5.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	粗砂・細砂含む	体部片	
24	2区	溝4	弥生土器	甕			8.8	(4.3)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	粗砂・細砂含む	底部5/6	
25	2区	溝4	弥生土器	壺			8.9	(4.9)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	粗砂・細砂含む	底部1/2	
26	2区	溝4	弥生土器	壺			10.0	(5.7)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	
27	2区	溝4	弥生土器	壺			12.0	(3.5)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂・細砂含む	底部1/6	
28	2区	溝4	弥生土器	甕			6.8	(3.5)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	粗砂・細砂含む	底部1/2	
29	2区	溝4	弥生土器	甕			7.5	(2.8)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	
30	2区	溝4	弥生土器	甕			7.0	(2.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂多く含む	底部1/3	
31	2区	溝4	弥生土器	甕			7.2	(3.1)	灰白色(10YR8/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	
32	2区	溝4	弥生土器	甕			8.4	(2.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	
33	2区	溝4	弥生土器	壺			8.4	(2.4)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	
34	2区	溝4	弥生土器	壺			9.0	(2.5)	浅黄色(2.5Y7/3)	粗砂多く含む	底部1/4	
35	2区	溝4	弥生土器	甕			9.4	(3.2)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	粗砂・細砂含む	底部3/4	
36	2区	包含層	須恵器	杯	11.8	14.0		(3.2)	灰色(N6/)	粗砂・細砂含む	1/4	
37	1区	包含層	須恵器	杯	15.0		11.0	5.6	灰白色(2.5Y7/1)	粗砂・細砂含む	1/6	
38	2区	包含層	須恵器	壺			13.2	(4.8)	黄灰色(2.5Y6/1)	粗砂・細砂含む	底部1/7	
39	2区北	包含層	須恵器	高杯				(4.9)	灰色(N6/)	粗砂・細砂含む	脚部1/2	
40	2区	包含層	埴輪	円筒形				(4.5)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	粗砂・細砂含む	体部片	
41	1区	たわみ2	須恵器	甕				(2.5)	灰白色(N5/)	粗砂・細砂含む	底部片	
42	2区	土壌4	土師器	椀			5.5	(3.7)	灰白色(10YR8/1)	粗砂・細砂含む		早島式
43	2区	土壌4	土師器	椀			4.8	(1.2)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	早島式
44	2区	土壌4	備前焼				6.1	(1.9)	灰黄褐色(10YR5/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	
45	1区南	土壌7	備前焼	播鉢				(6.3)	褐色(10YR6/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
46	2区	土壌9	染付	小碗			3.0	(2.2)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	底部1/7	菊花文
47	2区	土壌9	染付	皿	9.0		5.0	2.1	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	高台1/4	輪花(型打ち)、松
48	2区	土壌9	染付	皿	12.6		8.1	3.6	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	1/4	輪花(型打ち)、山水文
49	2区	土壌9	染付	瓶		8.6	6.0	(4.3)	灰白色(10Y7/1)	精良	体部片	
50	2区	土壌9	陶器	雪平鍋	12.8			(3.5)	赤褐色(10YR4/3)	精良	口縁部1/5	鉄釉、跳び鏡
51	2区	土壌10	染付	碗			4.8	(3.0)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	底部1/7	
52	2区	土壌11	染付	碗				(1.7)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部片	
53	2区	溝5	染付	碗				(4.0)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部片	柳文
54	2区	溝5	染付	碗				(3.2)	灰白色(10Y8/1)	精良	口縁部片	梅文
55	2区	溝5	染付	碗			4.2	(4.4)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	1/3	
56	2区	溝5	染付	皿			4.1	(2.1)	灰白色(10Y7/1)	精良	底部1/2	蛇ノ目輪ハギ
57	2区	溝5	白磁	紅皿	4.5		1.5	1.5	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	1/3	
58	2区	溝5	染付	仏飯器			3.6	(4.6)	灰白色(10Y8/1)	精良	口縁部欠	唐草??
59	2区	溝5	染付	蓋物		9.7	6.8	(7.0)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	1/6	
60	2区	溝5	染付	蓋				(1.0)	灰白色(10Y8/1)	精良	天井部片	亀甲文
61	2区	溝5	土師器	小皿	8.7		6.6	1.0	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂・細砂含む	1/4	
62	2区北	水田1	陶器	椀	11.6		4.1	5.7	黒褐色(2.5Y3/1)	粗砂・細砂含む	1/8	瀬戸産、鉄釉天目椀、後期Ⅱ
63	1区	水田1	青磁	皿				(2.7)	オリーブ灰(2.5GY6/1)	精良	口縁部片	
64	1区	水田1	土師器	椀			4.2	(1.2)	灰白色(10YR7/1)	粗砂・細砂含む	高台1/2	早島式
65	2区北	水田1	土師器	椀			4.1	(0.9)	明黄褐色(10YR7/6)	粗砂・細砂含む	高台1/1	早島式
66	2区	水田1	土師器	椀			5.8	(2.7)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂・細砂含む	底部1/3	早島式
67	2区	水田1	土師器	椀			3.8	(0.9)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	粗砂・細砂含む	高台1/2	早島式
68	1区	水田1	土師器	椀			4.0	(1.1)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂・細砂含む	底部1/2	早島式
69	2区	水田1	土師器	椀			4.2	(1.2)	灰白色(10YR8/2)	粗砂・細砂含む	高台1/2	早島式
70	1区南	水田1	土師器	小皿	6.9		4.8	1.3	灰黄色(2.5Y6/2)	粗砂・細砂含む	完形	底部ヘラキリ
71	1区	水田1	土師器	鍋				(4.0)	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
72	1区	水田1	土師器	鍋				(5.0)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
73	1区	水田1	土師器	鍋				(2.2)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
74	1区	水田1	土師器	鍋				(4.9)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
75	2区	水田1	須恵器	捏鉢				(4.4)	灰色(N6/)	粗砂・細砂含む	口縁部片	東播磨産
76	2区北	水田1	須恵器	捏鉢				(4.8)	灰白色(N7/)	粗砂・細砂含む	口縁部片	東播磨産
77	2区	水田1	須恵器	捏鉢				(4.8)	灰白色(N7/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	東播磨産
78	1区	水田1	土師器	鍋				(2.4)	灰色(5Y4/1)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
79	1区	水田1	龜山焼	播鉢				(3.6)	灰白色(10YR8/2)	粗砂・細砂含む	口縁部片	
80	2区	水田1	備前焼	播鉢				(5.4)	灰色(N5/)	粗砂・細砂含む	口縁部片	

番号	地区名	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	保存	備考
					口径	最大径	底径	器高				
81	1区南	水田1	備前焼	播鉢				(6.7)	赤灰色(2.5YR5/1)	粗砂、細砂含む	口縁部片	
82	1区	水田1	亀山焼	甕			18.0	(4.3)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂含む	底部1/6	格子目タタキ
83	1区南	水田2	青磁	碗				(3.0)	灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	体部1/5	竜泉窯、画花文
84	2区	水田2	青磁	碗	13.0			(3.3)	灰オリーブ色(7.5Y6/2)	精良	口縁部1/9	蓮弁文
85	1区	水田2	青磁	碗	14.8			(6.0)	灰白色(5Y7/1)	精良	口縁部1/8	雷文
86	2区	水田2	染付	碗				(4.1)	明オリーブ灰(5GY7/1)	精良	体部1/8	網目文
87	2区	水田2	染付	碗				(2.4)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	体部片	
88	2区北	水田2	陶器	小皿				(2.0)	浅黄色(5Y7/3)	精良	口縁部片	美濃産
89	1区	水田2	青磁	皿				(2.0)	灰黄色(2.5Y6/2)	精良	口縁部片	竜泉窯産
90	1区	水田2	陶器	皿				(3.1)	灰オリーブ色(7.5Y5/3)	粗砂、細砂含む	口縁部片	瀬戸産、灰釉卸目付皿、後期IV新
91	2区北	水田2	備前焼	播鉢				(3.7)	黄灰色(2.5Y5/1)	粗砂、細砂含む	口縁部片	
92	1区南	水田2	備前焼	壺				(4.0)	灰白色(N7/)	粗砂、細砂含む	口縁部片	
93	2区	水田2	備前焼	播鉢			15.2	(2.4)	にぶい橙色(5YR6/4)	粗砂、細砂含む	底部1/5	
94	1区	水田2	須恵器	捏鉢				(5.0)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂、細砂含む	口縁部片	東播磨産
95	2区	水田2	土師器	鍋				(4.8)	にぶい黄橙色(2.5Y7/2)	粗砂、細砂含む	口縁部片	
96	2区	水田3	陶器	小杯			2.6	(2.4)	灰黄色(2.5Y7/2)	精良	口縁部欠	
97	2区	水田3	染付	小杯			3.2	(2.5)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	高台1/2	
98	2区	水田3	染付	小杯	6.8			(2.9)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部1/5	
99	2区	水田3	染付	小杯			3.0	(2.1)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部欠	
100	2区北	水田3	白磁	小碗	6.8		2.8	2.3	灰白色(5Y8/1)	精良	1/3	
101	2区	水田3	染付	小碗	7.2		3.0	3.2	灰白色(5Y8/1)	精良	1/6	
102	2区北	水田3	染付	小碗	7.3			(3.5)	灰白色(10Y7/1)	精良	口縁部1/6	雨降り文
103	2区	水田3	染付	小碗	9.0			(3.6)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	1/6	
104	2区	水田3	染付	碗			3.6	(1.3)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	高台1/3	氷裂文、角福
105	2区	水田3	染付	碗	10.8			(4.2)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部1/10	
106	1区	水田3	染付	碗				(3.4)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部片	網目文
107	2区	水田3	染付	碗				(4.2)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部片	
108	2区	水田3	陶器	碗			5.3	(1.5)	灰白色(5Y7/1)	粗砂、細砂含む	高台1/3	信楽産
109	2区	水田3	陶器	碗			4.7	(1.6)	生成色(10YR9/1)	精良	高台1/2	京都産、陶印「木下弥」
110	2区	水田3	陶器	碗	10.8			(5.2)	黒褐色(2.5Y8/1)	粗砂、細砂含む	1/6	鉄釉、肥前産
111	2区	水田3	陶器	碗			4.2	(1.5)	灰白色(10Y7/2)	粗砂含む	高台1/1	美濃産
112	2区	水田3	染付	皿				(2.3)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部片	
113	2区	水田3	染付	皿				(1.0)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	高台片	手描き五弁花文、「大明成化年製」
114	2区	水田3	染付	皿			8.0	(2.0)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	高台1/10	
115	2区北	水田3	染付	皿				(2.6)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部片	
116	2区北	水田3	染付	皿				(2.0)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部1/9	
117	2区	水田3	青磁	香炉	9.9			(1.9)	明オリーブ灰(5GY7/1)	精良	口縁部片	袴腰形
118	2区	水田3	染付	香炉	5.0	6.2		4.1	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	1/8	半筒形、秋草文
119	2区	水田3	白磁	花瓶				(2.9)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部1/7	
120	2区	水田3	白磁	油壺	3.0			(2.7)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口頸部のみ	
121	2区	水田3	染付	仏飯器	7.0			(2.4)	灰色(10Y6/1)	精良	口縁部1/4	雨降り文
122	2区	水田3	土師器		3.8		2.6	2.6	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、細砂含む	2/3	
123	2区	水田3	陶器	鉢				(3.8)	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂、細砂含む	口縁部1/7	肥前産、刷毛目文
124	2区	水田3	陶器	鉢				(4.5)	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂、細砂含む	口縁部片	肥前産
125	2区	水田3	備前焼	甕	15.6			(6.3)	灰褐色(5YR4/2)	粗砂、細砂含む	口縁部片	水屋甕
126	2区	水田3	備前焼	灯明皿	12.8			(2.1)	にぶい赤褐色(5YR5/3)	粗砂、細砂含む	1/8	油皿
127	2区	水田3	備前焼	灯明皿	11.4			(1.7)	灰色(5Y5/1)	粗砂、細砂含む	口縁部1/9	下皿
128	2区	水田3	備前焼	灯明皿	10.4			(1.6)	にぶい赤褐(2.5YR5/3)	精良	口縁部1/5	下皿
129	2区	水田3	備前焼	灯明皿				(1.5)	灰褐色(5YR4/2)	精良	高台1/4	下皿
130	2区	水田3	備前焼	灯明皿	8.8			(1.9)	灰褐色(7.5YR4/2)	粗砂、細砂含む	口縁部1/5	下皿
131	2区	水田3	備前焼	灯明皿				(1.5)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	粗砂、細砂含む	1/8	下皿
132	2区	水田3	陶器	灯明皿	8.6		2.8	1.5	灰オリーブ色(5Y6/2)	粗砂、細砂含む	1/3	信楽産
133	2区	水田3	土師器	小皿	7.8		6.3	1.4	明褐色(7.5YR7/2)	粗砂、細砂含む	1/7	
134	2区	水田3	土師器	小皿	7.5		5.8	0.9	灰白色(10YR8/2)	粗砂、細砂含む	1/5	
135	2区	水田3	土師器	小皿	8.0		6.9	1.5	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、細砂含む	1/7	
136	2区	水田3	瓦質土器	鍋				(3.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、細砂含む	口縁部片	
137	2区	水田4	白磁	紅皿	5.9		2.6	2.1	灰白色(5Y8/1)	精良	1/3	
138	2区北	水田4	白磁	小碗	5.8			(2.6)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部1/3	
139	2区北	水田4	白磁	小碗			2.9	(2.1)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部1/4	
140	2区	水田4	染付	小杯	6.8			(3.3)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部1/7	
141	2区	水田4	染付	碗	7.6			(3.1)	灰白色(10Y7/1)	精良	口縁部片	菊花文、四方禪文
142	2区	水田4	染付	碗				(2.8)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	口縁部片	菊花文

番号	地区名	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	保存	備考
					口径	最大径	底径	器高				
143	2区北	水田4	染付	碗	8.2			(3.6)	灰白色(2.5Y7/3)	精良	1/5	
144	2区	水田4	染付	碗			3.5	(2.6)	灰白色(5GY8/1)	精良	底部1/4	
145	2区	水田4	染付	碗	9.8			(4.5)	灰白色(10Y8/1)	精良	体部1/6	
146	2区	水田4	染付	碗	10.6			(4.4)	黄みの白色(5Y9/0.5)	精良	1/6	
147	2区	水田4	染付	皿			6.0	(1.5)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	高台1/5	
148	2区	水田4	陶器	椀			5.0	(2.2)	にぶい黄色(2.5Y7/2)	精良	底部1/3	京焼風、山水文
149	2区	水田4	陶器	椀			4.3	(2.6)	灰白色(5Y7/2)	精良	底部1/4	
150	2区北	水田4	陶器	椀			6.6	(1.3)	灰黄色(2.5Y7/2)	精良	高台3/4	鉄釉
151	2区	水田4	陶器	鉢				(4.3)	灰褐色(7.5YR4/2)	粗砂、細砂含む	口縁部片	
152	2区	水田4	陶器	植木鉢				(2.2)		精良	口縁部片	刷毛目文
153	2区	水田4	染付	合子蓋	7.2	8.0	8.0	(1.4)	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	精良	1/6	
154	2区	水田4	青磁	仏花瓶	7.8			(2.5)	オリープ灰(2.5GY6/1)	精良	口縁部1/6	
155	2区北	水田4	白磁	香炉	7.8	9.4	9.4	(1.6)	明オリープ灰(5GY7/1)	精良	口縁部片	半筒形
156	2区北	水田4	陶器	灯明皿	10.7		5.0	1.8	灰白色(2/5Y7/1)	精良	口縁部1/7	信楽産
157	2区北	水田4	備前焼	灯明皿	10.2			(1.3)	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂含む	口縁部片	油皿、塗り土
158	2区	水田4	備前焼	灯明皿	10.2			(1.3)	褐灰色(10YR4/1)	細砂含む	口縁部1/7	下皿
159	2区北	水田4	備前焼	灯明皿	9.8			(1.2)	赤褐色(10YR4/4)	精良	1/10	下皿

石製品

掲載番号	遺構名	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	時期	備考
			長さ	幅	高さ				
S1	河道1	石匙	5.6	4.7	0.5	13.7	サヌカイト	縄文時代	
S2	溝2	石包丁	8.5	3.8	0.7	31.8	サヌカイト	弥生時代	
S3	溝4	石鏝	1.9	1.7	0.3	0.9	サヌカイト	弥生時代	
S4	溝4		2.1	2.0	0.7	3.8	サヌカイト	弥生時代	石鏝未製品?
S5	溝4	石包丁	5.5	3.8	0.7	22.3	粘板岩	弥生時代	
S6	溝4	叩き石	7.2	6.7	5.5	390.5	流紋岩	弥生時代	磨石兼用
S7	溝4	砥石	12.8	9.6	4.5	784.2	細粒花崗岩	弥生時代	
S8	1区柱穴	石鏝	1.6	1.2	0.3	0.4	サヌカイト	弥生時代	先端部欠損
S9	2区灰白色土層	石鏝	1.7	1.5	0.2	0.5	サヌカイト	弥生時代	先端部欠損
S10	1区灰色土層	石鏝	2.2	1.6	0.3	0.6	サヌカイト	弥生時代	先端部欠損
S11	2区灰白色土層	石鏝	2.3	1.6	0.3	0.9	サヌカイト	弥生時代	先端部欠損
S12	2区灰白色土層	石鏝	2.0	1.2	0.3	0.6	サヌカイト	弥生時代	
S13	2区灰白色土層	石鏝	1.8	1.5	0.2	0.5	サヌカイト	弥生時代	先端部・基部欠損
S14	2区灰白色土層	石鏝	2.0	1.5	0.3	0.8	サヌカイト	弥生時代	
S15	2区灰白色土層	石鏝	2.6	1.5	0.4	1.6	サヌカイト	弥生時代	
S16	2区灰白色土層	石鏝	1.8	1.0	0.2	0.4	サヌカイト	弥生時代	基部一部欠損
S17	2区灰白色土層	石鏝	1.8	1.3	0.3	0.6	サヌカイト	弥生時代	先端部欠損
S18	2区灰白色土層	石鏝	2.5	1.3	0.2	0.8	サヌカイト	弥生時代	
S19	2区灰白色土層	石鏝	1.7	1.6	0.2	0.7	サヌカイト	弥生時代	非製品
S20	1区灰色土層	石鏝	2.5	1.8	0.5	1.6	サヌカイト	弥生時代	非製品
S21	1区灰色土層	石鏝	2.5	1.8	0.3	1.3	サヌカイト	弥生時代	非製品
S22	2区灰白色土層	石鏝	3.0	2.1	0.7	3.7	サヌカイト	弥生時代	非製品
S23	1区灰白色土層	石錐	3.9	1.5	0.4	2.3	サヌカイト	弥生時代	
S24	2区灰白色土層	石錐	3.7	2.3	0.6	5.8	サヌカイト	弥生時代	
S25	1区柱穴	石錐	3.8	1.4	0.5	2.8	サヌカイト	弥生時代	
S26	1区柱穴	石錐	3.5	1.1	0.3	1.3	サヌカイト	弥生時代	
S27	1区灰色土層	石錐	2.9	1.4	0.2	2.1	サヌカイト	弥生時代	刃部欠損
S28	2区灰白色土層	石錐	2.8	1.4	0.4	2.6	サヌカイト	弥生時代	刃部欠損
S29	1区灰白色土層	石錐	2.9	1.2	0.4	2.1	サヌカイト	弥生時代	刃部欠損
S30	2区灰白色土層	石錐	3.0	1.0	0.4	1.2	サヌカイト	弥生時代	基部欠損
S31	2区灰白色土層	石錐	2.7	1.4	0.4	1.5	サヌカイト	弥生時代	刃部欠損
S32	2区灰白色土層	楔形	3.1	1.9	0.9	5.9	サヌカイト	弥生時代	
S33	2区灰白色土層	楔形	2.9	2.0	0.8	4.8	サヌカイト	弥生時代	
S34	2区灰白色土層	楔形	3.1	3.0	0.7	6.4	サヌカイト	弥生時代	
S35	2区灰白色土層	楔形	2.3	2.0	0.6	3.2	サヌカイト	弥生時代	
S36	2区灰白色土層	楔形	2.1	2.0	0.6	3.0	サヌカイト	弥生時代	
S37	2区灰白色土層	楔形	2.0	2.0	0.6	2.6	サヌカイト	弥生時代	
S38	2区灰白色土層	楔形	2.2	2.0	0.7	3.2	サヌカイト	弥生時代	
S39	2区灰白色土層	楔形	2.4	2.4	0.9	4.4	サヌカイト	弥生時代	
S40	1区柱穴	楔形	3.0	3.0	1.1	5.1	サヌカイト	弥生時代	

掲載 番号	遺構名	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	時期	備考
			長さ	幅	厚さ				
S41	1区灰白色土層	楔形	4.2	3.7	2.2	31.1	サヌカイト	弥生時代	
S42	1区灰白色土層	楔形	4.7	2.5	1.5	14.3	サヌカイト	弥生時代	
S43	1区灰色土層	石包丁	9.0	5.0	0.9	58.8	サヌカイト	弥生時代	
S44	1区灰白色土層	石鍬	11.5	4.7	1.3	54.0	緑色片岩(結晶片岩)	弥生時代	
S45	1区灰白色土層	残核	10.8	3.2	2.0	49.4	サヌカイト	弥生時代	
S46	1区灰色土層	石錘	9.5	8.0	5.0	572.2	細粒花崗岩	弥生時代	叩き石を転用
S47	2区灰白色土層	砥石	10.0	9.3	4.1	583.9	流紋岩(石英斑岩)	弥生時代	
S48	土壌4	砥石	23.5	11.2	8.0	2480.0	流紋岩	室町時代	
S49	土壌9	砥石	6.9	3.9	1.5	69.1	細粒砂岩	江戸時代	
S50	2区暗灰色土層	基石	2.2	2.2	0.5	3.6	粘板岩	江戸時代	
S51	2区黄灰色土層	基石	2.2	2.2	0.6	4.1	粘板岩	江戸時代	

土製品

掲載 番号	遺構名	器種	量 (cm)				重量 (g)	色調	胎土	時	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径					
C1	1区暗灰色土層	円板	5.6	(3.0)	0.9		(22.5)	うすい灰色	精良	江戸時代	肥前染付腕底部片打ち欠き
C2	1区暗灰色土層	円板	4.0	4.0	1.3		19.0	うすい灰色	精良	江戸時代	肥前染付腕底部片打ち欠き
C3	2区暗灰色土層	円板	3.3	3.2	0.5		8.4	灰赤色	精良	江戸時代	備前焼徳利体部片打ち欠き
C4	1区暗灰色土層	円板	4.6	4.6	0.9		19.3	明オリーブ灰色	精良	江戸時代	肥前磁器腕底部片打ち欠き
C5	1区暗灰色土層	円板	4.6	4.4	1.1		17.8	うすい灰色	精良	江戸時代	肥前染付腕底部片打ち欠き
C6	2区暗灰色土層	円板	4.6	4.0	1.7		29.3	灰色	精良	江戸時代	平瓦片打ち欠き
C7	1区暗灰色土層	人形	4.0	2.9	(2.9)		(24.6)	鈍い橙色	粗砂	18世紀後半	天神、軟質陶器
C8	1区暗灰色土層	人形	(4.5)	3.0	2.2	0.8	(22.3)	鈍い橙色	細砂	18世紀前半	虚無僧、軟質陶器、底面刺突
C9	1区暗灰色土層	土錘	(3.6)	1.2		0.4	(3.8)	鈍い黄橙色	細砂	江戸時代	管状
C10	1区暗灰色土層	土錘	(3.6)	1.0		0.4	(3.5)	鈍い赤褐色	細砂	江戸時代	管状
C11	1区暗灰色土層	土錘	(4.8)	1.0		0.4	(3.6)	鈍い橙色	細砂	江戸時代	管状
C12	2区黄灰色土層	円板	3.1	2.6	0.7		7.2	灰白色	細砂	江戸時代	関西系陶器瓶体部片打ち欠き
C13	2区黄灰色土層	円板	2.8	(2.0)	0.5		(4.1)	うすい灰色	精良	江戸時代	肥前染付腕底部片打ち欠き
C14	2区黄灰色土層	円板	2.5	2.3	0.4		3.2	うすい灰色	精良	江戸時代	肥前染付腕底部片打ち欠き
C15	2区黄灰色土層	円板	3.1	3.1	0.8		7.0	黄みの白色	精良	江戸時代	肥前染付腕底部片打ち欠き
C16	2区黄灰色土層	人形	(6.8)	3.3	2.3	1.2	(33.7)	鈍い黄橙色	粗砂	19世紀～	虚無僧、軟質陶器、底面刺突
C17	2区黄灰色土層	軒丸瓦	(8.2)	(2.2)	(1.0)		(24.3)	暗灰黄色	精良	18世紀前半	左巻き三巴?、珠文径1.1cm
C18	2区黄灰色土層	軒平瓦		3.4	1.5		(7.5)	暗灰色	精良	18世紀後半	左巻き三巴・唐草文

金属製品

掲載 番号	遺構名	器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			長さ	幅	厚さ				
M1	2区灰白色土	不明金具	3.7	4.1	0.6	(14.8)	鉄	室町～江戸時代	両端折り曲げ
M2	2区灰白色土	不明金具	4.2	4.0	0.6	(16.2)	鉄	室町～江戸時代	両端折り曲げ
M3	2区灰白色土	釘	(5.4)	1.1	1.3	(6.3)	鉄	室町～江戸時代	頭部折り曲げ
M4	2区灰白色土	楔?	4.5	1.7	1.0	18.4	鉄	室町～江戸時代	
M5	2区灰色土	馬鍬先	21.5	2.3	1.6	129.3	鉄	江戸時代	
M6	2区灰色土	刀子	(4.0)	1.7	0.5	(6.0)	鉄	江戸時代	刃部片
M7	1区暗灰色土	釘	(3.5)	(0.7)	(0.8)	(1.8)	鉄	江戸時代	頭部折り曲げ
M8	1区暗灰色土	釘	(4.2)	0.7	0.4	(1.3)	鉄	江戸時代	頭部折り曲げ
M9	2区暗灰色土	釘	(5.0)	0.4	0.3	(1.5)	鉄	江戸時代	
M10	1区暗灰色土	釘	4.3	0.5	0.6	1.1	鉄	江戸時代	頭部折り曲げ
M11	1区暗灰色土	釘	1.6	0.5	0.5	0.8	鉄	江戸時代	
M12	1区暗灰色土	釘	2.3	0.7	0.4	1.0	鉄	江戸時代	
M13	2区暗灰色土	鋸先	(12.4)	(5.8)	(2.1)	(114.7)	鉄	江戸時代	鍛造
M14	2区側溝	煙管	5.1	0.9		3.0	銅	江戸時代	吸口



1 河道1 (北西から)



2 河道1 土層断面 (南東から)

図版 2



1 河道2 (北西から)



2 河道2土層断面 (北から)



1 溝2・4 (北から)



2 溝4土層断面 (北西から)

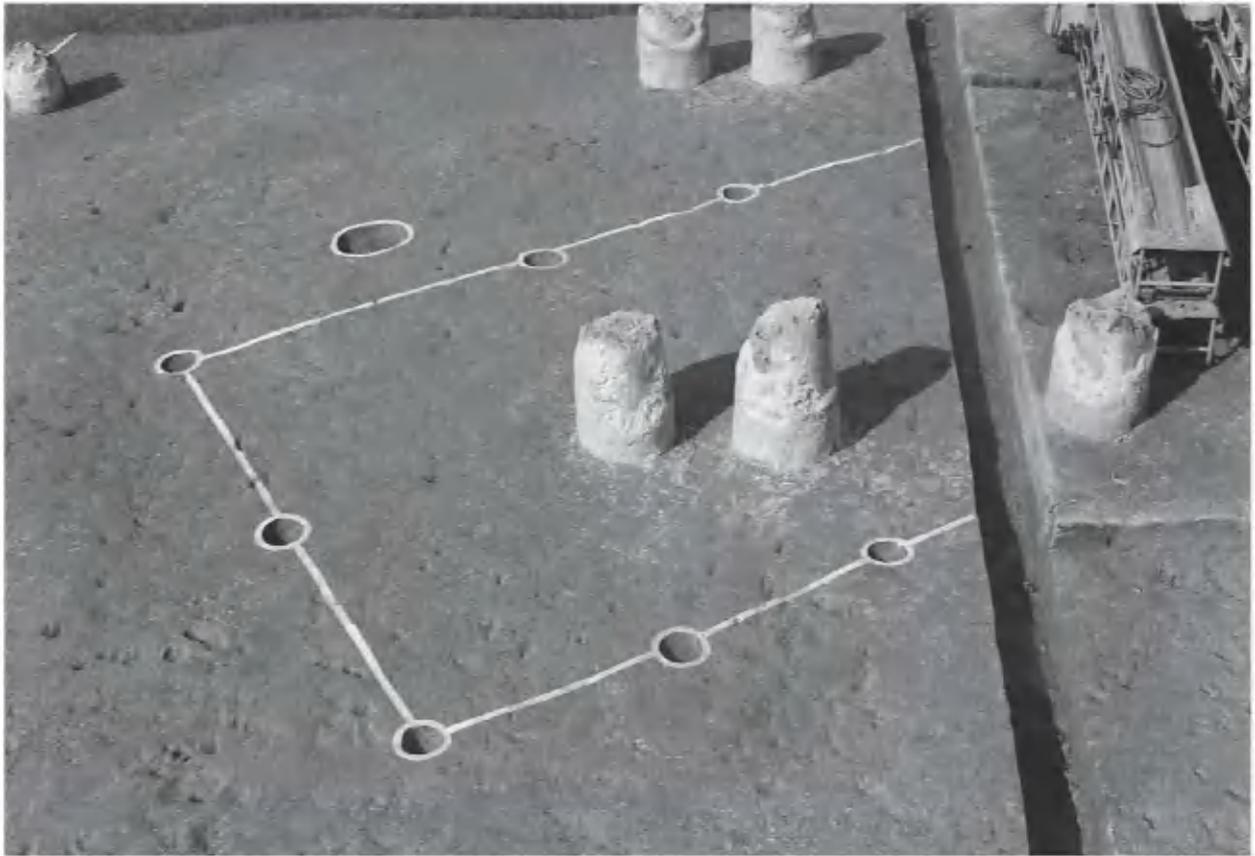
図版 4



1 中世以前の遺構検出状況 1 (北から)



2 中世以前の遺構検出状況 2 (北西から)



1 掘立柱建物2 (南東から)



2 溝1 (北から)



3 土壇2 (北東から)



4 土壇3 (南東から)

図版 6



1 土壇 5 (西から)



2 土壇 6 (東から)



3 土壇 7 (南西から)



4 土壇 10 (南から)



5 水田 1 (北西から)

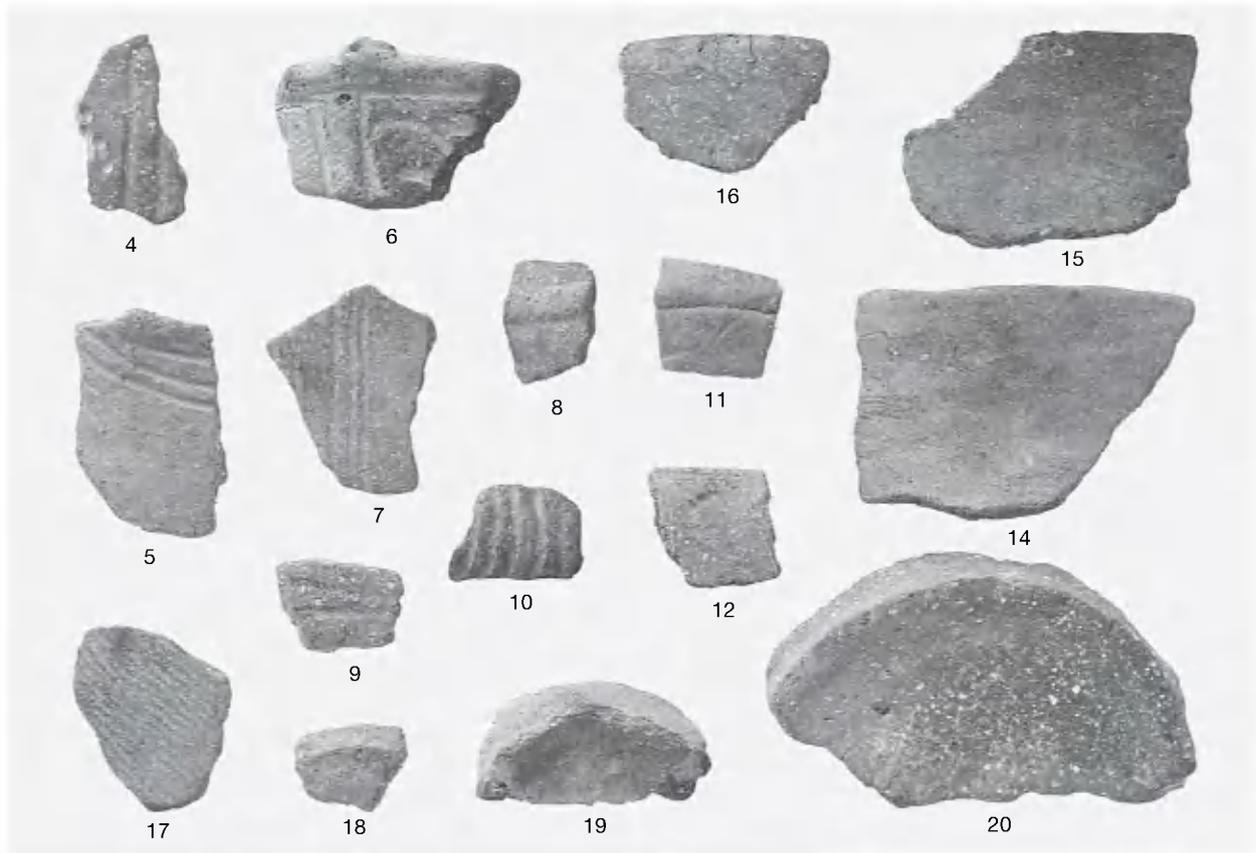


1 水田 3 (北西から)

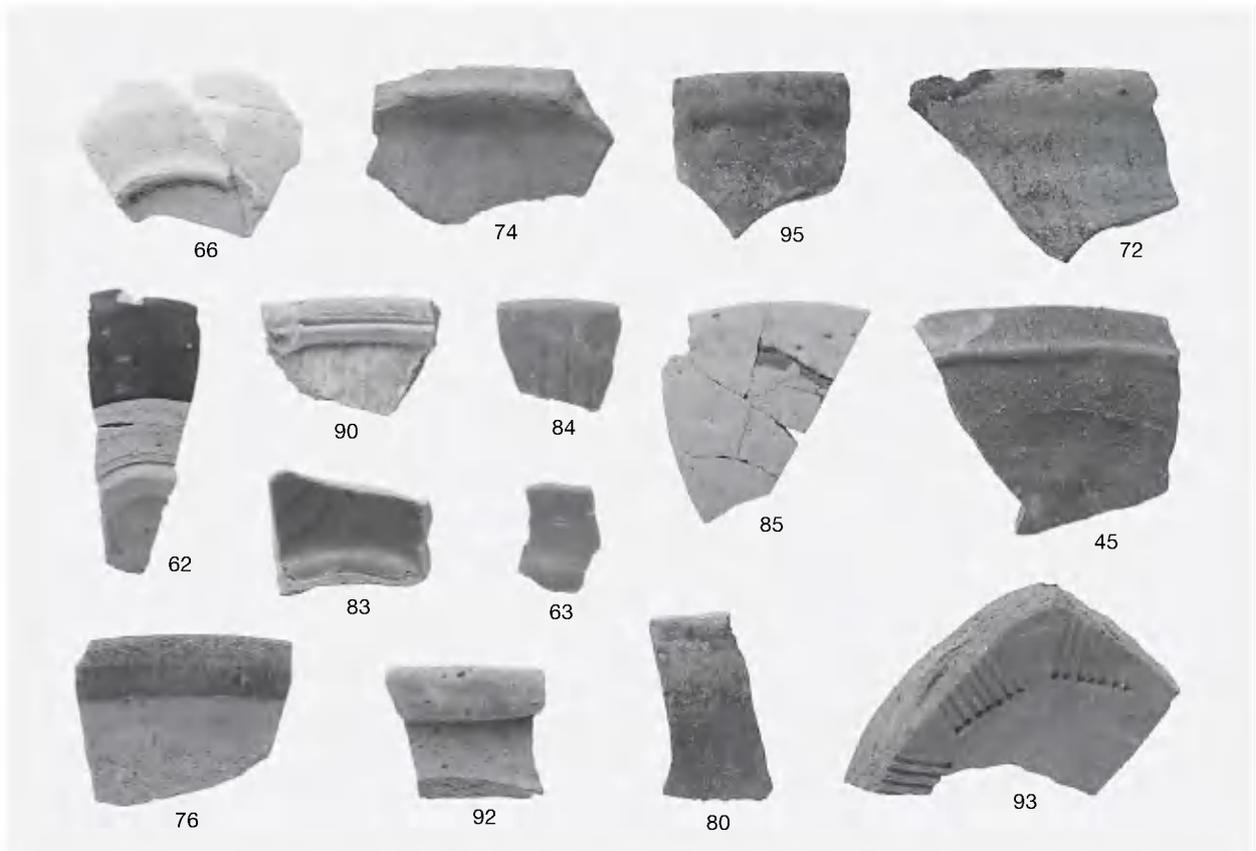


2 水田 3 (北西から)

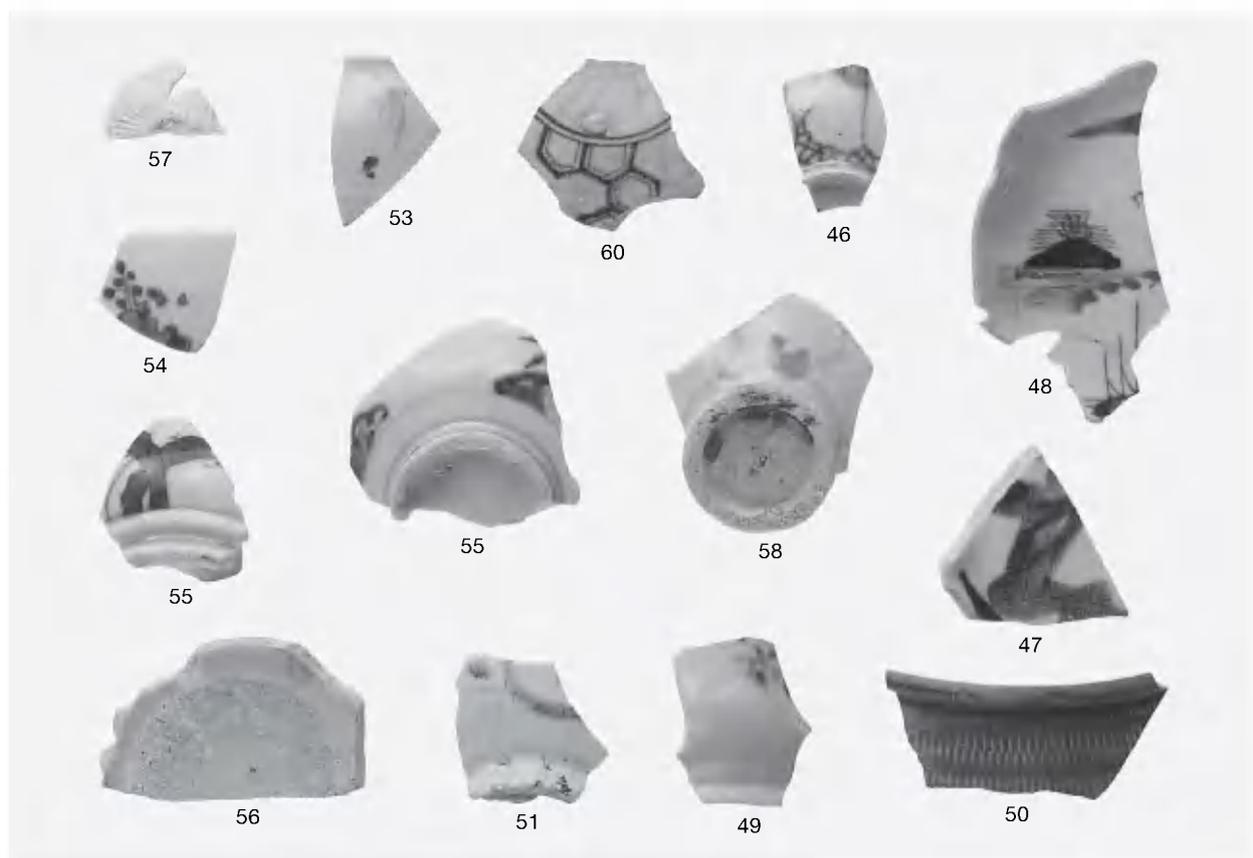
図版 8



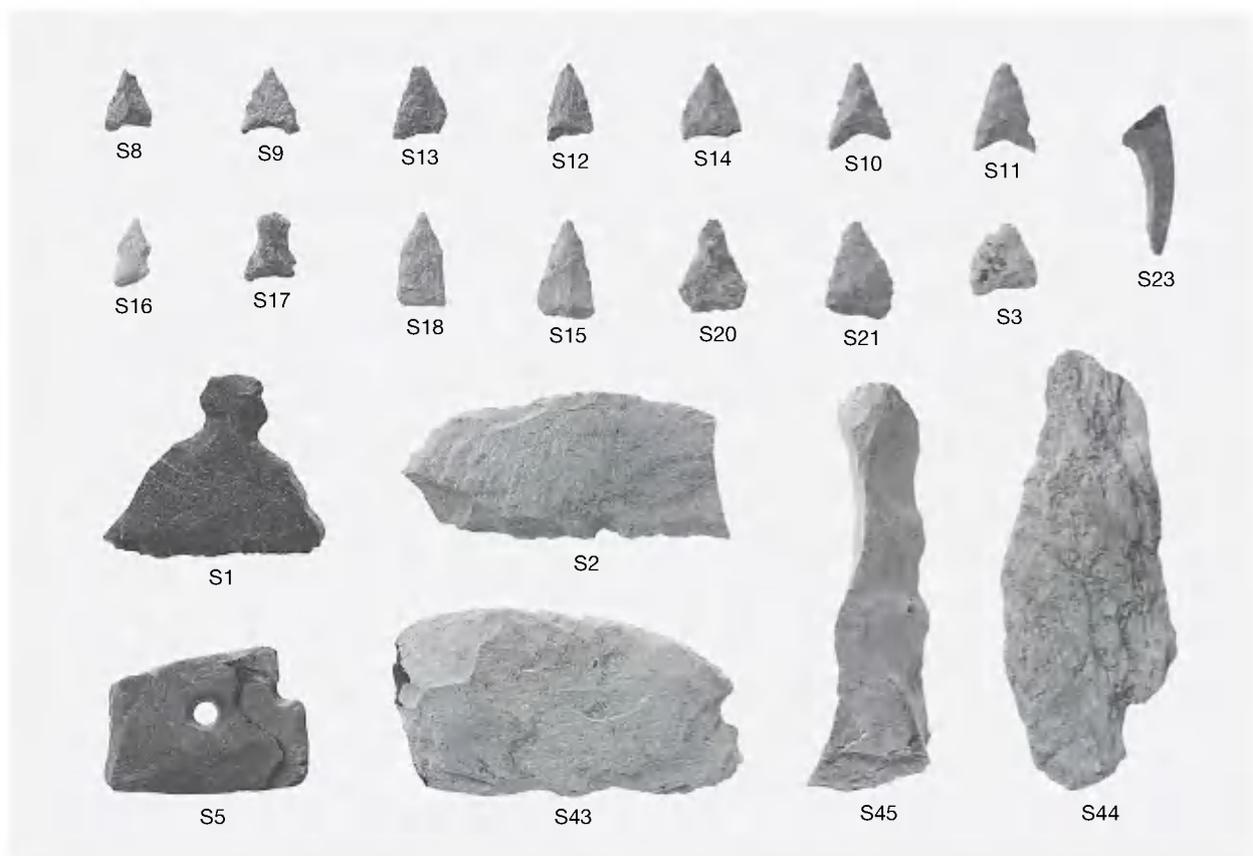
1 縄文土器



2 中世の土器・陶磁器

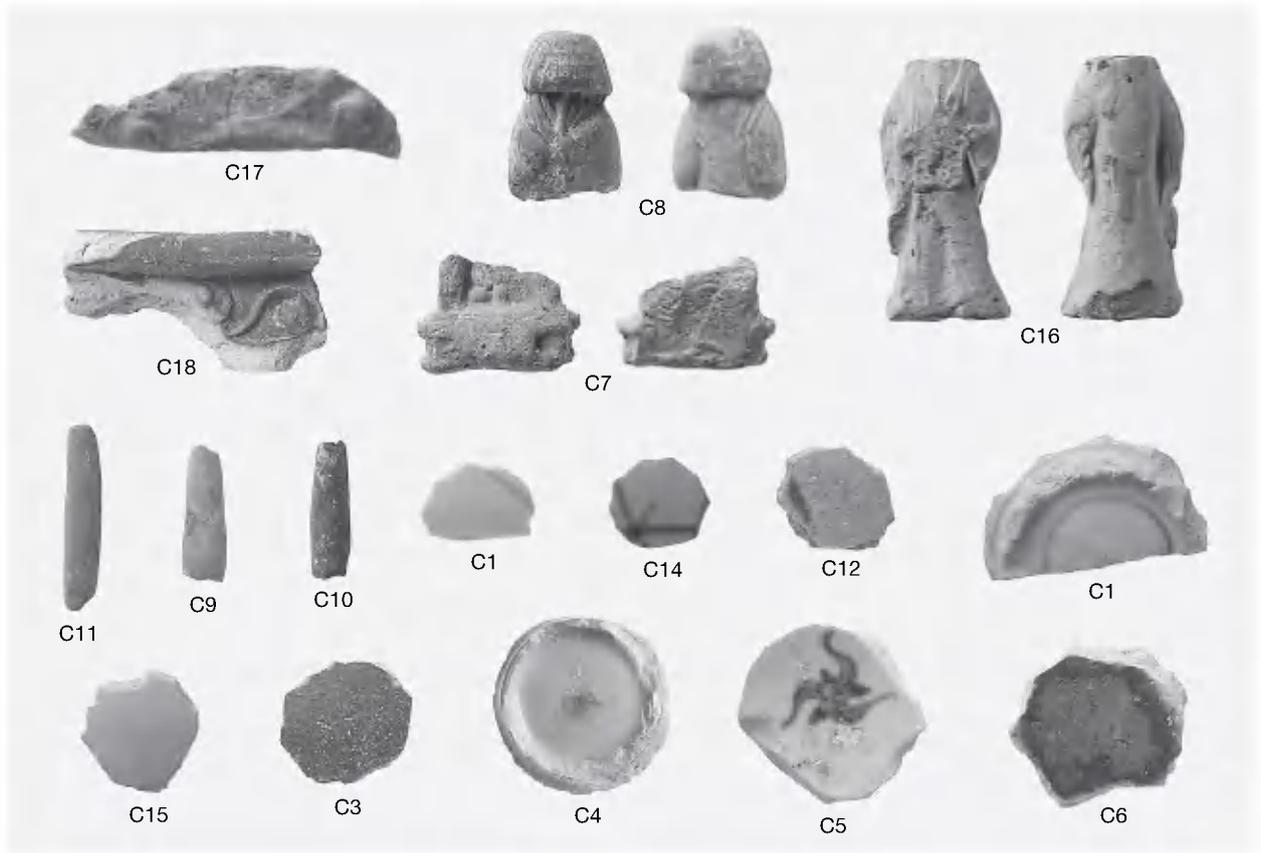


1 近世・近代陶磁器

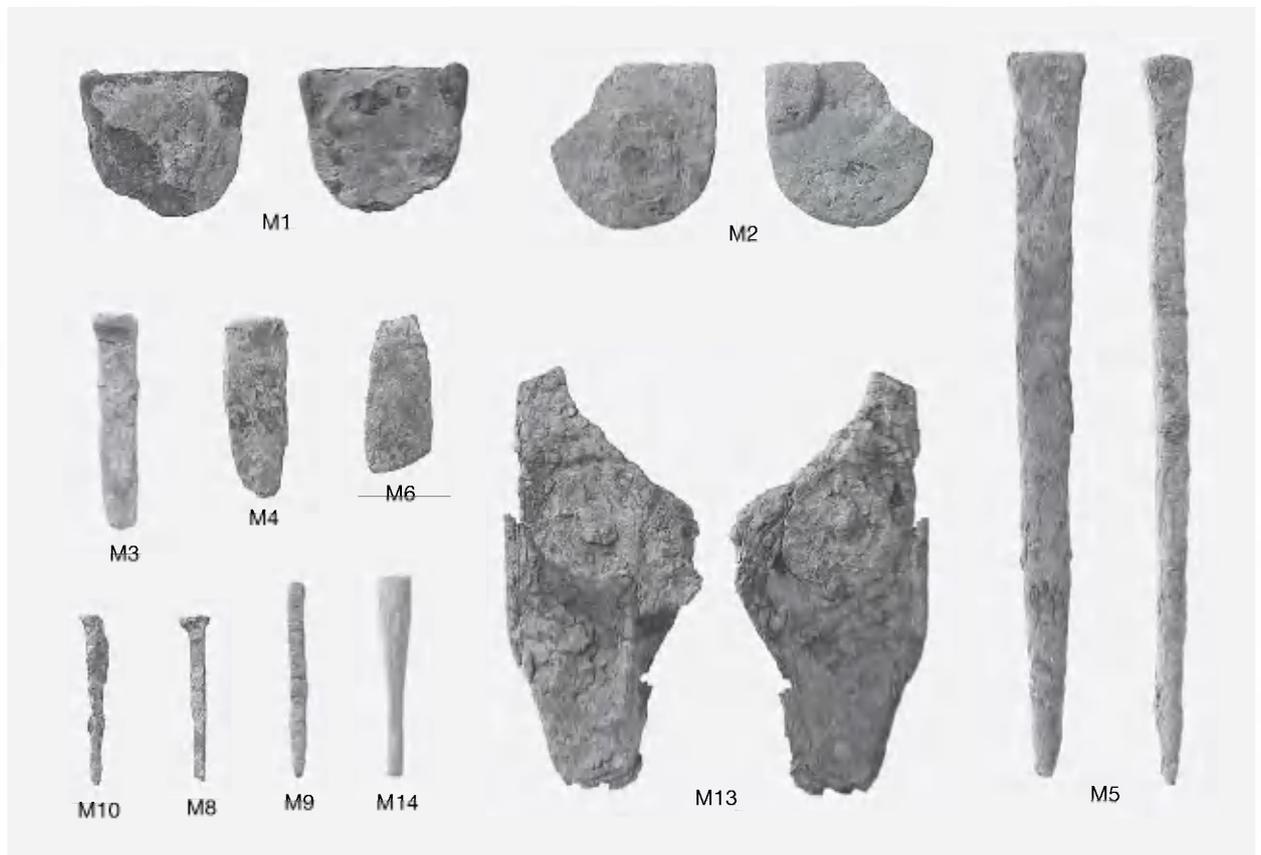


2 石製品

図版 10



1 土製品



2 金属製品

報告書抄録

ふりがな	たますたなかいせき							
書名	田益田中遺跡2							
副書名	独立行政法人国立病院機構岡山医療センター病棟等新築整備工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	231							
編著者名	亀山行雄 杉山一雄 和田 剛 川島正嗣							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL086-293-3211 URL http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm							
発行機関	独立行政法人国立病院機構岡山医療センター 岡山県教育委員会							
所在地	〒701-1192 岡山県岡山市北区田益1711-1 TEL086-294-9911 〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北, 緯 ° ' "	東, 経 ° ' "	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たますたなかいせき 田益田中遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 北区田益 1711-1ほか	33101	332011261	34° 42' 28"	133° 53' 57"	20090401 ~ 20090731 20100104 ~ 20100226	1,481 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
田益田中遺跡	集落 生産	縄文時代		河道2条		縄文土器・石器		イネのプラ ントオパー ルを検出
		弥生時代		土壇2基・溝4条		弥生土器・石器		
		古墳~室町時代		掘立柱建物2棟・土 壇1基		土師器・須恵器・陶 器・磁器		
		江戸時代		土壇8基・溝1条・ 水田4面		陶器・磁器		
要 約	平成7~9年に発掘調査を実施した国立岡山病院調査区の南西にあたる。前回検出した縄文時代の河道や弥生時代前期の溝、中世の建物のほか、条里制地割りに従う中世~近世の水田跡を確認している。また、奈良時代のものと思われる製鉄関連遺物は、周辺の丘陵部に展開する製鉄遺跡とのかかわりが推測される。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 231

田益田中遺跡 2

独立行政法人国立病院機構岡山医療センター
病棟等新築整備工事に伴う発掘調査

平成23年3月11日 印刷

平成23年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3

発行 独立行政法人国立病院機構
岡山医療センター
岡山市北区田益1711-1

岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2